

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

現代日本語における助詞「に」の研究
—並立助詞・接続助詞・複合辞の「に」を中心に—

安 祥希

2016 年度

【目次】

第1章 序論

1.1 本研究の背景と目的	1
1.2 本研究の立場	4
1.3 本研究の構成と各章の概要	5

第2章 先行研究

2.1 はじめに	8
2.2 助詞「に」に関する先行研究	8
2.2.1 国立国語研究所（1951）	8
2.2.2 国広（1962）	10
2.2.3 森田（1980）	11
2.2.4 和氣（2002、2006）	13
2.3 並立助詞「に」に関する先行研究	15
2.3.1 国広（1967）	16
2.3.2 森野（1973）	17
2.3.3 中俣（2015）	18
2.4 接続助詞「に」に関する先行研究	21
2.4.1 山口（1980）	21
2.4.2 此島（1983）	22
2.4.3 京極（1987）	23
2.5 複合辞を形成する「に」に関する先行研究	24
2.5.1 松木（1992）	25
2.5.2 田中（2010）	26
2.6 本章のまとめ	27

第3章 並立助詞の「に」

3.1	はじめに	29
3.2	先行研究の概観	30
3.3	先行研究の問題点	32
3.4	名詞の入れ替えが不可能な「に」の位置付け	35
3.5	典型的並立助詞「に」の機能	38
3.6	例示を表す並立助詞「に」	39
3.7	「に例示句」の文内での位置	45
3.8	並立助詞「に」の2用法	47
3.9	本章のまとめ	49

第4章 接続助詞の「に」

4.1	はじめに	52
4.2	動詞終止形を承ける「に」に関するコーパス調査	55
4.3	動詞終止形に後接する2種類の「に」	57
4.3.1	接続助詞の「に」	57
4.3.2	副詞節マーカ―の「に」	62
4.3.3	まとめ	66
4.4	動詞終止形に後接する「に」の関係性	66
4.5	本章のまとめ	68

第5章 複合辞を形成する「に」

5.1	はじめに	71
5.2	「はずみに」の構造と意味―「はずみで」との比較	72
5.2.1	問題のありか	72
5.2.2	先行研究の概観	73
5.2.3	「はずみに」と「はずみで」の文法的機能から見た内部構造	77
5.2.3.1	「Nの{はずみに／はずみで}」	78
5.2.3.2	「ガ／ノ」交替	79
5.2.4	「はずみに」と「はずみで」の意味解釈の違い	81

5.2.5	まとめ	86
5.3.	複合辞「うえに」の検討	86
5.3.1	問題のありか	86
5.3.2	先行研究の概観	87
5.3.2.1	田中（1999、2001）	87
5.3.2.2	馬場（2005）	89
5.3.2.3	長谷部（2013）	90
5.3.2.4	まとめ	92
5.3.3	「うえに」の内部構造	93
5.3.3.1	名詞接続	93
5.3.3.1.1	動作性名詞との共起	93
5.3.3.1.2	非動作性名詞との共起	97
5.3.3.2	「ガ／ノ」交替	101
5.3.4	「に」の位置付け	102
5.3.5	まとめ	107
5.4	本章のまとめ	107

第6章 「兼ねる」類文と共起する「に」

6.1	はじめに	110
6.2	「兼ねる」類	111
6.3	先行研究の概観	112
6.3.1	村木（1983、1991）	113
6.3.2	和氣（2006）	115
6.3.3	まとめ	117
6.4	〈N ₁ ヲN ₂ ニ〉構文と〈資格〉ニ句との比較	117
6.5	資格の「に」の可能性について	119
6.6	本章のまとめ	122

第7章 現代日本語における「に」の様相

7.1	はじめに	123
-----	------	-----

7.2 「に」の用法の広がり	124
7.3 格助詞と「に」同士の関係性	126
7.4 本章のまとめ	130

第8章 結論

8.1 本研究の問題意識と各章のまとめ	131
8.2 今後の課題および展望	135

参考文献	138
------	-----

各章と既発表論文との関係	148
--------------	-----

第1章 序論

1.1 本研究の背景と目的

意味領域を広く持つ「に」は、格助詞、並立助詞、接続助詞といった助詞の下位範疇や副詞語尾、複合辞など、様々な文法範疇にまたがって用いられる。しかし、従来の「に」の研究は、格助詞「ニ」の意味役割を詳しく分類することに主眼を置いた記述が中心であった¹。実際、森田（1980）、清水（1987）、益岡（1987）、城田（1993）、菅井（2000、2001ab）、森山（2008）など、格助詞「ニ」の多様な意味・用法を統一的に説明しようと試みるものが多い。

そのためか、格助詞「ニ」を中心に置いて考えた場合のその外側、もしくは、隣接する「に」そのものに対する言及は決して多いとは言えない。例えば、並立助詞「に」について踏み込んだ研究は見当たらず、「と」や「や」など、他の並立助詞と並行的に捉えた場合の記述に留まっている。また、接続助詞の「に」は、動詞終止形に後接する「に」（「思うに」「察するに」など）については、詳細な分析を行わず、同類のものとして扱うことがほとんどである。さらに、複合辞の研究に目を向けてみると、「に」をともなって現れるものに対し、それらすべてを一語化したもの（松木 2011、村木 2012 など）、もしくは、一律に格助詞の「ニ」が付されたもの（田中 1999、田中 2001、田中 2010 など）として捉える研究が少なからず見受けられる。しかし、「に」の記述という観点から複合辞を見る場合、個々の要素において、「に」がその意味・機能を保持しているのか、一語化の度合いはどの程度なのか、などの議論を積み上げていく必要がある。

¹ 形式としての「に」については「に」と、格助詞を示す場合は「ニ」と表記する。

このように、格助詞とは捉えられない、もしくは、捉えにくい「に」については、十分な研究が蓄積されているとは言いがたい。

以上を背景とし、本研究では次のような「に」を取り上げる²。

- (1) 牡丹に唐獅子、竹に虎 (国広 1962:86)
- (2) カーディガンにスラックスの女 (国広 1967:35)
- (3) 「まあ、護摩の灰に雲助に、旅先にゃ不逞の連中が多いからね。能く有ることさ」 [規き小平次 2005]

(1) と (2) はこれまで並立助詞とされてきたもの、(3) は並立助詞の条件を満たすが、従来の研究では取り上げられることのなかったものである。

また、以下の (4) と (5) は、ともに動詞終止形を承ける「に」であるが、(4) は現代語では衰退されたとされてきたもの、(5) は副詞とされてきたものである。

- (4) ～後述する『日本書紀』応神天皇 21 年の記録等を勘案するに、この当時一般的であったのは後者の方であったろう。
(『三重の地酒』 <http://www.mienokanbai.jp/jizake/>)
- (5) 僕が思うに、七十二、三歳までは十分働けると思います。
[わたしの新幸福論 2002]

以下の (6) と (7) は、複合辞を形成する「に」である。

² 用例の出典の表記については、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」からの場合は「[書籍名/年度]」で統一する。検索には中納言を用いた。出典が示されていないものは作例である。それ以外からの用例については、「青空文庫」の用例には「青」、「NINJAL-LWP for TWC (NLT)」の用例には「N」、「聞蔵ビジュアルⅡ (朝日新聞)」からの用例には「朝」と付け、区別する。(4) のような、インターネットから収集した用例については、アドレスを明記する。全ての用例における下線は、筆者による。なお、見やすさのため、適宜改行を入れたものもある。

(6) だがそのとき長正は全身の緊張が弛んだ弾みに重大な落とし物をした
ことに気がつかなかった。 [西郷斬首剣 2004]

(7) 次郎が来たうえに、三郎までやってきた。 (馬場 2005 : 34)

そして、(8) は寺村 (1991) で並立助詞とされている「兼ねる」と共起する「に」である。

(8) 山崎医院は産科に内科を兼ねている。 (寺村 1991:206)

通時的・共時的観点を問わず、上述した「に」について言及している先行研究は、これらの「に」を格助詞「ニ」と連続するものとして扱っている (国広 1962、国広 1967、青木 1977、山口 1980、京極 1987、吉井 1989、田中 2010、村木 2012、田中 2014 など)。

しかし、(1) ~ (8) における「に」のすべてを、現代語において格助詞「ニ」と連続するものとして捉えることが本当に妥当なのか。このような問いに基づいて様々な「に」が、現代語において、どのような関係性を有しているかを体系的に論じた研究は未だ見られない。「に」を十全に記述するためには、典型的な格助詞のみならず、その周辺にある「に」も視野に入れて記述を行う必要があると言える。

そこで、本研究では、通時的・共時的に格助詞「ニ」と関係性を有するとされる様々な「に」を取り上げて、それぞれが現代日本語においてどの程度の関係性を持っているのかを記述することで、現代日本語における「に」の様相を明らかにすることを目的とする。具体的には、従来の研究ではあまり扱われてこなかった格助詞「ニ」と隣接する、もしくは、その周辺に存在する「に」として位置付けられる並立助詞、接続助詞、複合辞を形成する「に」、「兼ねる」類文と共起する「に」を取り上げて、分析を行う。

本研究の主たる論点は以下の3点である。

1) 現代日本語における「に」がいかに用法の広がりを持つのか。

- 2) 格助詞「ニ」と繋がりを持つとされてきた「に」が、どの程度関係を有するのか、もしくは、有さないのか。
- 3) 格助詞「ニ」とその周辺に存在する「に」、また、周辺に存在する「に」同士の間に見られる関係性はいかなるものか。

以上の3点を明らかにすることで、今後、共時的に見た場合の「に」はもちろん、「に」を通時的にどう捉えるべきかを考えるための基盤を作ることができると考える。

1.2 本研究の立場

従来の「に」の研究は、格助詞「ニ」の記述が中心であり、それ以外の「に」についての分析は十分とは言えない。様々ある「に」については現れる環境に関係なく、格助詞「ニ」を出自とし、そこから転成・転化、もしくは、派生したものとされてきた。しかし、通時的にはそうであったとしても、現代日本語においては、「に」の用法はかなりの広がりを見せており、もはや、格助詞「ニ」と連続的な関係にあるものとして記述しない方が良い「に」が存在する可能性も十分にある。したがって、現代日本語における「に」を十全に記述するためには、様々な「に」を包括的に扱い、個々の「に」を一つ一つ位置付けながら全体像に迫っていく必要がある。

従来の研究は、格助詞とは捉えにくい「に」を扱う場合でも、格助詞「ニ」側からの視点でアプローチしてきた。しかし、詳しくは第2章で述べるが、そのような研究も和氣（2002、2006）以降は十分な成果を出しているとは言いがたい。これは、現代日本語の「に」の全体像を記述するためには、従来の研究とは異なる観点からのアプローチが必要になっていることを意味しているものと思われる。

このような現状のなか、従来の研究とは異なるアプローチとして、本研究では、並立助詞、接続助詞、「に」を構成要素とする複合辞、「兼ねる」類文と共起する「に」という、格助詞「ニ」を頂点とした場合の底辺に当たる部分に位置付けられるようなものから取り組んでいくという方法を試みる。つまり、格助詞「ニ」そのものではなく、周辺の「に」から見ていくのである。このような方法は、一見すると、遠回りのようにも見えるが、「に」に対する格助詞「ニ」から

のアプローチが出尽くしてしまった現在であるからこそ、試みる価値があると考ええる。

1.3 本研究の構成と各章の概要

本研究は、全8章からなる。各章の概要は以下の通りである。

第1章 序論

第2章 先行研究

第3章 並立助詞の「に」

第4章 接続助詞の「に」

第5章 複合辞を形成する「に」

第6章 「兼ねる」類文と共起する「に」

第7章 現代日本語における「に」の様相

第8章 結論

第1章では、研究の背景と目的について言及したうえで、本研究の立場を述べ、本論文の構成を示した。

第2章では、助詞「に」を総合的に捉えている研究、および、並立助詞「に」、接続助詞「に」、複合辞の構成要素の「に」に関する研究を概観し、その問題点を指摘する。

第3章では、並立助詞の「に」について論じる。従来、並立助詞「に」とされてきたもののなかには、典型的な並立助詞の特徴を有さないものが混在しているが、それらを十分な検討を行わずに、一括して並立助詞として扱う傾向にあった。また、用法の分類に関しては、明確な基準がないことも指摘できる。本章では、従来の研究が並立助詞「に」としてきた用例を再検討し、そのなかに格助詞「ニ」と扱うべきものが混在していることを指摘する。加えて、並立助詞を認定する2つの基準（「名詞の入れ替え」「全体で1つの名詞として機能する」）を設け、これに従い、用法を2つに分ける。そのうち、今まで言及されることのない最後の名詞に「に」が付く用法については、不定的同格構造、および、並立助詞「と」と比較しながら考察を行う。

第4章では、接続助詞の「に」について論じる。接続助詞「に」は、従来の研究で衰退していることが指摘されているが、現代日本語においても接続助詞「に」として機能しているものが存在することを明らかにする。具体的には、「要するに」、「思うに」類、「勘案するに」類について検討を行う。「要するに」と「思うに」類は、辞書に「副詞」と記載されており、同類のものとして扱われる。一方、「思うに」類と「勘案するに」類は、「僕が思うに」「歴史を勘案するに」のように節相当のものに「に」が後接するという共通性を持っており、一見、同じような構造を持つように見える。本章では、4つのテスト（「ガ格が取れる」「ガ格以外の項を節内を取れる」「他の接続助詞との置き換え」「マス形への変化」）から、「要するに」と「思うに」類が同じように扱われることには問題があること、また、「思うに」類と「勘案するに」類は、異なる構造を有していることを明らかにし、「勘案するに」類の「に」は接続助詞として、「思うに」類の「に」は副詞節マーカ―の「に」として、「要するに」の「に」は副詞語尾の「に」として、それぞれの「に」の機能が異なることを論じる。さらに、動詞終止形に後接するこれらの「に」には、前接要素の節性という点で連続性が見て取れることを主張する。

第5章では、「際に」「すえに」など、様々な語と結合して機能する複合辞を形成する「に」について論じる。本章では、そのなかでも、「はずみに」と「うえに」を取り上げる。「はずみに」は、従来、「はずみで」とともに複合辞とされ、両者の意味用法も同様のものとして扱われてきた。しかし、構文的にも意味的にも同じものとは捉えられないことを指摘し、「はずみに」は複合辞であるが、「はずみで」は複合辞とは捉えられないこと、「はずみに」は時の「に」と関連付けて捉えられることを主張する。次に、「うえに」に関する議論では、「うえに」は複合辞としての用法が2つあるとされてきたが、一方は複合辞としての用法、もう一方は、名詞「うえ」と格助詞「ニ」の構成を成していることを論じる。また、この「ニ」は、場所の「ニ」と捉えられることを主張する。従来の研究では、形式と意味が類似するもの、もしくは、一形式内の用法については、十分な根拠を挙げず、複合辞として認定してきた。しかし、本研究では、「はずみに」と「うえに」の議論から、意味と形式が類似するものであっても、あるいは、形式を同じくする2つの用法であっても、複合辞として認定できるかどうかは別に

検討しなくてはならず、複合辞の認定に関しては個々の語について議論を要すること、また、複合辞を形成する「に」に関しても、一律に格助詞か否かで捉えるのではなく、複合辞ごとに「に」の性質を論じる必要があることを主張する。

第 6 章では、第 3 章の並立助詞の記述を踏まえ、統語範疇が明らかでない「兼ねる」類文と共起する「に」の位置付けについて論じる。「兼ねる」類文と共起する「に」は、先行研究において並立助詞とされてきたが、第 3 章で示した並立助詞としての認定基準（「名詞の入れ替えが可能」）を満たさず、格助詞「ニ」とも相違するものと捉えられる。本章では、このような「兼ねる」類文と、類似点を有する〈N₁ヲ N₂ニ〉構文（村木 1983、1991）、〈資格〉ニ句（和氣 2006）との比較を行い、「兼ねる」類文と共起する「に」がこれまで指摘されているどの「に」とも異なるものであることを主張する。本章の「兼ねる」類文と共起する「に」は、第 5 章で検討した「はずみに」と関連する時の「に」などとともに、既存の「に」に関する枠組みでは捉え切れないような類いの「に」がまだ複数存在する可能性を示唆するものとして位置付けられる。

第 7 章では、これまでの議論に基づき、現代日本語における「に」がどのような様相を呈するのかについて論じる。従来は、格助詞「ニ」を中心に置いて、それからの派生や転化と見る立場に立つ研究が多いが、このような観点で「に」を捉えようとする、格とは関係のない、もしくは、関係が薄いものについては見落としてしまう可能性があることを、従来の研究の問題として再確認する。本研究では、周辺に位置付けられる「に」の側から、格助詞「ニ」を含む「に」全体がどのように記述できるかという観点で、それぞれの「に」の位置付けを試みる。現代日本語における「に」には、もはや、格助詞「ニ」とは関係性を見出せないものや、従来の記述では指摘のなかった用法、また、既存の枠組みでは捉え切れないものがあり、用法がかなりの広がりを見せていることを明らかにする。そして、時の「に」や副詞の構成要素となる「に」も視野に入れながら、それぞれの「に」の位置付けを試み、格助詞「ニ」とその周辺に位置する「に」の体系を示す。

最後に、第 8 章では、本論文の議論をまとめ、今後の課題および展望について述べる。

第2章 先行研究

2.1 はじめに

本章では、様々な文法範疇にまたがっている「に」をまとめるための基盤となる研究や主要な議論を紹介する。具体的には、並立助詞、接続助詞、複合辞を形成する「に」と関わる従来の研究を概観する。

以下、「に」を総合的に扱っている研究(2.2)、並立助詞の「に」に関する研究(2.3)、接続助詞の「に」に関する研究(2.4)、複合辞に関する研究(2.5)の順に概観しながら問題点を指摘し、最後に、2.6で主要な問題点をまとめる。

2.2 助詞「に」に関する先行研究

「に」全般を体系的に扱っている研究は多くなく、近年の「に」の研究は進展を見せていないと言えよう。従来の研究は、格助詞「ニ」の意味役割の分類に焦点を当てるものが多く、それをいかに細かく、もしくは、統一的に記述するかは研究の重点が置かれていた。

ここでは、形式としての「に」を対象にした研究として、国立国語研究所(1951)、国広(1962)、森田(1980)、和氣(2002、2006)を取り上げる。

2.2.1 国立国語研究所(1951)

「に」を大きく格助詞、接続助詞、並立助詞、終助詞の4つに分け、特に、格助詞の意味用法について、詳細に分類している。

しかし、次のような副詞として扱うべきものを格助詞の副詞用法としているこ

とには首肯しかねるところがある。

- (1) そしてそれからでも既に40年を閲してゐる。《農、6、25》
(国立国語研究所 1951 : 150)
- (2) 現に新制中学卒業生の大半の学力低下を伝えられているではないか。
《朝、5.6、I》
(国立国語研究所 1951 : 150)

また、「だけに・ばかりに」は、全体として接続助詞のような働きをするとしながらも、格助詞の一用法として取り上げている。

これらの構成要素の「に」を格助詞と見るのかどうかは定かではないが、別に接続助詞というカテゴリーが立ててあるにもかかわらず、これらを格助詞に入れている点は疑問が残る。

接続助詞には「①前おきを述べて本論の内容の叙述に接続させる」「②逆接条件」の2つの用法があるとし、①については(3)(4)を例として挙げている。

- (3) ～、このような自由の原理は、要するに内面的な自由のことであって、はじめにわれわれが問題としていた、～《世、4、22》
(国立国語研究所 1951 : 151)
- (4) 思うに、世界平和の維持は、理念だけでは充分ではない。《資料外》
(国立国語研究所 1951 : 151)

国立国語研究所(1951)は、「要するに」と「思うに」を同じく接続助詞として扱っている。詳細は第4章で述べるが、本研究では、節の大きさという観点から「要するに」と「思うに」はともに接続助詞とは捉えられないと考える。

並立助詞については、(イ) 添加・つきもの・とりあわせ・対比、(ロ) 並列・列挙・枚挙、(ハ) 動詞を重ねて、強意をあらわす、の3つを「事物を列挙する」の下位用法として示している。以下の(5)は(イ)の用例、(6)は(ロ)の用例であるが、「山高帽に黒背広」と「ビールにマサムネ、アンパンにキャラメル」は、その意味を考えると、なぜ別々の用法とする必要があるのか、

という疑問が残る。

- (5) ～、山高帽に黒背広の二人の少年が梯子の両端に掴まったまゝ、～
((キン、7、32))

(国立国語研究所 1951 : 151)

- (6) 「戦争前は、駅の売子が、“ビールにマサムネ、アンパンにキャラメル”と、どなって歩いたもんだよ。」(資料外)

(国立国語研究所 1951 : 151)

このように、国立国語研究所(1951)は格助詞のみならず、他の「に」についても触れており、「に」全体を描こうとしている。しかし、格助詞に比べ、並立助詞と接続助詞に関する検討は手薄であるように思われる。並立助詞と接続助詞についての研究は、それぞれ 2.3 と 2.4 で詳細を検討する。

2.2.2 国広(1962)

国広(1962)は、国立国語研究所(1951)の格助詞「ニ」の分類を踏襲して、それらに記述された意味から文脈などの影響を取り除くと、「ニ」の意義素は、「《密着の対象を示す》・《副詞的意義質》の一つだけを仮定すればよいと考えられる(p.86)」と述べており、「場所・時」の場合は、「ニ」の前接語が「場所・時」を指し、「場所・時に密着して」ということを表すとする。また、「徐々に」のような場合は、「徐々にという状態に密着して、徐々にという状態を保持しつゝ(p.86)」としている。加えて、並立助詞については『同伴』と『列挙』に分け、それぞれ(7)(8)を例として示している³。

- (7) 牡丹に唐獅子、竹に虎 (国広 1962 : 86)

- (8) 筆に紙に墨に硯に筆立 (国広 1962 : 87)

(7)の『同伴』は切り離せない一対をなしているもの、(8)の『列挙』は強

³ 国広(1962)は、「並列助詞」としている。

いまとまりを持っているものとし、両者を他の「に」と同じく《密着》で捉えられるとしている。

国広（1962）は、以上のような様々な「に」を一つの意義素にまとめて捉えることで、他の助詞の類似用法との差を明らかにすることができるとする。しかし、そもそも、《密着の対象を示す》・《副詞的意義質》が二格の意義素として正しいとどのようにして判断すれば良いのか、《密着》をどのような尺度で測れば良いかという、意義素それ自体に関する問題が指摘できる。加えて、本研究と関連する主要な問題としては、以下の点が挙げられる。

まず、国広（1962）は、場所の二格や時の「に」、「徐々に」などの副詞語尾と考えられる「に」、そして、並立助詞の「に」などを取り上げているが、形式として「に」で現れるものすべてを二格の意義素である《密着》で説明しようとしており、様々な「に」を無理に一括りにしようとしている印象が強い。

これと関連し、二格の意義素で「に」全体を捉えることが「に」の記述において有意義であるかどうかについては、個々の要素について踏み込んだ議論を行い、検討していく必要がある。具体的には、《密着》という二格の意義素を並立助詞の「に」にまで適用していることが指摘できる。例えば、（8）の「筆に紙に墨に硯に筆立て」や既述した国立国語研究所（1951）の（5）「山高帽に黒背広」、（6）「アンパンにキャラメル」における名詞同士が密着していると言えるのか、については検討を要する。

2.2.3 森田（1980）

「に」は、行為や作用・状態の対象・相手・成立点をいつ、どこ、どれ、だれ、何と指定するとき用いる助詞であるとし、先行する語を分類の基準として、大きく4つに分けている。

- 〈分析 I〉
- i 時刻・期日の語に付いた場合
 - ii 場所を表す語についた場合
 - a. 主題たる事物や行為の対象が「に」によって示される場所に存在したり、存在することによって起きる結果や状態を表す。

- b. 動作・場所が成り立つよう、その場所に位置を移動させる場合。
- 〈分析Ⅱ〉 iii 人間を表す語に付いた場合
 - a. 受身の動作者を示す
 - b. 使役・許容の相手を示す
 - c. 可能の主体を示す
 - d. 行為の対象を示す
 - e. 作用の波及を示す
 - f. 比較の対象を示す
- 〈分析Ⅲ〉 iv 事物を表す語に付いた場合
 - a. 受身の作用主体を表す
 - b. 由来・起因の対象を示す
 - c. 行為・動作の表出場所を示す
 - d. 行為・作用の対象を示す
 - e. 取り合わせの対象を示す
 - f. 比況・名目・化成の結果を示す
- 〈分析Ⅳ〉 v 数や量を表す語に対する場合
 - a. 動作・作用・状態がある数量に至り及ぶ場合
 - b. 他動行為の与え及ぼす対象を示す
 - c. 分割する数を示す
 - d. 事柄の生起・存在の範囲を示す

(森田 1980 : 372ff.)

森田 (1980) は、「に」を 4 つのカテゴリーに分類し、さらに、先行する語の意味に基づいて細かく分類しており、「に」の表し得る意味のほとんどを網羅している。

しかし、「に」として現れるものすべてが森田 (1980) の分類のどれかに当てはまるとは限らない。

- (9) 彼はバーテンダーにウェイターを兼ねる。

例えば、本論文の第 6 章で扱う (9) のような「兼ねる」と共起する「に」は、意味で分類した森田 (1980) の分類に照らすと、〈分析Ⅱ〉の「iii 人間を表す語に付いた場合」に近いが、その下位分類のどれに該当するのか、という問いに対しては明確な説明ができないように思われる。このように、意味用法を分ける作業がすべてをカバーし切れるとは言いにくい。

さらに、森田 (1980) に付随する問題点として、〈分析Ⅰ～Ⅳ〉の大きなカテゴリーの下位分類のなかには、文法範疇としては同類に属さないものが混在していることが挙げられる。例えば、〈分析Ⅰ〉の「i 時刻・期日の語に付いた場合」と「ii 場所を表す語についた場合」を同じカテゴリーに入れているが、前者に当たる「授業は八時半に始まる (p. 372)」と後者に当たる「私はここにありますからね (p. 373)」は、時の「に」と場所の「ニ」であるが、両者を同じく〈分析Ⅰ〉としている。さらに、「学生時代に」の「に」と「上京した折に」の「に」も「i 時刻・期日の語に付いた場合」の同類に入れている。

森田 (1980) の分類は、「に」に先行する語彙を意味別に羅列しているだけであり、「に」それ自体の分析を行っているとは言いがたい。

2.2.4 和氣 (2002、2006)

「に」の十全たる記述のためには、単なる網羅ではなく、個々の「に」について詳細を見る必要がある。そのような観点を取った研究として和氣 (2002、2006) が挙げられる。

和氣 (2002) は、従来の研究の問題点として、「に」をともなう成分同士の共起関係や「に」の意味役割を羅列し、「に」全体に対しての類型的意味を記述したものがないことを指摘している。和氣 (2002) の主眼は、助詞「に」をともなう成分がどのような原理に基づいて決定されるのかを明らかにするところであり、意味役割の連続性と「に」成分同士の共起制限をよりどころとして、助詞「に」を 3 つに分類している。第一は、「埋め込み構造を持たない文の中の必須的な格成分につく「に」」である。「相手」「場所」「着点」のような意味役割を担うものが属する。第二は、「文法的ヴォイスにおける埋め込み文の主体につく「に」」であり、使役文の被使役者や受動文の動作主のニ格である。第三は、

「結果相を修飾する付加的な成分につく「に」」である⁴。「結果の状態」や「目的」などがこれに当たる。3 つに分類した「に」は、構文的機能が異なっているため、一文中に共起できるとする。

助詞「に」の担う基本機能はシンプルなものであり、なかでも「埋め込み構造を持たない文の中の必須的な格成分につく「に」」成分は、構文と意味の両方に関わっており、類型的意味の解釈に関与する条件が多いため、結果として解釈される類型的意味のバリエーションも豊かであると見ている。

また、和氣（2002）では、本研究と関係のある付加的な成分に付く「に」として、〈結果の状態〉〈目的〉、および、〈資格〉二句についても検討がなされている。特に、〈資格〉二句は、従来、単に資格を表すものとされてきたものに対して、遊離数量詞の振る舞い、二句の必須性、他の二格名詞句との共起可能性という 3 つのテストを行い、4 つに分類している。以下、和氣（2002）の分類を引用する。

表 1 〈資格〉二句の 4 分類 (和氣 2002 : 111)

	位置変化に伴う資格付け	叙任	仕立て	臨時的な利用
名詞句／ 結果二次述部の別	何らかの名詞句	[着点]相当の名詞句	結果 二次述部	結果 二次述部
必須／任意の別	任意	必須	必須	任意

〈資格〉二句の詳細は、第 6 章で再度紹介するが、和氣（2002）を踏まえた和氣（2006）に興味深い指摘が見られる。

いわゆる「叙述」（あるいはそれに近似した）関係を構成しながらも、空間表現の二句と結果の二次述部とのいずれにも当てはまらないものが存在するというを示唆していると考えることができる。このようなものをどのよ

⁴ 和氣（2002）は、この「に」成分について、「名詞句としての機能を持たないので、「二格名詞句」ではなく単に「二句」と呼ぶことにする（p. 24、注 6）」としている。

うに呼び分け、扱い分けるのかということが問題になる。

(和氣 2006 : 186)

上記の記述は、表 1 の「位置変化に伴う資格付け」を「何らかの名詞句」としていることから明らかなように、未だ解答の得られない「に」が存在することを示唆する。本研究も、このような現象の検討を一つ一つ積み重ねていくことで、「に」の全体像が見えてくるのではないかと考える。

加えて、和氣 (2002) は、助詞「に」の本義、つまり、意味論的な意味における中心的な意義を考えるべきではないとし、助詞「に」自体は 2 つの名詞句を構造的に結び付けるだけであるとする。本研究も和氣 (2002) の見解に近く、多岐に渡る「に」の用法を考えるうえで、「に」の中心的な意味や意義を設ける必要性はないと考える。

このように和氣 (2002) は、格成分の「ニ」と付加的成分の「に」を取り上げ、体系的に扱っている数少ない研究であり、「に」を文中における機能によって分けている点で、格助詞「ニ」の意味用法の羅列や分類が主な研究目的であった従来の研究と違う観点に立つものとして評価される。

しかし、格助詞「ニ」そのものから周辺の「に」にアプローチする分析の手法は従来の研究と同様であり、格助詞とは捉えられない「に」についての分析は、和氣 (2006) でもまだ課題が残されており、十分と言えない。

2.3 並立助詞「に」に関する先行研究

並立助詞という概念は、橋本 (1934) によって初めて提唱されたものである。それ以来、並列助詞とも呼ばれ、多くの研究がなされてきた。従来の研究では、格助詞「ニ」と並立助詞「に」を関連付けて説明を試みるものが多く (国広 1962、1967 など)、分類においても格助詞「ニ」の用法の一部と見るものもある (森田 1980 など)。

ここでは、そのような見解の問題点を指摘しつつ、主要な議論をいくつか紹介する。以下、国広 (1967)、森野 (1973)、中俣 (2015) の順に概観する。

2.3.1 国広 (1967)

国広 (1967) は、英語の “and” と 「と」 「に」 「や」 「も」 を比較しているものである。そのなかで、日本語で 「と」 「に」 が現れているところは、英語では “and” で表現するという点から、「と」と「に」がどう異なるのかについて述べている。

国広 (1967) は、「に」の分類については、本章の 2.2.1 で概観した国立国語研究所 (1951) を引用している。

○事物を列挙する。

(イ) 添加・つきもの・とりあわせ・対比

(ロ) 並列・列挙・枚挙

(国広 1967 : 35)

国広 (1967) は、(イ) と (ロ) に当たる用例として以下を挙げている。

(10) [行商人が商品名を列挙する場合]

「今日は何がある?」「はい、今日は人参にごぼう、白菜にねぎでござ
います。」

(国広 1967 : 35)

(11) カーディガンにスラックスの女

(国広 1967 : 35)

国広 (1967) は、「に」の意義素として《密着の対象を示す》を仮定している。「A に B」では、A に対して B が密着していき、A の方に力点があるとし、かつ、A と B の結び付きは非常に強いものであると述べている。(10) については、手元の様々な商品に緊密な統一性を持たせた表現、(11) については、2 つの衣装が 1 つの緊密な組み合わせをなしていることを表す表現であると説明している。しかし、「緊密な統一性」や「緊密な組み合わせ」というのは、2.2.2 で既述した国広 (1962) の《密着》同様、客観的な基準とするには問題がある。

国広 (1967) が「に」の意義素としているものは、国広 (1962) の二格の意義素を適用したものと見られるが、格助詞で並立助詞を捉えようとしているがために、並立助詞に無理な説明を与えている印象が強い。また、用法を (イ) と (ロ) に分ける基準が示されていないため、(10) と (11) を分ける必要性につ

いても疑問が残る。

本研究では、ニ格の意義素で並立助詞「に」をカバーできないことを主張する。これについては、第3章で詳しく述べる。

2.3.2 森野（1973）

格助詞と並立助詞の関係、および、並立助詞を用いた名詞間について触れているものに森野（1973）がある。

森野（1973）は、並立助詞「に」の存在をはっきりと認める立場であるとは言えない。並立助詞「に」を連体並立の格助詞として処理できるものと見ており、並立助詞「に」と格助詞「ニ」とを区別することは難しいとしている。両者の識別のポイントとなるのは、対等な関係にある語を接続すること、それのみであるとするが、「「対等」と称することの可否それすらが問題になる（p. 136）」とし、格助詞「ニ」と区別する基準や、何を対等と考えるか、といった重要な疑問を投げかけている点で示唆的である。

加えて、並立助詞「と」の〈一ト一ト〉について、中間の「ト」と最後の「ト」は語性が異なり、中間の「ト」は前接の体言と後続の体言が並立関係を成すことを示す関係表示性を発揮するが、最後の「ト」は、そのような並立関係にある語と語を最後に統括する機能をするとし、最後の「ト」を〈統括〉作用を成す「ト」と考えている。一方、「に」には〈一ニ一〉型があるのみとし、「〈一、一ニ〉〈一ニ一ニ〉型がみられないのは、並立といっても〈ト〉とは異質であり、（中略）対等の資格での並立関係の表示というよりは、添加、何に添加するかという、その基準、起点の表示という性格が色濃く（後略）（p. 137）」と述べており、並立助詞「と」の有する並立の機能と区別している。

この添加について森野（1973）は、文脈上の分析次第では、それが添加の意と捉えられる可能性をはらんでいるが、古くは、対比・取り合わせの意での関係付けであったとする。

- (12) なでしこの細長にこのごろの花の色なる御小桂、あはひけだかう今めきて…（源氏物語・胡蝶）（森野 1973 : 138）
- (13) 右は沈の箱に浅香の下枕、…（源氏物語・絵会）（森野 1973 : 138）

こうした対比・取り合わせの用法が添加を媒介にして、より並立的な現代語の用法の根源である可能性について自問しているが、これについては十分に検討を要すると述べる。

また、並立の「に」は、〈格助詞＋ニ〉〈ニ＋格助詞〉という承接性を持たないことについても触れている。詳細は、第 3 章で述べるが、〈ニ＋格助詞〉の承接は、並立助詞「と」とその成立を区別するための 1 つの論証となる。

2.3.3 中俣 (2015)

多様な並立助詞の体系的な記述を行っている研究であり、そのなかで、「に」についても言及している。従来の研究が並立助詞を記述するのによく用いてきた「全部列挙／一部列挙」はキャンセル可能な語用論的推意であるとし、並立表現の記述には「網羅性」（統語レベル）、「集合の形成動機」（意味レベル）、「排他的推意」（語用レベル）という概念が有効であるとする。

「網羅性」とは「どのような場合でも並列された全ての要素がセットとして扱われ、述語ならびに他の要素すべてと結びつくという性質」である。次に示すように「に」と「と」は「網羅性」を有するが、「や」は有さない。

(14) 私は毎日ビール {に／と／や} ワインを飲んでいる。

(15) 日本人は正月になるとイクラ {に／と／や} 数の子を食べる。

(中俣 2015 : 127 改)

(14) において、「に」「と」の場合は毎日ビールとワインの両方を飲んでいることを表すが、「や」の場合はビールだけ、ワインだけという日があるという解釈も成り立つと言う。(15) も同様である。

また、「に」は同一名詞句内の要素に対して網羅性がキャンセルされる「名詞句内網羅性制約」を持つとされる。

(16) 数学に英語を受ける学生は残ってください。 (中俣 2015 : 127)

中俣 (2015) によれば、(16) には数学か英語のどちらかを受ける学生という

解釈が成り立つ。これも「と」と同様である。

意味論的なレベルについて、中俣（2015）は、「に」は共通の構造・属性（＝「類似性」）に基づいて集合が形成されるため、（18）のように、同一のカテゴリに属していても、共通の属性が発見できないような場合は許容されにくいという。

（17） 今からぞうきんをかけるから、机の上のクッキーにティッシュの箱を片付けて。 （中俣 2015：127）

（18） ??初めまして。ボランティアに遊びが大好きです。よろしくお願ひします。 （中俣 2015：128）

一方、「隣接性」が集合形成の動機となる「と」は全く共通点がないような要素も並べられるとする。

（19） 初めまして。山本といます。好きなものはワインとサッカーです。 （中俣 2015：45）

「に」は語用論的には「他にはない」という推論を発生させる「排他的推意あり」である。上述した（14）では、「に」の場合、ビールとワイン以外はないという解釈になる。それに対し、「排他的推意なし」の「や」ではビールとワイン以外の何かを飲んだかも知れないという解釈になる。

以上、中俣（2015）は、並立助詞「に」について様々な角度から分析を加えている。

また、並列（本研究では、「並立」）については、以下のように定義している。

モノの並列の定義

2 つ以上の異なる名詞句が同じ 1 つの述語と結びつきうる時、さらに共通の格を付与されうる時、その名詞句は並列関係にある。 （中俣 2015：9）

「私はビールにワインを飲んだ」の場合、「ビールを飲んだ」、「ワインを飲

んだ」のように、述語「飲む」と結び付いた 2 つの名詞句（「ビール」「ワイン」）に共通の格「を」が付与され、それが並列関係を表す「に」で結び付いているということである。

しかし、この定義に従うと、(20) のようなものには説明を与えることができない。

- (20) 「まあ、護摩の灰に雲助に、旅先にゃ不逞の連中が多いからね。能く有ることさ」 [規き小平次 2005]

上記の例は、本論文の第 1 章で従来の研究では取り上げられることのなかったものとして提示したものである。「護摩の灰に雲助に」は、述語「多い」とは結び付かず（(20) は「護摩の灰が多い」「雲助が多い」ことを直接表しているわけではない）、中俣（2015）の定義に従うと、「に」が何から付与されているのかが説明できない。しかし、「不逞の連中」と結び付くことで並立関係を読み取ることができるため、並立関係を述語との結び付きだけに限定するのは問題である。

さらに、(21) のような従来の研究が並立助詞として扱っていたものについての言及が見られない。

- (21) a. 牡丹に唐獅子、竹に虎 (国広 1962 : 86)
b. ??唐獅子に牡丹、虎に竹

中俣（2015）の定義から考えると、そもそも並立助詞として捉えない立場である可能性は十分にある。しかし、従来の研究が並立助詞「に」として位置付けられてきたものを排除するならば、それに関する議論を行っておく必要があるのではないだろうか。

以上より、並立助詞「に」を十全に記述するためには、(20) (21) のような用法も踏まえて議論を行っていく必要があると言える。

2.4 接続助詞「に」に関する先行研究

現代日本語において接続助詞「に」の存在を認めるものは少ない。例えば、共時的研究では、2.2.1 で取り上げた国立国語研究所（1951）は、前述の通り、接続助詞「に」を格助詞「ニ」の用法の一部として位置付けている。通時的研究に目を向けてみても、接続助詞の「に」を格助詞「ニ」と結び付けて説明する研究が多く（山口 1980、此島 1983 など）、なかには、京極（1987）のように、衰退しているとするものもある。

格助詞「ニ」と結び付けた捉え方や通時的見解が、現代日本語における「に」の記述とどのような関連性を持つのかを考えるべく、以下、山口（1980）、此島（1983）、京極（1987）の順で紹介する。

2.4.1 山口（1980）

山口（1980）は、接続助詞「に」を格助詞「ニ」からの転成であると見る立場に立つものである。「に」の接続の機能が成立するためには、格助詞「ニ」の関係表示の機能が重要な前提になり、これに加え、前句の句的判断を担うことが必要になるとする。

「に」が格助詞としての指示的關係表示を句と句の關係に広げて、格助詞や指定の助動詞性と両立的に句の關係表示への關与をふかめ、やがて接続助詞としか見ることのできない例があらわれるに至るのは、ごく自然な推移と見てよい。（山口 1980 : 156）

また、山口（1980）は、格助詞と接続助詞の連続性について言及している。古代語における「に」は、格助詞か接続助詞かのどちらかに決まるのではなく、むしろ、格助詞を前提とする接続助詞の成立は、意味の取りようによって多くの場合、両立性が認められるとする。加えて、格助詞「ニ」の最も基本的な用法は、場所や時間を示すことであるとし、格助詞「ニ」の持つ「場面性」は、ひいては、「に」の接続法における最も基本的な意味關係であるとする。また、場面性の關係に加え、事態が累加的に成立・存在するという「累加性」の關係も認められると言う。

このように、山口（1980）は、接続助詞を格助詞で捉えようとしている。しかし、以下のような現代日本語における接続助詞「に」を見ると、場面性や累加性の痕跡を探すのは難しい。

(22) 私がおまえの才能を見て考えるに、当然一回の試験で合格するだろう。
[唐代伝奇 2002]

(23) また利水という観点においても、現在、大刀那水系は百パーセント首都圏の利用に供せられ、この十年間をみるに、新たなダム工事によって渇水時の貯水量を数パーセント程度調節することの大きなメリットは考えがたい。
[高木仁三郎著作集 2004]

そもそも格助詞「ニ」の基本的な用法を場所や時間を示すこととする根拠は何なのかという疑問も生じるが、現代語における（22）の「考えるに」や（23）の「みるに」に場面性や累加性など、格助詞「ニ」との関係性を見出すのは困難であることを考えると、現代語における接続助詞「に」を見ていくうえでは、格助詞「ニ」からは切り離して考えることも視野に入れておく必要がある。

2.4.2 此島（1983）

此島（1983）は、格助詞から接続助詞への転用が少なくないとし、「を」と「に」をその例として挙げ、「を」が間投との関係で接続性が高いのに対し、「に」は単純に格からの転化と捉えている。下に「に」の例を引用する。

(24) 五人の中にゆかしき物見せ給へらむ（人）に、御心ざしまさりたりとて（結婚シテ）仕うまつらむ。（竹取・貴公子の求婚）
(此島 1983 : 151)

(25) （柏木ガ）いといたくながめて端近く寄り給へる（トコロ）に来て、（猫ガ）ねうねうといとらうたげに鳴けば……（源氏・若菜下）
(此島 1983 : 152)

(24) (25) のように、連体形が完全に体言化している場合は、「に」は純粹

に格助詞であるとする。加えて、接続助詞「に」と見られるものは、本来の格の意を残しながら、その承ける用言連体形の体言性が弱まり、その叙述が後ろの叙述に対して対立的になり、接続性を強くするという。

(26) 旅にして物恋しきに (爾) 山下のあけのそほ舟沖に漕ぐ見ゆ⁵
(万三・二七〇)

(此島 1983 : 152)

(27) 雨少しうちそそぎ、山風ひややかに吹きたるに、滝のよどみもまさりて音高く聞ゆ。(源氏・夕顔) (此島 1983 : 152)

此島 (1983) は、(26) の「物恋しきに」と (27) の「吹きたるに」が、「物恋しきトキニ」「吹きたるニヨッテ」のように、格と解することもできるが、前後の叙述が対立的になっているものは、接続の機能も明らかに現れていると見ており、この種の用法の大半は、格と接続の間にあるため、はっきりと線引きをすることは難しいとする。

格助詞「ニ」に接続の機能が与えられたと見る立場は、山口 (1980) と同様である。山口 (1980) でも既述したが、現代語における (22) の「私がおまえの才能を見て考えるに」や (23) の「この十年間をみるに」の「に」の用法に、格の用法が残存しているとは捉えにくく、格との関連で分析する方法は現代語においては有効でないと考えられる。

2.4.3 京極 (1987)

京極 (1987) は、接続助詞「に」の成立と展開について述べている。体言に付く「に」が時・場所・目的などを表す格助詞であることは間違いないが、連体形に付く「に」の場合は、格助詞なのか接続助詞なのか判断が難しい例が多くなるとする⁶。

⁵ 此島 (1983) は、万葉集など上古のものは必要な箇所だけ括弧内に原文の文字を示し、「(万葉集・巻・国家大観番号)」の形式で出典を示している。

⁶ 用例は、『万葉集』のものである。出典として巻・番号を示す。

- (28) 飯炊くことも忘れてぬえ鳥ののどよひ居るに (尔) いとのきて短き物を端切ると言へるがごとくしもと取る里長が声は寝屋処まで来立ち呼ばひぬ (五・八九二) (京極 1987 : 192)
- (29) 春の雨はいやしき降るに (尔) 梅の花いまだ咲かなくいと若みかも (四・七八六) (京極 1987 : 192)

(28) (29) は、それぞれ「のどよひ居る時に」「いやしき降る今に」のように、「時」に関する体言を補って解することができ、一見、格助詞と考えられるが、「に」の前件と後件の関係を、継起・累加・順接条件・逆接条件など、接続助詞的に見ることもおかしくないと言う。この捉え方は、此島 (1983) と一致する。

京極 (1987) は、奈良時代を経て平安時代以降においても、格助詞か接続助詞かを断定することは難しいが、これは、転成により成立した語の場合には当然付随する問題であるとする。また、現代語においては、接続助詞「に」は衰退しているとし、その背景には近世以降成立したと見られる「と」や逆接的用法の「のに」の影響があると述べる。

これに対し、本研究は、古典語に比べ用法の縮小は見られるものの、現代語においても、接続助詞として機能する「に」が存在することを明らかにし、また、現代語においては、接続助詞「に」と格助詞「ニ」を関連付けて議論を展開する必要がないことを示す。

2.5 複合辞を形成する「に」に関する先行研究

いくつかの語が複合して、ひとまとまりの形で辞的な機能を果たすものを複合辞と言う (松木 1990)。従来の複合辞の分析は、類義語との使い分けや、各語の用法の記述、複合辞全体の意味的分類、といったような研究が中心であった。複合辞を形成する「に」に着目してみると、「に」の省略の可否や、「に」と他の助詞との置き換え可能性に関する研究は見られるが、その「に」が何であるのかを論じているものはほとんど見られない。「に」の詳細を論じていないという問題は、複合辞の複合度を測定しようとする研究にも当てはまり、それらの研究で

は、複合辞を形成する「に」を一律に格助詞か否かで捉えてしまう傾向にあった。つまり、複合辞を形成する「に」を均一に扱って良いのかという根本的な問題については、これまでほとんど議論がなされてこなかったと言える。

以下、どのような研究の蓄積が見られるのか、主要文献を概観する。

2.5.1 松木 (1992)

松木 (1992) は、複合辞を「単なる語の接続から一語化した助詞助動詞までの間に連なる辞的表現群の総称である (p. 592)」とし、複合辞性の捉え方と複合辞の存在意義について論じている。

松木 (1992) は、語の生成面に注目し、「結合」「融合」「固定化」の3つの過程を示している。結合の段階はまだ複合辞としては認定できず、融合の段階においては複合辞と見て良いが、融合が進んだもの（語の合計以上の独自の意味を有するもの）とそうでないものがある、複合化（融合）の度合いに差が現れることを指摘している。そして、固定化の段階は、一語の助詞・助動詞として扱われるものであるが、一語と認定される基準はまちまちであり、実際にはかなり恣意的に判断されるとしている。

上記を踏まえ、複合辞として認定する基準（(a)～(c)）を集約しているが、複合化（融合）の度合いに幅が見られるという問題点に対し、複合辞性の尺度を設け、複合辞性の低いものから高いものへという「複合辞らしさを測るものさし」として (i)～(iii) を示している。

○複合辞の認定基準

- (a) 辞的機能を果たしている。
- (b) 「詞」（実質的意味）から「辞」（形式的・関係構成的機能）へと変化している。
- (c) 構成要素の合計以上の独自の意味が生じている。 （松木 1992 : 596）

○複合辞の尺度

- (i) 構成要素の緊密化の度合い（交替・挿入・省略）
- (ii) 形式名詞・形式用言の形式化の度合い
- (iii) 形式用言の文法範疇喪失の度合い

尺度の (i) は認定基準の (c) に、尺度の (ii) (iii) は認定基準の (b) にそれぞれ対応している。(松木 1992 : 596)

まず、複合辞の認定基準で複合辞を選定し、その後、上記 (i) の緊密度、(ii) (iii) の形式化度に加え、「機能度」で複合辞性を測れるとする。

このように、松木 (1992) は、同じく複合辞とされるもののなかにも融合の度合いが異なるものが存在すると捉えている点で、本研究の観点と近いと言える。

しかし、「(a) 辞的機能を果たしている」ことをどのように判断しているかが明確ではない点は問題である。詳細は第 5 章で述べるが、複合辞の認定を意味だけで行おうとすると、本来は複合していないものまでを複合辞に含んでしまう恐れがある。よって、複合辞として機能しているか否かについては、文法的な基準で測る必要がある。また、「に」の記述という点から松木 (1992) を見てみると、例えば、「と同時に」と「時(に)」はともに時点を表す複合辞に、「たび(に)」と「ごとに」はともに反復を表す複合辞に分類されているが、個々の「に」についての言及は見られない⁷。そのため、「同時に」と「時(に)」の「に」、または、「たび(に)」と「ごとに」の「に」が同じものなのか、異なるものなのかについては明らかになっていない。

以上を踏まえ、本研究では、より文法的な観点から複合辞の認定を行い、また、個々の要素における「に」がどのように捉えられるかについても議論を行う。

2.5.2 田中 (2010)

田中 (2010) は、複合辞として機能する諸形式を類型的、類義的観点から取り扱っている。分析に際しては、大きく、接続表現を表すものと文末で機能するものに分け、検討を行っている。数多くの複合辞を詳細に分析し、それを体系化しようとしている点で、複合辞に関する重要な研究として位置付けられる。

しかし、「に」の記述という観点で見ると、田中 (2010) は形式に関係なく、一貫して複合辞を形成する「に」を格助詞と見ているが、これは、非常に大きな

⁷ 括弧は省略可能性を表していると思われるが、松木 (1992) に詳しい説明は見られない。

問題と言えよう。例えば、本研究の第 5 章で取り上げる「はずみに」については、「はずみに」のほうが「はずみで」よりも原因・理由への傾斜があり、これをニ格とデ格の影響として捉えている。だが、そもそも、「に」と「で」を格助詞と見ることの根拠については言及がない。また、「はずみに」と「はずみで」で傾斜の差があるにしても、両者が同じく原因・理由を表すとするには、問題がある。田中（2010）が言うように、ニ格とデ格の影響が背景にあると見るのであれば、整合性の取れた議論のためには、傾斜の問題ではなく、格助詞で説明を与えなければならない。

このような問題は、「はずみに」と「はずみで」の構成要素である「に」や「で」がその意味・機能を保持しているのか、または、個々の複合辞における一語化の度合いはどの程度なのかといった検討を行うことにより解決できると考えられる。

本研究は、複合辞一つ一つの記述の積み重ねがあつてこそ、体系的に捉えようとしたときの問題までも的確に処理できると考える。

2.6 本章のまとめ

本章では、助詞「に」を総合的に捉えている研究と、並立助詞「に」、接続助詞「に」を取り上げた研究、そして、複合辞に関する主要な文献について概観した。従来の研究の主な問題としては、以下の 2 点が指摘できる。

まず、格助詞「ニ」の研究が中心であったことである。「に」の意味用法や詳細を分析したものは、そのほとんどが格助詞「ニ」の議論であり、格助詞とは捉えられない「に」についての記述は少ない。また、従来の研究では、格助詞との関連性や連続性で「に」の記述を行っているものが多いが、本当にそのような分析が妥当であるのかに関しては検討を要する。

次に、「に」の個別的な分析に留まる研究が多く、包括的に「に」を扱おうとする研究が少ないという問題が挙げられる。近年の「に」の研究は、和氣（2002、2006）以降、停滞しているように見受けられる。特に、従来は、格助詞「ニ」中心の研究が盛んであったためか、並立助詞「に」や接続助詞「に」など、同じく助詞の下位範疇に属するものについての研究はかなり少ない。

このように、「に」の出現する環境と関係なく、「に」の出自を格助詞「ニ」

とするものや、格助詞「ニ」の意味で「に」全体を説明できるとする見方が多いが、現代日本語に存在する多種多様な「に」については、もはや、格助詞「ニ」との関連で捉えることができないものが存在する可能性についても考慮に入れる必要がある。

以上を踏まえ、本研究では、「に」全体の様相を考えるための基盤となるものとして、現在までその検討が手薄であり、かつ、格助詞「ニ」と何らかの関係を持つとされる4つの「に」、つまり、並立助詞の「に」、接続助詞の「に」、複合辞を形成する「に」、「兼ねる」類文と共起する「に」について論じ、現代日本語の「に」の広がり、格助詞「ニ」との関係性および本研究で取り上げた「に」同士の関係性について論じ、現代日本語における助詞「に」の様相を明らかにする。

第3章 並立助詞の「に」

3.1 はじめに

名詞を列挙する際に用いられる日本語の並立助詞には、「と」「や」「に」「とか」「やら」「なり」などがあり、そのなかでも「と」「や」の振る舞いについては、吉井（1989）、小林（1995）、中俣（2009、2015）など、多くの研究の蓄積がなされている¹。

その一方で、「に」に関する分析は十分とは言えない。その一例として、3.3節で詳述するように、先行研究が挙げている並立助詞「に」の用法の範囲は一致していない。また、「に」について、大坪（1970：49）は「並立する語のうち、最後のには付かず、一ニ一の形を取る」とする²。しかし、次の例を見られたい。

- (1) このおもちゃ箱感覚と、たやすくコラボレーションできるアーティストたちが、夜な夜なライブにパフォーマンスに、とにかくいつでも賑わっているんです。 [BRUTUS2003]
- (2) 「まあ、護摩の灰に雲助に、旅先にゃ不逞の連中が多いからね。能く有ることさ」 [覗き小平次 2005]

¹ 同様の機能について「並列」という用語も用いられる（例えば、中俣 2009 など）が、本研究は、初めて「並立」を提唱した橋本（1934）に倣い、「並立助詞」に統一する。ただし、引用の際は原文に従う。

² 識別のため、「に」を太字で示した。

(1) と (2) では、大坪 (1970) の指摘に反し、最後尾の名詞にも「に」が付されている。このような例は、その他の先行研究では取り上げられてすらいない。

以上を踏まえ、本研究では、並立助詞「に」について、先行研究が並立助詞とする「に」の再検討を行い、(1) (2) のような従来指摘されることのなかった用法までを含めて、考察を行う。

以下、3.2 で先行研究の概観を行い、3.3 で先行研究の問題点をまとめる。これを踏まえ、3.4 で先行研究が取り上げている用例のなかには、並立助詞の一般的な特徴を満たさないものが混在していることを指摘し、それは格助詞「ニ」と捉えられることを論じる。3.5 では、典型的な並立助詞の用法について検討する。3.6、3.7 では、従来言及されることのなかった「例示」の用法を有すると捉えられる「に」について検討し、続く 3.8 では、本研究で分類した 2 つの用法間の関係を示す。最後に、3.9 で本章のまとめを述べる。

3.2 先行研究の概観

国広 (1962、1967) は、並立助詞「に」をニ格の意義素として仮定した《密着の対象を示す》で説明できるとし、以下の例文を提示している。

(3) 牡丹に唐獅子、竹に虎 (国広 1962 : 86)

(4) 筆に紙に墨に硯に筆立 (国広 1962 : 87)

(5) 添加・つきもの・とりあわせ・対比
カーディガンにスラックスの女 (国広 1967 : 35)

(6) 並列・列挙・枚挙
[行商人が商品名を列挙する場合]
「今日は何がある?」「はい、今日は人参にごぼう、白菜にねぎでございます。」 (国広 1967 : 35)

国広 (1962) は、(3) を『同伴』、(4) を『列挙』とし、前者をお互い密着して一対を成すもの、後者を「と」に近い意味を持つが「と」より強いまとまり

を有するものとする³。一見、両者を違うものとして扱っているようであるが、両者とも「密着」で説明できると結論づけている。

国広（1967）は、「A に B」は、A に対して B が密着していき、A の方に力点があるため、必然的に A と B の結び付きは非常に強くなるとして、(7) を示している。

(7) 「に」：A ← B (国広 1967 : 37)

国広（1967）は、並立助詞「に」を(7)で説明できるとしているが、(4)～(6)のようなものは、密着しているというより、対等に並んでいると解釈した方が良さそうである。このように、「密着」では説明し切れない部分があることが指摘できる。

寺村（1991）は、「N₁ に N₂」と並べるときは、「N₁」が主で「N₂」が従、あるいは、「N₁」がまずあって、それに「N₂」が添えられるという感じが伴うとする。

(8) 松に鶴、竹に雀、梅に鶯 (寺村 1991 : 205)

(9) 山崎医院は産科に内科を兼ねている⁴。 (寺村 1991 : 206)

この主従という見方は、国広（1967）が示した(7)と同様のものとして捉えることができる。

一方、中俣（2015）は、(10) (11) のような例を挙げながら、統語レベル、意味レベル、語用レベルから「に」を検討し、並立助詞の体系に位置付けている。しかし、詳しくは次節で述べるが、中俣（2015）で挙げられている並立助詞「に」の用法は、国広（1962、1967）、寺村（1991）に比べると、限定的である。

³ (5) と (6) の用法の分類は、国立国語研究所（1951）を踏襲したものである。

⁴ 寺村（1991）は、(9) と「山崎医院は産科と内科を兼ねている」を比べると、「に」は主従、「と」は対等という関係にあるとする。しかし、これは、述語「兼ねる」と共起する「に」の問題であり、そもそも並立助詞とすることに疑問がある。これについては第 6 章で取り上げ、検討する。

- (10) 日本人は正月になるとイクラに数の子を食べる。 (中俣 2015 : 127)
(11) 私は毎日ビールにワインを飲んでいる。 (中俣 2015 : 127)

3.3 先行研究の問題点

並立助詞の用法を考えると、並立助詞が一般的に持つ特徴の 1 つとして名詞を列挙し、全体を 1 つの名詞として機能させることが挙げられる。加えて、橋本 (1934)、此島 (1966)、寺村 (1991)、岩田 (2012) などは、列挙される名詞を「対等な関係」を成すものとし、佐久間 (1940) は「同じ資格に並べていひ、次々に列挙するといふ仕方です (p. 343)」と定義している。「対等な関係」「同じ資格」であるならば、列挙された名詞は入れ替えられるはずである。実際、「と」「や」「とか」などは、問題なく名詞が入れ替えられる⁵。

- (12) a. 今日のお勧めはブドウとバナナとリンゴです。
b. 今日のお勧めはバナナとリンゴとブドウです。
(13) a. 今日のお勧めはブドウやバナナやリンゴです。
b. 今日のお勧めはバナナやリンゴやブドウです。
(14) a. 今日のお勧めはブドウとかバナナとかリンゴです。
b. 今日のお勧めはバナナとかリンゴとかブドウです。

「対等な関係」「同じ資格」で名詞を列挙するのが並立助詞であるならば、「列挙された名詞の語順の入れ替えても文意が変わらない」ことを並立助詞の持つ一般的な特徴の 1 つとして位置付けられる。したがって、上述した先行研究の定義に基づいて並立助詞を規定するならば、1) 名詞を列挙し、全体を 1 つの名詞として機能させること、2) 名詞が入れ替えられることの両方を満たすものが典型的な並立助詞であると言える。

しかし、先行研究が挙げている並立助詞「に」には、入れ替えが可能なものと

⁵ 並立助詞「と」「や」「とか」が用いられたそれぞれの文の意味には違いがあると考えられるが、本章は「に」の分析に重点を置いているため、その詳細については触れない。

不可能なものが混在している。

[名詞が入れ替えられる]

(15) a. カーディガンにスラックスの女 (国広 1967 : 35) (= (5))

b. スラックスにカーディガンの女

(16) a. ~今日は人参にごぼう、白菜にねぎでございます。

(国広 1967 : 35) (= (6))

b. ~今日はごぼうに人参、ねぎに白菜でございます。

[名詞が入れ替えられない]

(17) a. 牡丹に唐獅子、竹に虎 (国広 1962 : 86) (= (3))

b. ??唐獅子に牡丹、虎に竹

(18) a. 松に鶴、竹に雀、梅に鶯 (寺村 1991 : 205) (= (8))

b. ??鶴に松、雀に竹、鶯に梅

これらは (17b) (18b) のように名詞を入れ替えると不自然になり、国広 (1962、1967) と寺村 (1991) などの言う同伴、主従の関係を成すものと捉えられ、「N₁」と「N₂」は同じ資格を有するとは見なせない。

また、中俣 (2015) については、前節にて、取り上げている用法が限定的であることを指摘した。中俣 (2015) は、並立について、「2 つ以上の異なる名詞句が同じ 1 つの述語と結びつきうる時、さらに共通の格を付与されうる時、その名詞句は並列関係にある (p.9) 」と定義しており、以下のような名詞の入れ替えが可能なものだけが挙げられている。

(19) 日本人は正月になると {イクラに数の子 / 数の子にイクラ} を食べる。

(中俣 2015 : 127 改)

(20) 私は毎日 {ビールにワイン / ワインにビール} を飲んでいる。

(中俣 2015 : 127 改)

(17a) と (18a) のような名詞の入れ替えが不可能なものは取り上げられていないが、従来、並立助詞と捉えてきた名詞の入れ替えが不可能なものとの関係を

明らかにしなくては、並立助詞「に」を十全に記述することはできない。

また、第 2 章でも指摘したが、冒頭で提示した最後尾の名詞に「に」の付くものは、中俣（2015）の定義では説明できない。

- (21) 「まあ、護摩の灰に雲助に、旅先にゃ不逞の連中が多いからね。能く
有ることさ」 [槻き小平次 2005] (= (2))

(21) は、「雲助に護摩の灰に」のように、名詞を入れ替えることができることから並立関係を表していると考えられる。しかし、(21) の文は「護摩の灰が多い」「雲助が多い」といった事態を直接表しているわけではなく、述語と結び付いているとは捉えられない。したがって、上述した中俣（2015）の定義では、(21) のような並立関係を捉えることはできないと言える。

最後尾の名詞に「に」の付くもの（(21) など）は、中俣（2015）を含め、先述の先行研究では言及が見られないが、このような「N₁に N₂に～N_nに」の形式も視野に入れなければ並立助詞「に」の全体像を記述することはできない。

「N₁に N₂に～N_nに」を含め、先行研究で見られる並立助詞「に」の用法をまとめたものを表 1 に示す。

表 1 並立助詞「に」の用法の分類と先行研究との関係

	名詞の入替不可 「N ₁ に N ₂ 」	名詞の入替可 「N ₁ に N ₂ に～N _n 」	「N ₁ に N ₂ に～N _n に」
国広（1962、1967）	○	○	×
寺村（1991）	○	○	×
中俣（2015）	×	○	×

3.4 では、国広（1962、1967）、寺村（1991）が並立助詞としている名詞の入れ替えが不可能なものを取り上げ、名詞の入れ替えが可能であり、かつ、最後尾の名詞に「に」が付かない典型的な並立助詞の「に」（以下、典型的並立助詞「に」）と比較しながら、その位置付けについて論じる。

3.4 名詞の入れ替えが不可能な「に」の位置付け

3.3 で、従来の研究が並立助詞としてきた「に」のなかに、「名詞の入れ替えが可能」という並立助詞の特徴の 1 つを満たさないものが混在していることを指摘した。ここでは、そのような名詞の入れ替えが不可能な「に」をどのように位置付けるべきかを検討する。

ここで問題にしている「に」は、特に、古来の言葉の組み合わせや決まり文句に近い表現、そして、やや古めかしい表現によく用いられる。

- (22) 牡丹に唐獅子、竹に虎 (国広 1962 : 86) (= (17a))
(23) 松に鶴、竹に雀、梅に鶯 (寺村 1991 : 205) (= (18a))
(24) 月にむら雲、花に風 (佐久間 1940 : 304)

このようなタイプは、2 つの名詞を並べた「N₁に N₂」という形で固定化されているように見える。また、実際の文脈の中で用いられている例を観察すると、並立助詞の特徴の一部を満たしているようにも見える。

- (25) 関が原の時と同じ、月に叢雲よ。 [猿若の舞 2005]
(26) 月にむら雲花に嵐の光景を背景に押し込めた輝くタイル張りに牙をむいている機能性に抗して菓罐は滾りつづける [辻井喬詩集 1995]
(27) 私は元来、丈夫な方でなく、中学時代は青菜に塩のようなひ弱い体つきをしていた。 [医の心 1987]

上記の「N₁に N₂」は、(22) ~ (24) 同様、名詞の入れ替えは不可能であるが、列挙されて全体で 1 つの名詞として機能していると捉えられるため、並立助詞の特徴の一部を満たしているとも言える。

しかし、本研究は、並立助詞と扱われてきた上記のような「に」を、述語が省略されている格助詞「ニ」と捉える。以下、このようなタイプを「「月にむら雲」類」とする。

(22) ~ (24) で表現されている事柄は、古典的図柄や画題、古事などの由来を加味すると、以下のように表せる。

- (28) 牡丹の花の下に唐獅子がいる、竹藪に虎がいる
 (29) 松に鶴がとまっている、竹に雀がいる、梅に鶯がとまっている
 (30) 月にむら雲がかかっている、花に風が吹いている

(28) と (29) は、いずれも草木と鳥獣の組み合わせで草木が場所の二格を取っており、(30) の「月」「花」は、述語「かかる」「吹く」が作用する対象として、対象の二格を取っている。すべての文に述語の想定が容易であり、「に」の形を取るものの係り先が文の述語であることが分かる。これは、慣用句に見られる一般的な性質として「に」の係るべき述語が省略されているだけであり、並立しているわけではない。

「述語の省略」という考え方は、佐久間 (1940) でも論じられている⁶。「猫に小判」・「青菜に鹽」などゝいふのは、むしろ「……に見せる」・「……にかける」のやうな述語を省略したものとして、(中略) かういふ風に體言と體言とを並べてその間のつなぎに入れるといふ形式に出来上つてゐますので、特殊の用法が派生したのだと見ていゝわけです (p. 304) 」と述べている⁷。松尾 (1970) も、「累加の基準を表わす格助詞の用法から転じたものであろうが、しだいにかかる用言が意識されなくなり連体的用法になつていつたものであろう。(p. 38) 」としており、述語 (用言) の省略という見方を示している。

上述した (25) ~ (27) における「N₁に N₂」は、一見、「「N₁」があつて「N₂」がある」という並立的な解釈をしやすくなるが、これは見かけ上の問題にすぎないのである。

したがって、「月にむら雲」類は、格助詞「に」の枠の中で捉えられると判断

⁶ 佐久間 (1940) は、並立助詞「に」の存在を認めていながらも、その用法の詳細については、格助詞「に」の用法の説明の際に、「助詞「に」のその他の用法」を立て、そのなかで述べている。そのため、並立助詞「に」に対する立場は明らかではない。

⁷ 「物をめあてにして、動作の向けられる対象、動作の (影響) の及ぶもの」とされる用法である。

(i) その品物にさわってはいけません。

(ii) 石垣にぶつかって膝がしらをすりむいた。 (佐久間 1940 : 299)

する。

「月にむら雲」類の「ニ」と、典型的並立助詞「に」との違いは次のような点でも明らかである。

- (31) a. 日本人は正月になるとイクラに数の子を食べる。
(中俣 2015 : 127) (= (10))
b. イクラを食べる + 数の子を食べる
- (32) a. 私は毎日ビールにワインを飲んでいる。
(中俣 2015 : 127) (= (11))
b. ビールを飲んでいる + ワインを飲んでいる
- (33) a. 松に鶴がとまっている。 (= (29))
b. *松がとまっている + 鶴がとまっている
- (34) a. 月にむら雲がかかっている。 (= (30))
b. *月がかかっている + むら雲がかかっている

(31) と (32) は、述語から同じ格が与えられており、「に」を用いて 2 つの事柄を 1 つの述語で並べているが、(33) と (34) は、そのような解釈を持たない。

これに加え、「月にむら雲」類は、並立助詞には付与できない「は」の付与を許す。このことから「月にむら雲」における「に」は、並立助詞ではなく、格助詞「ニ」であると捉えられる。

(35) 月にはむら雲、松には鶴

(36) *スラックスにはカーディガンの女

以上、従来の研究における並立助詞「に」の中には並立助詞でないものが混じっていることを指摘し、名詞の入れ替えが不可能な「月にむら雲」類における「に」は、格助詞「ニ」と捉えるべきであることを論じた。

3.5 では、典型的並立助詞について検討する。

3.5 典型的並立助詞「に」の機能

典型的並立助詞「に」は、並立助詞が一般的に持つ特徴として示した、1) 名詞を列挙し、全体を 1 つの名詞として機能させること、2) 名詞が入れ替えられること、両方を満たす。以下、用例を示す。

- (37) このあたりの料理に欠かせないもの、それがハーブだ。
野菜に魚に肉、どれをとってもその豊富さと新鮮さが自慢だから
[どこにいたってフツウの生活 2003]
- (38) バイタル S. E. ローションの使用感 (ヤクルト化粧品調べ)
★沖縄コスメの教訓 モズクにパパイアに泥。意外な素材のコスメと沖縄パワーに女釘づけ。
[BRUTUS 2004]
- (39) わたしはたしかに息子を連れて、途中までいったんですよ。帽子にコートにサングラスって恰好でね。 [ときめきトゥナイト 1994]
- (40) パパの集めてくれたフランスの玩具。ヨーロッパの人形の家。櫛の木でできた玩具のお城には、鎧に甲冑に綴織り。車庫には、世界じゅうから集められたスポーツカー。 [ハイドラの吊鐘 1996]
- (41) 「ベビーシッターかね」と僧はうなずいた。部屋にいま残っているのは、ロダーにカーにあたしだけだ。 [半熟マルカ魔剣修行！ 2000]
- (42) 朝食の仕度が出来ている。ご飯に味噌汁に玉子焼きに香の物。この瞬間だけ三崎は絹子の中に、妻と同じような堅苦しさを感じる。
[夜の総務探偵 2001]

典型的並立助詞「に」は、「N₁に N₂」を基本とし、2 つ以上の名詞を対等な関係で並べる。また、この「に」は、名詞に後接し名詞に名詞を足す、付け加えるという「添加」の機能を担っている用法であると考えられる。

また、典型的並立助詞「に」は、以下のように、「に」の出現する位置が様々である。

- (43) インドネシアであと絶たぬ密輸
ヤマイタチにオランウータン、大ワシ…摘発強化も捜査情報漏洩当局マ

ークに日本人も豊かな自然と動物の宝庫といわれるインドネシアは、貴重な動植物の密輸天国としても知られている。 [産経新聞 2003]

(44) マッコリ 2 壺&ザブトンって部位とケジャン (絶品☆) 上タン塩にスンドゥブ、ジョンなどで満腹っす (´▽`) [Yahoo!ブログ 2008]

(45) 音楽評論家、間章さんもいた。「いつでも毛皮のロングコート、帽子にサングラス。こわくて誰も話しかけられなかった。 [朝日新聞 2004]

いくつか名詞を列挙しているが、「【A】に【B、C】」、「【A、B】に【C】」といった形を取っている。「に」がどのような位置に現れるかは、「に」自体によって決まるものではなく、名詞の解釈や文脈によって自由に決まると考えられる。いずれにしても「に」が行っているのは、前の名詞 (あるいは、集合) に後ろの名詞 (あるいは、集合) を付加することのみであり、表層での形式は異なるものの、「に」が添加の機能を担うことに変わりはない。

ここで、「前の名詞に後ろの名詞を付加するのみ」ということについて考えてみる。

(46) 太郎に次郎に三郎 (が来てくれた)。

(46) は、「太郎、次郎、三郎の 3 人 (が来た)」としか解釈ができず、列挙したもの以外の存在は含意しない。これは、「に」が添加、つまり、前の名詞に後ろの名詞を添えるという機能のみを担うためである。この問題は、次節で取り上げる「 N_1 に N_2 に $\sim N_n$ に」の検討の際に、再度取り上げる。

3.6 例示を表す並立助詞「に」

並立助詞には、最後尾の名詞にも付加できるものとできないものがある。先述の通り、大坪 (1970 : 49) は「に」について、「並立する語のうち、最後のは付かず、一ニ一の形を取る」とする。しかし、次に示すように、最後尾の名詞に「に」が付加している用例は少なからず見られる⁸。

⁸ 最後尾の名詞に「に」を取るか否かという点だけを見れば、次のようなものも例と

- (47) このおもちゃ箱感覚と、たやすくコラボレーションできるアーティストたちが、夜な夜なライブにパフォーマンスに、とにかくいつでも賑わっているんです。 [BRUTUS2003] (= (1))
- (48) 「まあ、護摩の灰に雲助に、旅先にゃ不逞の連中が多いからね。 能く有ることさ」 [覘き小平次 2005] (= (21))
- (49) デザートはドーナツにプリンにお菓子に果物に…ママはずっと食べるか飲むかしてたでっ! [Yahoo!ブログ 2008]
- (50) ビールにワインに色々あるから一升で大丈夫だろうと思っていたら、まだメインのシュールストレミングにたどり着く前に空っぽに。 [Yahoo!ブログ 2008]
- (51) ひっさびさの取締り対策特集である。年末年始は、帰省に旅行にクルマの移動が増える季節。つまり、ケーサツ様の不当取締りが増える時期でもあるわけだ。 [週刊プレイボーイ 2001]
- (52) こうしてぼくは、自分のやりたいことがわかり、毎日、勉強にスポーツに頑張っているよ。 [星居山の星の子たち 2002]
- (53) コーヒーをセットして直火にかけるだけの手軽さが魅力。山に川に、アウトドアコーヒーを楽しみたい人におすすめ。
[『パーコレーター』 <https://www.ucc.co.jp/enjoy/brew/percolator.html>]

して挙がる。

(iii) 美しさとたのしみと勇気の源泉をなじみふかい母国の風土と生活のたたかいのうちに発見し、それを文学に絵画に、映画に音楽に再現し、発展させてゆこうとする熱意を、わたしたちでない誰がその体の内に熱く感じているというのだろう。 [青：宮本百合子『三年たった今日』]

(iv) 一隅に長方形の大きな炉が切つて、これを火鉢に竈に、煙草盆に、冬ならば暖炉に使用するのである。 [青：国木田独歩『空知川の岸边』]

これらは、見かけ上、「N₁にN₂に～N_nに」と捉えられそうだが、最後尾の名詞に付く「に」は述語動詞に係っており、二格としか読み取れない。すなわち、「に」が最後尾の名詞に付いていても項の関係を有するものは、格助詞「に」と捉えるべきである。このようなものは考察から除く。

これらは、名詞の入れ替えが可能であり、また、述語動詞と格関係を持つとは捉えられない。よって、最後尾の「に」も並立助詞であると捉えられる。このような並立助詞「に」は、先行研究において指摘されていないものであるが、用例の出典から明らかのように、Web 上から雑誌、書籍に至るまで、様々な媒体で用いられる確立された用法として位置付けられる。

用例を見ると、例えば、上記 (47) の「夜な夜なライブにパフォーマンスに、とにかくいつでも賑わっているんです」では、賑わいの例として「ライブ」と「パフォーマンス」が、(53) の「山に川に、アウトドアコーヒーを楽しみたい人におすすめ」では、コーヒーを楽しむアウトドアの例として「山」と「川」が挙げられていると捉えられる。

このように、「 N_1 に N_2 に～ N_n に」の部分はある事物の例を表すものとして機能していると言える。それが顕著に表れるのが以下のような場合である。

- (54) a. ビールに焼酎、2種類のお酒を買った。
b. ??ビールに焼酎に、2種類のお酒を買った。
c. ビールに焼酎に、様々な種類のお酒を買った。

(54) の各文は、「ビール」「焼酎」と「お酒」が「要素-母集合」という関係になっていると解釈される。(54a) は、3.5 で取り上げた典型的並立助詞「に」である。ビールと焼酎だけを指し示す「ビールに焼酎」と母集合の「2種類のお酒」の意味内容が一致するため、自然な文となる。3.5 でも触れたが、典型的並立助詞「に」が列挙した名詞以外の存在は含意しないことが、この例からも分かる。一方、(54a) と違い、(54b) の「ビールに焼酎に」は、母集合の「2種類のお酒」と意味的に相容れず、不自然であることから、他の要素が潜在すると分析できる。(54b) は、(54c) のように、母集合にその他の要素の存在の可能性を与えると自然となる。

これを踏まえ、以下、「 N_1 に N_2 に～ N_n に」を「に例示句」、それを形成する「に」を「例示を表す並立助詞「に」」と呼ぶ。

一見したところ、「に例示句」は、江口 (1998) の「不定的同格構造」の並列句タイプ (並列助詞で並べられた句が同格句になる (江口 1998)) と類似する。

以下、同格句と「に例示句」には下線を付す。江口（1998）の例文では、ホストの名詞句は太字で示されているため、同様に示す。

- (55) それにイタリアとかドイツとか、**あんな野蛮な国**と結んで、こんな向う見ずな戦争をしかけなければならないわけが何処にあるんだい？

（福永武彦『草の花』）

（江口 1998 : 13）

- (56) 試験の直前には、単語なり公式なり、**覚えていればすぐに役立ちそうなもの**に目を通すべきだ。

（江口 1998 : 13）

「に例示句」は（54c）に加え、（48）や（51）などがそれに当たる。（54）と同様、母集合は四角で示す⁹。

- (57) まあ、護摩の灰に雲助に、旅先にゃ**不逞の連中**が多いからね。

[規き小平次 2005] (= (48))

- (58) 年末年始は、帰省に旅行に**クルマの移動**が増える季節。

[週刊プレイボーイ 2001] (= (51))

江口（1998）では、不定的同格構造の特徴として、①前の句（同格句）と後ろの句（ホストの名詞句）が結果的に「同じ」対象を指示し、②前の句と後ろの句の順番を逆にすると非文になることが挙げられている。しかし、「に例示句」は、①は満たすが、②は満たさない。

- (59) ***あんな野蛮な国**と、それにイタリアとかドイツとか、結んで、こんな向う見ずな戦争をしかけなければならないわけが何処にあるんだい？

- (60) 年末年始は、**クルマの移動**が、帰省に旅行に、増える季節。

⁹ 江口（1998）のホストの名詞句は格助詞を含むが、本研究の母集合は格助詞を含まない。

したがって、「に例示句」は不定的同格構造を成しているとは捉えられない。
では、「に例示句」はどのように位置付けるべきなのか。

(55) (56) のような同格句は、ホストの名詞句を、格助詞を残して削除できるのに対し、「に例示句」はそれを許容しない。

(61) それにイタリアとかドイツとかと結んで、こんな向う見ずな戦争をし
かけなければならないわけが何処にあるんだい？

(62) *年末年始は、帰省に旅行にが増える季節。

(61) (62) の対比は、不定的同格構造が同格句とホストの名詞句とが同じ格を受けて同格構造を成すことで「要素- (属性を表す) 集合 (江口 1998)」の関係を作るのに対し、「に例示句」は、母集合と同じ格を受けて同格構造を成すのではなく、より文脈に依存した形で「要素-母集合」の関係を作っていることを意味している。「に例示句」が構造ではなく、文脈に依存していることは、次の例を見ると分かりやすい。

(63) こうしてぼくは、自分のやりたいことがわかり、毎日、勉強にスポー
ツに頑張っているよ。 [星居山の星の子たち 2002] (= (52))

(63) には、「勉強にスポーツに」が、「自分のやりたいこと」という解釈と、「自分のやりたいことのために今頑張っていること」という解釈の 2 通りがあり、前者は名詞句が母集合になっているもの、後者は文脈から推論される事態が母集合になっているものである。

ここで、「に例示句」における母集合の有無について考えてみる。

母集合を表す名詞句を消去すると、文として成り立つ場合と成り立たない場合がある。

(64) a. ビールに焼酎に、様々な種類のお酒を買った。 (= (54c))

b. *ビールに焼酎に、 \emptyset 買った。

- (65) a. ぼくは、毎日、勉強にスポーツに、自分のやりたいことを頑張っているよ。
[星居山の星の子たち 2002] (= (63) 改)
- b. ぼくは、毎日、勉強にスポーツに、 \emptyset 頑張っているよ。

(64b) のように、母集合が明示されない場合に非文となることを考えると、「に例示句」は、基本的には母集合を表す名詞句とともに文中に生起しなければならないと考えられる。一方、(65b) のような例は、何らかの条件によって母集合がなくても成り立っているが、その成立条件に関しては、不定的同格構造とは異なる説明を与えなければならない。

結論を先取りすると、「に例示句」が述語か述語句などから解釈される事態と「要素-母集合」の関係を成している場合は、名詞句としての母集合が存在しなくても文として成立すると考える。

- (66) a. *ビールに焼酎に、 \emptyset 飲んだ。
- b. ビールに焼酎に、一晩中ずっと飲んだ。

(66a) は、(64b) の述語「買う」を「飲む」に変えたものであるが、自然さには変わりはなく、(64b) と同じく文としての成立が難しい。しかし、(66b) のように「一晩中ずっと」を挿入すると自然な文となる。これは、「飲む」という行為は、一度に複数の行為を行うことができないため、(66a) では「ビール」「焼酎」を「飲む」の例示として捉えることが難しいのに対し、(66b) は、「一晩中ずっと」の挿入により、「ビール」「焼酎」が繰り返し飲まれるという行為の例示として捉えやすくなることで、表される事態と「に例示句」の間に「要素-母集合」の関係を読みやすくなっていることを意味していると捉えられる。

以下の例も、同様に説明できる。

- (67) a. *ぼくは、毎日、映画にスポーツに、 \emptyset 観てるよ。
- b. ぼくは、毎日、映画にスポーツに、一日中観てるよ。
- c. ぼくは、毎日、映画にスポーツに、何台ものテレビで観てるよ。

(67a) は (66a) と同じく不自然であるが、(67b) (67c) のように「一日中」「何台ものテレビで」の表現を挿入することによって自然な文となる。(67a) の場合、「飲む」と同様、「観る」という行為は一度に複数行われるものではないため、「映画」「スポーツ」を「観る」の例示として捉えることはできない。しかし、(67b) のように、「一日中」のような表現があると、繰り返される行為の例示として「「映画」「スポーツ」を「観る」」という解釈ができるようになる。同じく、(67c) は「何台ものテレビで」のような表現により、同時に複数の行為を表せることで例示が成り立つと考えられる。そして、上述した(65b) は、「頑張る」という行為については、複数の物事に同時に取り組むことを許容するため、「勉強」「スポーツ」をその例として読み取ることができると捉えられる。このような同時進行が可能な、複数の行為として例示が成り立つのは、以下の「忙しい」も同様である。

(68) 毎日、仕事に子育てに、忙しい。

以上から考えると、「に例示句」は、それが何の例示であるのかを明示する母集合の存在が必要であることを基本とするが、名詞句としての母集合がない場合は、文脈から推論される事態が母集合になっているか ((64))、もしくは、複数の行為が行われるという解釈ができるか ((65b) (66b) (67b) (67c) (68))、という条件を満たさなければならない。言い換えると、「に例示句」は、文中か文脈上の母集合と結び付いていることが要求される。

以上、3.6 では、「 N_1 に N_2 に～ N_n に」 (= 「に例示句」) がある集合の要素の例を表し、「に例示句」は述語か述語句などから解釈される事態と「要素-母集合」の関係性を成すことで成立することを示した。

3.7 では、「に例示句」が文内のどのような位置に生起しているのかについて、並立助詞「と」と比較しながら考察を行う。

3.7 「に例示句」の文内での位置

ここでは、「と」との比較から「に例示句」が文内のどのような位置にあるのかについて考察を行う。

中俣（2015）にも指摘が見られるように、「と」は「に」と類似する点を多く持つ。しかし、「と」は「に」と違って「要素-母集合」の関係は作れず、例示の解釈を持たない。

- (69) a. 研究支援に技術者教育に、サポートプログラムを提供する。
b. ??研究支援と技術者教育と、サポートプログラムを提供する。

ここで問題となるのが、なぜ「に」にだけにこのような用法が生じたのか、という点である。

「と」は、「の」を伴って連体修飾要素として機能したり、「が」「を」を直接取って項として機能したりできるのに対し、「に例示句」はそのようなことはできない¹⁰。

- (70) a. *研究支援に技術者教育にのサポートプログラムを提供する。
b. 研究支援と技術者教育とのサポートプログラムを提供する。
(71) a. *研究支援に技術者教育にが提供された。
b. 研究支援と技術者教育とが提供された。
(72) a. *研究支援に技術者教育にを提供する。
b. 研究支援と技術者教育とを提供する。

3.6 において、「に例示句」は、不定的同格構造と類似はするものの、母集合と同じ格を受けて同格構造を成すことはできないことを指摘した。不定的同格構造は、同格の名の通り、同格句がホストの名詞句と同じ格を与えられているからこそ作れるものであるため、(69a)における「に例示句」は名詞句の外にあると考えるしかない。加えて、(70)～(72)に示したように、連体助詞「の」や

¹⁰ 典型的並立助詞「に」はいずれも可能である。

- (v) a. 研究支援に技術者教育のサポートプログラムを提供する。
b. 研究支援に技術者教育が提供された。
c. 研究支援に技術者教育を提供する。

格助詞「が」「を」を伴って名詞として振る舞うことも不可能である。以上のような振る舞いを見ると、「に例示句」は副詞と同様の位置に生起していると捉えざるを得ない。

一方の「と」は、(69b)～(72b)が示すように、名詞句として、もしくは、名詞句内部でしか機能できないと言える。

このような名詞句内にとらわれない「に」と、名詞句の外には出られない「と」という相違が、例示用法の成立に影響を与えていると考えられる。

3.8 並立助詞「に」の2用法

最後に、並立助詞「に」の用法についてまとめる。

並立助詞が一般的に持つ特徴は、1) 名詞を列挙し、全体を1つの名詞として機能させること、2) 名詞が入れ替えられること、の2つであった。典型的並立助詞「に」は、1)と2)両方の特徴を満たすものである。

(73) a. このあたりの料理に欠かせないもの、それがハーブだ。
野菜に魚に肉、どれをとってもその豊富さと新鮮さが自慢だから～
[どこにいたってフツウの生活 2003] (= (37))

b. {魚に肉に野菜／肉に野菜に魚}

(74) a. わたしはたしかに息子を連れて、途中までいったんですよ。帽子に
コートにサングラスにって恰好でね。

[ときめきトゥナイト 1994] (= (39))

b. {コートにサングラスに帽子／サングラスに帽子にコート}

一方、例示を表す並立助詞「に」は、名詞の入れ替えが可能であるが、3.7でも述べたように、全体としては名詞としてではなく、副詞として機能していると考えられる。

(75) まあ、{護摩の灰に雲助に／雲助に護摩の灰に}、旅先にや不逞の連
中が多いからね。 [規き小平次 2005] (= (57) 改)

- (76) 年末年始は、{帰省に旅行に／旅行に帰省に} クルマの移動が増える季節。
[週刊プレイボーイ 2001] (= (58) 改)

以上をまとめると、表 2 のようになる。

表 2 並立助詞「に」の 2 用法

	名詞の入れ替え	全体で 1 つの名詞として機能する
「N ₁ に N ₂ に～N _n 」 典型的並立助詞「に」	○	○
「N ₁ に N ₂ に～N _n に」 例示を表す並立助詞「に」	○	×

なお、並立から例示への意味的な派生については、歴史的研究（岩田 2007、岩田 2014 など）でも指摘が見られる。

例示を表す「なり」「たり」の歴史的变化に注目した岩田（2007）は、それらが最初から例示の意味を持っていたわけではないとし、「「全ての要素（あるいは集合）をあげることによって特定の集合を表す」という Total listing を経て、その後、「いくつかの要素を上げることによって集合を表す」Partial listing（例示）へと変化していることから、その歴史的变化の方向性が想定できる（p. 106）」と述べている。また、「とか」の歴史的变化について分析している岩田（2014）は、例示は、歴史的に見た場合、「とか」が表す疑問・伝聞・選言・強意の中で、選言から派生した可能性が高く、選言と例示は集合を作るという点で共通しており、その集合が再解釈され「全て」から「一部」へ変化すれば例示となるとする。加えて、このような変化を想定することで、「とか」を「たり」「なり」「やら」と並行的に捉えられるようになるという。

典型的並立助詞「に」と例示を表す並立助詞「に」は、意味的にも、関連するものとして捉えることができよう。

3.9 本章のまとめ

本研究では、従来の研究が挙げている並立助詞「に」の用法の範囲が一致していないことを指摘し、並立助詞と捉えられないものと、これまで言及されることのなかった用法までを含めて、考察を行った。以下、結論をまとめる。

I 「 $N_1 = N_2$ 」；「月にむら雲」類（格助詞「ニ」）

従来の研究における並立助詞「に」には、並立助詞一般が持つ名詞の入れ替えが可能という特徴を満たさないものがあるが、それらは格助詞「ニ」と捉えられる。

II 「 N_1 に N_2 に～ N_n 」；典型的並立助詞「に」

典型的並立助詞「に」は、添加の機能のみを担う。

III 「 N_1 に N_2 に～ N_n に」；例示を表す並立助詞「に」

「 N_1 に N_2 に～ N_n に」は例示を表し、文脈に依存して文中の名詞句などと「要素-母集合」の関係を成す。そして、例示の用法が「に」には生じ、「に」と類似する「と」には生じなかったのは、「と」が名詞句内でしか機能できないのに対し、「に例示句」は名詞句の外側に生起していることが影響している。

本章では、並立助詞「に」の用法の記述が主な焦点であった。その点については、一定の成果を得られた。

しかし、課題も残されている。

並立助詞「に」の2つの用法は、3.8で少し触れたように、歴史的研究（岩田2007、岩田2014など）を考慮すると、通時的な連続性が想定できるが、現段階では、実際にどのような過程を経たのかについて具体的な論証を挙げ、明らかにすることはできなかった。今後は、歴史的研究を踏まえ、両者における連続性について議論を広げていかなければならない。

また、「に例示句」の現れ方の特徴として、「 N_1 に N_2 に～ N_n と」といったように、最後尾の「に」が「と」に置き換えられる場合、また、「 N_1 に N_2 に～ N_n にと」のように、最後尾の「に」に「と」が付与されて現れることが挙げられる。この点について、以下で、現象の指摘として少し触れておきたい。

「 N_1 に N_2 に… N_n に」は、(77)のように「 N_1 に N_2 に… N_n と」に置き換えられるようである。

- (77) a. コーヒーにパンに半熟卵と、いつもと同じ朝食をとる美子に、猫のトラがまつわりついていた。 [カルメンお美 1988]
- b. コーヒーにパンに半熟卵に、いつもと同じ朝食をとる美子に、猫のトラがまつわりついていた。

すると、最後尾の「に」と「と」が同じように扱えるか否かの問題について考える必要が生じる。

本研究は、暫定的な扱いとして、フォード (1993) の具体化の「と」との比較から説明を試みたい。具体化の「と」は、「例示」「列挙」「過程」の3つに分類されるが、この点からも「に例示句」と意味的に類似しているように見える。しかし、具体化の「と」は、構文的には述語を修飾するが、意味的には補語の名詞を修飾(内容補充)するという特長を持つとされる。したがって、(77a)の「コーヒーにパンに半熟卵」は「(朝食を)とる」を修飾するが、意味的には、「いつもと同じ朝食」の具体的な内容を補っていると説明される。一方、(77b)の「に例示句」は、既に本章で述べたが、構文上、何かに関わっているとは捉えられないため、具体化の「と」のように、述語を修飾しているとは考えられない。

このような理由で考えた場合、「に例示句」と具体化の「と」は同様に扱うことはできないと考えられる。

また、解釈として「コーヒーにパンに半熟卵と」は、「コーヒーにパンに半熟卵」以外のものの想定がしにくい。が、「コーヒーにパンに半熟卵に」の「に例示句」は、それ以外の存在の可能性がうかがえる点でも、(77a)と(77b)における最後尾の「に」と「と」は単なる置き換えとは捉えられない。

次に、「 N_1 に N_2 に… N_n にと」のように「と」が付されている場合であるが、これは、並立助詞「や」には見られない特徴である¹¹。

¹¹ 「と」付与の問題の前に、「 N_1 や N_2 や」を認めるか否かの問題もある。

(78) * パンやシリアルやと朝食は軽めがいい。

Cf. パンにシリアルにと朝食は軽めがいい。

以下のように、実例も多数存在する。

- (79) 〈銀行〉はハイソカーを乗りまわし、女に服や貴金属を買ってやった。そして、レストランに映画に旅行にと豪遊の毎日。青春を取り戻した、と〈銀行〉は思ったそうだ。 [囚人狂時代 1998]
- (80) 人々も夕食を済ませると、また一仕事するか、趣味に勉強にと夕方の活動に入る。 [ケルン大聖堂の見える街 2004]
- (81) 家族なんだから気持ちは伝わるはずですよ。仕事に育児にと忙しくなるでしょうが頑張ってください！ [Yahoo!知恵袋 2005]
- (82) ショッピングに掃除にと過ごした最終日、響はお昼寝もせずに過ごしました。夕方あたりから寝そうな気配。 [Yahoo!ブログ 2008]
- (83) ハーブはお茶に料理に、と使い道がたくさん。鉢植えでいつも手元に置いておくと便利です。 [暮らしの達人 2001]
- (84) 今回はフィギュアに DVD にといろいろグッズを企画中。武道館対策としては、スライドを指すレーザーの部分ででっかくしたいな。 [東京ウォーカー2001]

上記の「と」は、例えば、「フィギュアに DVD にというようにいろいろグッズを企画中」のように、「というように」で置き換えられる。暫定的ではあるが、本研究は、この「と」は引用の「と」と捉えておく。

とすると、「に例示句」の最後尾の「に」と置き換えが可能と見られる「と」と、「に例示句」の最後に付く「と」は異なるものなのかについて考える必要が出てくる。また、引用の「と」と考える場合、前に現れる「に例示句」は節として捉え直すべきなのかといった問題も生じる。

このように、様々な問題と関わるが、すべて今後の課題とする。

第4章 接続助詞の「に」

4.1 はじめに

日本語における接続助詞の「に」は、先行研究において現代語では衰退していることが指摘されている。例えば、京極（1987）は、「近世においても接続助詞「に」の使用は見られるが、近代の口語文になると、「要するに」「思うに」などの慣用句の中に名残をとどめるに過ぎなくなった（p.201）」としている。

しかし、次の例のように、その使用は現代語でも少なからず確認される。

- (1) このように、奈良時代の同時期に口嚙みによるものと麴によるものというまったく異なる醸造法が記録されているわけであるが、後述する『日本書紀』応神天皇 21 年の記録等を勘案するに、この当時一般的であったのは後者の方であったろう。

[『三重の地酒』 <http://www.mienokanbai.jp/jizake/>]

- (2) 次に『塵袋』を二分する古辞書引用の部分をもとに検証してみるに、1、『一切経音義』の典拠とあって、この内容が『四分律』にあることからして、『四分律音義』に共通し、とあって、『壺囊鈔』の記載注記とは内容を異にしている。

[日本語辞書研究 2003]

- (3) 布施検事総長が、軽犯罪法違反容疑だけで強権を発動し、家宅捜索を行なわせた理由を推察するに、マスコミの一大キャンペーンに乗せられた、という根本理由以外に、自分の名をかたって、三木首相に電話をかけられたことへの怒り、感情が作用していたと考えられる。

[台湾を独立させよう 2005]

また、京極（1987）が接続助詞的な「に」の名残をとどめているとする「要するに」、「思うに」についても詳細を検討すると、興味深い点が浮かび上がる。まず、両者の辞書記述を引用する。

[要するに]

○ [副] 今まで述べてきたことをまとめれば。かいつまんで言えば。つまり。

「一勉強をしろということだ」「一君は何を言いたいのかね」

(デジタル大辞泉)

○ ようするーに【要するに】

〔副〕 これまで述べてきた話の内容を簡略に示そうとする気持ちを表す。かいつまんで言えば。つまり。「一資金が足りないということだ」

(明鏡国語辞典 第二版)

[思うに]

○ おもうーに [おもふー] 【思うに／×惟うに】

〔副〕 考えてみるに。推察すると。「一彼はああいう性格なのだ」

(デジタル大辞泉)

○ おもうーに【思うに（惟うに）】

〔副〕 考えてみると。考えたところでは。「一それが世間というものだ」

(明鏡国語辞典 第二版)

辞書記述では、両者はともに「副詞」とされている。

しかし、辞書記述などで一語の副詞とされている「思うに」は、次の例のように、主語のガ格が取れる。このような例までを視野に入れると、「思うに」を単独の副詞とすることには疑問が生じる。

- (4) 私が思うにりそななどの出来高の多い株は二百円→二百一円→二百円→二百一円と一円の幅をほとんどの場合行ったり来たりと値動きが小さいからそのように考えたのでしょうか？ [Yahoo!知恵袋 2005]

- (5) 僕が思うに、七十二、三歳までは十分働けると思います。つまり余生が実人生と同じぐらいの長さ¹と重みをもってきているわけです。

[わたしの新幸福論 2002]

また、2.2.1 でも触れたが、国立国語研究所（1951）では、接続助詞「に」を「前おきを述べて本論の内容の叙述に接続させる」「逆接条件」の2つの用法に分けているが、前者の例として（6）（7）を挙げており、「要するに」と「思うに」を同じ用法を担う接続助詞「に」に分類している。

- (6) しかし、一枚皮を剥ぐと、要するに、公債、地方債へのシワヨセの代りに、～
(国立国語研究所 1951 : 151)

- (7) 思うに、世界平和の維持は、理念だけでは充分ではない。
(国立国語研究所 1951 : 151)

しかし、「要するに」は、「*僕が要するに」のように、主語のガ格を取ることができない。これは、「要するに」を接続助詞「に」とすることに問題があることを示すとともに、「要するに」と「思うに」を同じものとして捉えることにも問題があることを意味している。

以上の点から、「思うに」は、冒頭で挙げた「勘案するに」などと近似する構造を持つものとして捉えられる可能性がある。

本研究では、（1）～（3）のような節と節を繋ぐものを接続助詞「に」と考える。前後の文がどういう関係で繋がっているのかは4.3.1で詳細を述べる。

以上を踏まえ、本章では、「思うに」「勘案するに」のような動詞終止形に後接する「に」を取り上げ、以下の3点を明らかにすることを目的とする。

- I 接続助詞の「に」は、先行研究が指摘するように衰退していると言えるのか。
- II 衰退していないとすれば、どのような形（接続助詞的用法のみならず、接続助詞以外の用法も含む）で現代語に残っているのか。
- III 複数の用法が残っているとして、それぞれの用法に係る関係性は認められるか。

なお、以下の議論では、「思うに」と「勘案するに」に類するものを中心に議論を行っていくが、本研究の主眼は動詞終止形に付く「に」を正しく位置付けることにあるため、本章の議論をまとめる際には「要するに」も含めて体系化を試みる。

4.2 動詞終止形を承ける「に」に関するコーパス調査

現代語において動詞終止形に後接する「に」が、どのように用いられているかを「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」を用いて調査した¹。以下、そこから収集された「に」の後接を許容する動詞を挙げる²。

思うに、考えるに、想像するに、察するに、勘案するに、推測するに、推察するに、推量するに、推理するに、予測するに、推すに、推し量るに、鑑みるに、観望してみるに、類推するに、かえりみるに、回顧するに、考察するに、判断するに、分析するに、研究するに、検証するに、理解するに、案ずるに、言うに（云うに）、言いはるに、尋ねるに、うかがうに、申すに、申し上げるに、おっしゃるに、報じるに、拝見するに、見るに³…

主に、思考、言語活動に関係する動詞に後接していることが分かる。ここから「に」の前に来る動詞には制限があると言える⁴。また、思考動詞のなかでも、話し手の推測・推量を表すものが多い。しかし、同じ思考動詞の範疇に入るもので

¹ 短単位検索で、「動詞+に」「動詞（終止形）+に」「動詞（連体形）+に」の検索を行った。

² 出現頻度の高いものをリストアップした。

³ 「見るに」は、知覚動詞としての「見る」ではなく、内容を理解するという意味で使われるものである。

⁴ 「辿るに」のような動作動詞の例も見られたが、本研究の検索では、1例しか見当たらず、また、意味としては、「記憶を辿る」のような、思考に関するものであった。

(i) 漢末における外戚王莽が篡奪を行うまでの経過を辿るに、そこには常識をもって理解すべからざる不自然な跡が見られる。 [宮崎市定全集 1992]

も「*誤解するに、*分かるに、*思い違いするに、*記憶するに、*覚えるに、*ひらめくに…」などは、「に」の後接を許さない⁵。思考動詞の中でもかなり限定的に用いられることが分かる。

また、「に」は「言う」のような発話動詞にも後接する。発話動詞は、引用である場合が多く、3人称を主語とし、「に」が「には」の形を取るものが大半を占める。これは、人称の問題や「は」の付加の可否とも関連する問題であるため、ここでは対象外とする⁶。以下、用例の一部を示す。

- (8) 宇田川奥さんがおっしゃるには、蜷川は一人でレストランに入れないんですよ。本当なんですか。 [ニッポン食いしんぼ列伝 1997]
- (9) なんとか知人に頼んで電話をしてもらったところヤフーの人が言うには送電ができてなかったために使えなくなっていて今流したので使えるようになります。との事でした。 [Yahoo!知恵袋 2005]

⁵ 吉永（2008）が「思考認識的心理動詞」とするものであり、思考や言語活動を表すという点では、「思うに、考えるに」などと大きな差はない。ただし、「誤解する、分かる」など、「に」の後接が許容されない動詞は、話し手の事態や事実に対する解し方など、主に、話し手の態度表明を表すという点で共通する。このような動詞群は、その意味からして「に」と結合して前節に位置することが難しいと考えるが、詳細な検討は今後の課題とする。

⁶ 発話動詞に「は」の付かない例も見られる。

- (ii) 娘の学校近くのマンションに住んでいるらしいんだけど、娘が言うに、超立派らしい!!うちの娘も、何か間違っ、て、そういう大物を捕まえてくれないかしらね～～ [Yahoo!ブログ 2008]
- (iii) 以上の議論に対して或る人が言うに、なるほど君が孔子の孝悌を排撃する理由は分ったが、そんなら代りに如何なる原理を持出すつもりか、と。 [中国政治論集 1990]

「思うに」のように、主語のガ格を取り得るという面では、両者の似通ったところがうかがえる。この点も含め、今後の課題としたい。

4.3 動詞終止形に後接する 2 種類の「に」

前節で示した例を検討していくと、一見、同じように見える動詞終止形に後接する「に」に、接続助詞として捉えられる「に」と、副詞節マーカーとして捉えられる「に」の 2 種類が存在することが指摘できる。以下、4.3.1 では、接続助詞と捉えられる「に」を、4.3.2 では、副詞節マーカーとして捉えられる「に」を見ていく。

4.3.1 接続助詞の「に」

まず、実際の用例を示す。

- (10) 布施検事総長が、軽犯罪法違反容疑だけで強権を発動し、家宅捜索を行なわせた理由を推察するに、マスコミの一大キャンペーンに乗せられた、という根本理由以外に、自分の名をかたって、三木首相に電話をかけられたことへの怒り、感情が作用していたと考えられる。

[台湾を独立させよう 2005] (= (3))

- (11) 私の眼力の変化をもたらしてくれた史先生自身の眼力の構造を想像してみるに、領域の異なる音叉を何本も持ち、しかもそれぞれの音叉をみがきぬいて、よく共鳴するものは○、共鳴しないものは×と区別することではなかったかと思われる。

[文物鑑定家が語る中国書画の世界 2001]

- (12) 小動物ではなく、大人の間でもなく…そう、足音の感じから押し量るに、ちょうど幼児くらいの重さなのであった。が、もちろん、我が家に子どもはいない。

[ダメな女と呼んでくれ 2001]

- (13) さて、気を取り直して式から推理するに、この答案を書いた人は、A 君の速度を毎分 x メートル、B 君の速度を毎分 y メートル、池のまわりの長さを z メートルとおいて、計算をしたのだらうと思います。

[ハッピーになれる算数 2005]

- (14) しかし、これは軍事都市という結論ありきの解釈ともいえ、同時に出された他の法令から推すに、公の空間が私に浸食されることを防ぎ、都市内部における平時の円滑な通行確保を目指したものであろう。

[中世都市鎌倉の実像と境界 2004]

- (15) 海図により迂回路を研究するに、勇川河谷—アウステン山南側隘路—ルンガ川河谷を迂回せば、比較的容易に、かつ敵飛行場の直前し、敵の虚を衝き得。 [遠い島ガダルカナル 2005]
- (16) まず現行民法規定の親族の範囲について考察するに、この範囲の者は事実上人々が互いに近親者と認めて相接している者とはかなり異なっている。 [家族構成 2001]
- (17) また利水という観点においても、現在、大刀那水系は百パーセント首都圏の利用に供せられ、この十年間をみるに、新たなダム工事によって渇水時の貯水量を数パーセント程度調節することの大きなメリットは考えがたい。 [高木仁三郎著作集 2004]
- (18) しかしながら、こうした南北対立の現状を鑑みるに、流通システムの広域化・標準化は容易でないように思える。 [北米大停電 2004]
- (19) 事故発生直後から JR は健診では問題なかったなんて情報提供していたところを考えるに診断や治療をしてたかどうかはともかく本人も周囲も確信的に鬱病かも… [Yahoo!知恵袋 2005]
- (20) 「長野」で「雪」の状況を心配されていることから察するに、多分長野県内のスキー場のことでしょうね？スキー場情報でも見てください [Yahoo!知恵袋 2005]

「に」を含む節は、後ろに来る節と連結している。前節と後節の関係は、前節の事態を踏まえて、これに対する話者の推量・推測などの内容を後節で述べ立てるといったものである。

また、上記の用例は、「～をVに」、「～からVに」、「～についてVに」といった形式を取る。これは、言い換えるなら、動詞の要求する項などが現れ得ることを意味する。一般的な副詞が項などの成分を取らないのに対し、この「に」は、内部構造を有する文を承けることができるという点で性質を異にする。傍証として、次に示すように、他の接続助詞との置き換えが可能であることが挙げられる。上記の例(16)～(20)を用いる。

- (21) まず現行民法規定の親族の範囲について{考察すると/考察すれば}、この範囲の者は事実上人々が互いに近親者と認めて相接している者とはかなり異なっている。 [家族構成 2001] (= (16) 改)
- (22) また利水という観点においても、現在、大刀那水系は百パーセント首都圏の利用に供せられ、この十年間を{みると/みれば}、新たなダム工事によって渇水時の貯水量を数パーセント程度調節することの大きなメリットは考えがたい。 [高木仁三郎著作集 2004] (= (17) 改)
- (23) しかしながら、こうした南北対立の現状を{鑑みると/鑑みれば}、流通システムの広域化・標準化は容易でないように思える。 [北米大停電 2004] (= (18) 改)
- (24) 事故発生直後から JR は健診では問題なかったなんて情報提供していたところを{考えると/考えれば}診断や治療をしてたかどうかはともかく本人も周囲も確信的に鬱病かも… [Yahoo!知恵袋 2005] (= (19) 改)
- (25) 「長野」で「雪」の状況を心配されていることから{察すると/察すれば}、多分長野県内のスキー場のことでしょよね？スキー場情報でも見てください [Yahoo!知恵袋 2005] (= (20) 改)

このように、このタイプの「に」は接続助詞「と」「ば」に置き換えることができる。この置き換えは、「に」が接続助詞として、そして、「に」に前接する語が動詞として機能していることを表す。また、主語のガ格に加え、他の格（動詞の項や項以外のものも含む）も前節のなかに生起するという現象もそれを支持する。つまり、「に」を含む節が従属節として機能していると言えるのである。

加えて、意味的な面を見ても、このタイプの「に」は、接続助詞「と」の〈前置き〉用法、もしくは、「ば」の〈観点〉の用法に近い。グループ・ジャマシイ (1998) は、「と」の〈前置き〉について、「「言う」「見る」「考える」「比べる」など、発言や思考、比較などを表す動詞に続き、後に続くことがらごどのような観点や立場から述べられているかについて前置きの表現 (p. 292)」と記述している。また、「ば」の〈観点〉の用法については、「「言う」「見る」「考える」「比べる」など、発言や思考、比較などを表す動

詞を承けて、後に続く発言や判断がどのような観点・立場からなされているのか、前もって予告し、説明する言い方 (p. 486) 」としている。一部の例を示す。

(26) 今となって考えてみると、彼の言うことももつともだ。

(グループ・ジャマシイ 1998 : 292)

(27) 思えば、事業が成功するまでのこの 10 年は長い年月だった。

(グループ・ジャマシイ 1998 : 486)

「と」と「ば」のこのような用法は、「に」と通じるところがある。既に述べたが、「に」が思考や発言の動詞の後ろに付いて、前節の事態を踏まえてこれに対する話者の推量・推測などを後節で述べるという点がそれである。他の接続助詞と置き換えられ、さらに、類似した用法を持つことは、「に」が接続助詞として機能していることの裏付けとなる。

一方で、冒頭で取り上げた「思うに」も同じくガ格を取れることを確認した。しかし、「思うに」は、他の接続助詞と置き換えができず、主語のガ格以外の成分を取らない。詳細は 4.3.2 で述べるが、この段階で言えることは、以下に示す例からも明らかのように、「思うに」は、本節で取り上げた接続助詞「に」とは構造を異にするということである。

(28) a. 私が {??思うと/??思ったら}、この「に」は格助詞ではない。

b. ??私がこれを思うに、この「に」は格助詞ではない。

(29) a. イラク戦争は自分が思うにアメリカの国際規範を無視した不当な戦争だと思っておりますが、しかしフセインも放って置いてはいけないんだとおもってました。 [Yahoo!知恵袋 2005]

b. イラク戦争は自分が {??思うと/??思ったら}アメリカの国際規範を無視した不当な戦争だと思っておりますが、しかしフセインも放って置いてはいけないんだとおもってました。

c. ??イラク戦争は自分が政治目的の達成のためと思うにアメリカの国際規範を無視した～

- (30) a. 僕が{??思うと/??思ったら}、七十二、三歳までは十分働けると思います。 [わたしの新幸福論 2002] (= (5) 改)
- b. ??僕が定年年齢について思うに、七十二、三歳までは十分働けると思います。

上記のように、「思うに」は、他の接続助詞に置き換えられないうえに、波線で示したガ格以外の他の成分を取らないことが確認できる。

以上、本節では、動詞の終止形に付く接続助詞の「に」の構造について述べた。ここで、本研究の課題の一つである、「I 接続助詞の「に」は、先行研究が指摘するように衰退していると言えるのか」について述べる。

山口 (1988) によれば、古典語における接続助詞「に」は、順接 (= (31))、順接仮定条件関係 (= (32))、逆接仮定条件関係 (= (33))、原因理由 (= (34)) といったように、多様な意味関係を構成した。当該の用例を山口 (1988) より引用する。

- (31) 朝餉のおまへにうへおはしますに、御覧じていみじうおどろかえ給ふ。
(枕・うへにさぶらふ御猫は)
(山口 1988 : 174)
- (32) まめならむ男どもを率てまかりて、あぐらを結ひあげて窺はせんに、
そこらの燕、子産まざらむやは。(竹取) (山口 1988 : 175)
- (33) とざまかうざまにつけて、はぐまむに、咎あるまじきを、そのあら
ん乳母などにもことざまにいひなしてものせよかし。(源氏・夕顔)
(山口 1988 : 175)
- (34) 此事をなげくに、ひげも白く、腰もかゞまり、目もたゞれにけり。
(竹取)
(山口 1988 : 176)

現代語における接続助詞「に」は、4.2 で示したように、前接動詞に制限を持ち、また、本節で述べたように、その用法は、前節の事態を踏まえ、話者の推量・推測などの内容を後節で述べ立てるもののみで、(31) ~ (34) のような意

味関係を表すことはできない。

以上より、「I 接続助詞の「に」は、先行研究が指摘するように衰退していると言えるのか」に対する本研究の主張は、「古典語を加味すると、動詞や用法に制限はあるものの、「に」は現代語において接続助詞として機能している」となる。

4.3.1 では接続助詞の「に」について検討したが、次は、「思うに」と関連する副詞節マーカーについて論じる。

4.3.2 副詞節マーカーの「に」

4.3.1 で触れたように、「思うに」の「に」は他の接続助詞とは置き換えられず、主語のガ格以外の項を取れないということから、接続助詞「に」とは異なる構造を考える必要がある。以下、例を示す⁷。

- (35) 私が思うにりそななどの出来高の多い株は二百円→二百一円→二百円
→二百一円と一円の幅をほとんどの場合行ったり来たりと値動きが小さいからそのように考えたのでしょうか？

[Yahoo!知恵袋 2005] (= (4))

⁷ 「は」の付く以下のようなものも見られるが、以下を「私が思うに」、「私が考えるに」に変えても意味的に通じる。

- (iv) 文明とは、人間の生活状態が本当に進歩することだと断言するなら、私が思うには、ただ賢い人々だけがその便利さを利用しているのである。

[森の生活 1991]

- (v) 「もしかして、あとを尾けてくるかと思ったが、さほど用心ぶかくもないようでき。私が考えるには、船頭たちは今夜、浪華丸に悪戯をしにゆくんじゃござんせんか」

[海商岩橋万造の生涯 1987]

「は」は、「??戦争のことを勘案するには」のように「勘案するに」類には付与できないことも合わせて考えると、「私が思うに」が従属節でないためという可能性が考えられる。しかし、「は」の付与が何を意味するのかについては、構造的・意味的な面からのさらなる検討を要するため、今後の課題としたい。

- (36) 僕が思うに、七十二、三歳までは十分働けると思います。つまり余生が実人生と同じぐらいの長さで重みをもってきているわけです。
[わたしの新幸福論 2002] (= (30))
- (37) 私が思うに、人を知るといことはひどくむつかしい。[抱朴子 1990]
- (38) 実際、田中をつついたら、検察スキャンダルが出る可能性があった。だから手控えた。わしが思うに、田中森一を引っ張ったら、それはいっぱいネタはある。 [地獄への道はアホな正義で埋まるとる 1999]
- (39) というわけで、誰も大家さんに月々のものを払ってはいないんですが、私が考えるに、今日の呼び出しはどうしたってそのことでしょうね。
[戦時下動物活用法 1994]
- (40) ところが現在の日本の労組は全くふぬけになってしまった。もともとぼくが思うに日本の労働組合は大して力を持っておらんかったし、経済が調子ええときは労働者全体のことなどより、自分の給料のことしか考えておらんかった。
[火事場の経済学 2003]
- (41) 安いと言うのが定説になっていますが、公表はされていません。ただ、私が考えるに、選手たちより安いと言うことで、一般よりはいいはずだと思うのですが…
[Yahoo!知恵袋 2005]
- (42) 兄の宅には親族が集まって相談中です。わたしの考えるに、これは一時からだをかくすのが上分別と思いましたから、そのまま裏口から便所にゆくようにしてでてもらうた。
[日本残酷物語 1995]

上記の用例は、「に」が動詞終止形に後接しているため、一見すると、4.3.1で取り上げた接続助詞「に」の構造と似ているように見える⁸。しかし、既述した

⁸ 次のような例は、表面上は「思うに」類と同じ形をしているが、他の格を補えるため、接続助詞と捉える必要がある。

- (vi) 天気や声の調子が違うだけで、素数に射す光の色が変化して見えた。私が{0/そこから} 推察するに、素数の魅力は、それがどういう秩序で出現するか、説明できないところにあるのではないかと思われた。

[博士の愛した数式 2003]

通り、接続助詞「に」がガ格以外の他の項を取るのに対し、この「に」は、ガ格しか取れないという点に違いがある⁹¹⁰。

また、既に冒頭で述べたが、同じく副詞とされる「要するに」を見てみると、「要するに」は主語のガ格を取らず、他の項も取ることができないため、「思うに」とは構造を異にする。

- (43) a. そうこうするうちに水が漏れ始めた。要するにガス・ボイラーの故障である。 [東は東、西は西 2005]
b. *私が要するにガス・ボイラーの故障である。
- (44) a. しかし要するにこの頃は、唯一競技場で走ることだけが競技種目だった。 [ギリシアの古代オリンピック 2004]
b. *しかしそのことを要するにこの頃は、～
- (45) a. 「閨秀」とは、「学問や芸術に優れた女性」のことで、要するに「女流作家特集」である。 [樋口一葉と十三人の男たち 2004]
b. *～のことで、これを要するに「女流作家特集」である。

⁹ 例(42)の「わたしの考えるに」のように、「ガ/ノ交替」により主格標示が「の」で現れる場合もある。

¹⁰ 以下のような用例が稀に見られるが、「勘案するに」類と比べると「思うに」類は、文レベルで節を取るとまでは言いがたい。

- (vii) その意味で、わたしたちは数少ない太子の遺語を中心として、太子の人格と感化をみてきたのである。これを思うに、太子信仰は起こるべくして起こったということだ。 [やっぱり邪馬台国は九州にあった 2001]
- (viii) わが生涯を思うによくよく好き放題にいきてきたものだと思わざるを得ない [Yahoo!ブログ 2008]

古典語ではヲ格を取っていたようであるが、本研究は、共時的な観点に立つものであるため、詳細については立ち入らない。

- (ix) 久にあらむ君を思ふに久方の清き月夜も闇の夜に見ゆ
(万葉・十二・三二〇八)
(山口 1980 : 165)

しかし、日本語では、主語のガ格を表に出さないということが一般的に行われるため、意味的に支障なく省略が可能であり、「思うに」の主語を省略できる。そのため、表面上は「要するに」のようなものと同じ現れ方をしているように見える。だが、「要するに」のような副詞は、動詞部分をマス形に変えることができず、その点で一語化が進んでいると考えられる。一方、「思うに」類と接続助詞「に」は、問題なくマス形に変換できる。

(46) 要するに/*要しますに

(47) 私が思うに/私が思いますに

(48) 僕が考えるに/僕が考えますに

(49) 「長野」で「雪」の状況を心配されていることから察しますに、～

[Yahoo!知恵袋 2005] (= (25) 改)

ここまで、「思うに」類が、接続助詞の「に」とも、単独で副詞と捉えられる「要するに」とも振る舞いが異なることを見てきた。では、「思うに」類の「に」はどのように位置付けるべきなのか。

「思うに」類は、命題の外に存在し、意味的にいわゆる呼応関係を積極的に持たないという点で、工藤（1978）の挙げる注釈副詞の機能と似る。以下、工藤（1978）が注釈副詞の特徴として挙げているもののなかで、関連する部分を引用する。

1. 文（または従属句）の主たる叙述内容の外にあって、それに対する評価や位置付けなど、なんらかの話し手の見解を表わす副詞である。
2. 状態や程度の副詞のように述語の属性を限定するものではなく、したがって叙述のコトガラ的な内容を豊かにするものではない。
3. 陳述の副詞のように述語のムード（叙法）を強調・明確化するものではなく、したがって、いわゆる呼応現象を積極的には、もたない。

文中での意味や機能を考えると、「思うに」類と注釈副詞は類似するが、「思

うに」類を単純に副詞として扱えないことは既述した通りである。「思うに」類は、主語のガ格を取れる、マス形に置き換えられるという点では「勘案するに」類（接続助詞の「に」）と似ており、主語のガ格を省略できるという点では、主語のガ格が取れない「要するに」（副詞語尾の「に」）と共通点を持つ。このように、「思うに」類は、「勘案するに」類と「要するに」の中間的なものとして捉えられる。

このような理由から、本研究は、暫定的な扱いとして「思うに」類における「に」を副詞節マーカーと捉える。

4.3.3 まとめ

4.3.1 では接続助詞として機能する「に」を、4.3.2 では副詞節マーカーの「に」について論じた。異なる構造を持つ 2 種類の「に」に関する議論は、本研究の課題であった「Ⅱ どのような形で現代語に残っているのか」の答えともなる。すなわち、主語を含め、それ以外の成分を取り、かつ、他の接続助詞との置き換えが可能な「に」は接続助詞として、また、主語のガ格以外の成分が取れず、副詞節を作る「に」は、副詞節マーカーとして現代語に残っていると捉えられるのである。

次節では、これまで論じてきた 2 種類の「に」に「要するに」（副詞語尾の「に」）を含めた動詞の終止形に後接する 3 種類の「に」の関係性をどう捉えるべきかについて考察する。

4.4 動詞終止形に後接する「に」の関係性

4.3 までで、動詞の終止形に付く「に」のうち、接続助詞と捉えられる「に」と副詞節マーカーと捉えられる「に」の 2 種類の「に」について検討してきた。本節では、「要するに」を含めた、動詞終止形に後接する「に」の関係性をどう記述できるかについて論じていく。

まず、本研究で見てきた現象を整理し、以下に示す。

- a. 接続助詞の「に」と思われるものには、主語のガ格が現れないものが多いが、副詞節マーカーの「に」は、主語のガ格が現れる場合と現れな

い場合がある。日本語では主語を表に出さないことがよくあるため、主語の有無が接続助詞と副詞節マーカーを区別する明確な基準にはならないが、副詞は主語のガ格を取れないため、接続助詞、副詞節マーカーの両者と単独の副詞を区別するための基準となる。

- b. 接続助詞の「に」と思われるものには、主語のガ格以外の項を節内に取れるものと、取れないものがある。主語のガ格以外の項を取るものは、「に」の前の語が動詞として機能していることを意味する。
- c. 接続助詞の「に」と思われるものには、他の接続助詞（「と」、「ば」）と置き換えられるものとそうでないものがある。これは、bと同様、「に」の前の動詞が動詞として機能している傍証となる。
- d. マス形への置き換えが可能なものとそうでないものがあるが、置き換えられないものは、一語化していると言える。

以上の観察は、表1のようにまとめられる。

表1 動詞の終止形に後接する「に」

	「勘案するに」類	「思うに」類	「要するに」
ガ格が取れる ¹¹	△	○	×
ガ格以外の項を 節内に取れる	○	×	×
他の接続助詞との 置き換え	○	×	×
マス形への変化	○	○	×
「に」の位置付け	接続助詞	副詞節マーカー	副詞語尾

表1からは、動詞終止形に後接する「に」のある種の連続性が見て取れる。

「勘案するに」類（接続助詞の「に」）は、主語のガ格以外の項を取ることが

¹¹ 「勘案するに」類の場合は、主語のガ格が現れにくいという意味で、ガ格が取れない「要するに」の「×」と区別するため、「△」を付けている。

できる。一方、その対極にある「要するに」（副詞語尾の「に」）は、主語のガ格を含め、項を取ることができず、また、マス形への置き換えもできない。それに対し、両者の中間的な性質を示す「思うに」類（副詞節マーカ―の「に」）は、主語のガ格を取れる、マス形にできるという点では「勘案するに」類（接続助詞の「に」）と、主語のガ格を省略できるという点では、主語のガ格が取れない「要するに」（副詞語尾の「に」）と共通点を持つ。

本章で示してきたものは、すべて、構造的な大きさを示すものであると言える。これを、便宜的に「節性」と呼ぶなら、動詞終止形に後接する「に」には、以下のような節性の大きさに関する共時的連続性が見られることが指摘できる。

(50) 節性の大きさ

接続助詞の「に」 > 副詞節マーカ―の「に」 > 副詞語尾の「に」
「勘案するに」類 「思うに」類 「要するに」

4.5 本章のまとめ

本章では、一見、同じような構造を持つように見える「要するに」と「思うに」類、そして「勘案するに」類について検討を行った。

「要するに」と「思うに」類が同様に副詞として扱われることには問題があり、両者を同等に捉えられないことを指摘し、「思うに」類と「勘案するに」類における「に」についても、異なる文構造を有していることを主張した。以下、冒頭で掲げた本研究の目的に沿って、結果を簡略に述べる。

- I 接続助詞の「に」は、先行研究が指摘するように衰退していると言えるのか。
⇒古典語を加味すると、動詞や用法に制限はあるものの、「に」は現代語において接続助詞として機能している。
- II 衰退していないとすれば、どのような形で現代語に残っているのか。
⇒接続助詞の「に」と、副詞節マーカ―の「に」として現代語で機能している。
- III 複数の用法が残っているとして、それぞれの用法に係性は認められるか。

⇒節性の大きさで言えば、「「勘案するに」類（接続助詞の「に」）>「思うに」類（副詞節マーカ－の「に」）>「要するに」（副詞語尾の「に」）のような連続性が見られる。

ただし、これは、あくまで、共時的な観点によるものである。歴史的に見た場合にこのような派生関係が認められるかについては、通時的調査による裏付けが必要となる。

また、残る問題も多い。発話動詞や思考動詞に「は」の付くものについては考察に至れなかった。加えて、同じく思考動詞の範疇に入る動詞の中でも、「に」の後接を許すものとそうでないものがあったが、その違いについての詳細な議論はできなかった。

さらに、本論文では扱わなかったが、意味的に注釈を表すものとして「ことに」型が挙げられる。以下は「ことに」型の例の一部である。

奇妙なことに、珍しいことに、驚いたことに、皮肉なことに、意外なことに、不思議なことに、残念なことに、腹立たしいことに、興味深いことに、おもしろいことに、異常なことに、ありがたいことに、困ったことに、惜しいことに、運の悪いことに、信じられないことに、恥ずかしいことに、嬉しいことに、厄介なことに、哀しい（悲しい）ことに、好都合なことに、まずいことに、恐ろしいことに…

グループ・ジャマシイ（1998）は、「感情を表す形容詞や動詞に付いて、これから述べようとしていることがらに対する話し手の気持ちを前もって表すのに用いる。書きことば的表現（p. 119）」と記述しており、文中の機能の面では、注釈副詞（工藤 1978）に近いものとして捉えられる¹²。また、渡辺（1995）は、「ことに」は生産的でないものとし、詳細な分析は行っていないが、「ことに」の「に」について、「後接する格助詞は二格に限られる（p. 39）」としながらも、「意味的にも統語上にもこのコトニ節は主文の述語と格関係には立たない

¹² 工藤（1997）、高橋（2015）などでは、評価成分としている。

(p. 52) 」と記述しており、説明に矛盾が見られる。

本研究では、現段階では、「ことに」型における「に」は、副詞語尾と見る。「ことに」型は、「*私が興味深いことに」「*僕が驚いたことに」のように主語のガ格が取れず、「ことに」に前接するもののほとんどが形容詞・形容動詞であるため、ガ格以外の他の項を取ることもできないうえに、「*驚きましたことに」「*信じられませんことに」のようにマス形に変えることもできない、つまり、本研究で検討した「勘案するに」類とも「思うに」類とも文の構造を異にすると捉えられるためである。

最後に、京極（1987）などでは、現代語では「に」は衰退し、その代わりに「と」と「のに」が使われるとされていた。だが、4.3.1 の接続助詞「に」の検討の際、以下のように接続助詞「と」「ば」と置き換えられることを示した。

- (51) a. 「長野」で「雪」の状況を心配されていることから察するに、多分長野県内のスキー場のことでしょうか？

[Yahoo!知恵袋 2005] (= (20))

- b. 「長野」で「雪」の状況を心配されていることから{察すると/察すれば}、多分長野県内のスキー場のことでしょうか？

[Yahoo!知恵袋 2005] (= (25))

「と」との置き換えが可能なのに、なぜこのような意味を表す接続助詞の「に」が現代語に残っているのかはさらに検討を要する問題である。残る問題は、すべて今後の課題とする。

第5章 複合辞を形成する「に」

5.1 はじめに

本章では、「に」をともなって現れる複合辞について論じる。従来の複合辞の研究の関心は、複合辞の全体像を明らかにし、それらを用法別に分類して記述することが主であった（田中 2010、松木 2011 など）。その一方で、個々の語についての分析は十分ではなく、すべてを一語化したものとして扱ったり、それに伴って「に」の有無を単純に省略として扱ったり、あるいは、「に」を一律に格助詞と捉えたりといったように、「に」の記述という観点から見ると、残る問題は多い。

本研究では、複合辞全体や個々の要素の意味・用法の記述を行っている研究とは異なり、その構成について見ることに重点を置く。具体的には、「はずみに」と「うえに」の2語を取り上げ、一語化の度合いはどの程度なのか、複合辞を形成する「に」がその意味・機能を保持しているのか、といった観点から検討を行う。先行研究では、「はずみに」は、「はずみで」と意味が類似していることから、十分な検討を経ずに、ともに複合辞とされてきた。また、「うえに」は、複数の用法の存在が指摘されているが、各用法は形式が同じであることから、一律に複合辞であるとされてきた。

このように、意味や形式が近似しているという理由だけで、複合辞を認定してしまうと、実際には複合していないものも複合辞に含んでしまうといった問題が生じる可能性がある。本研究では、このような問題意識の下、上記の2語の分析から、意味と形式が類似するものであっても、形式を同じくする2つの用法であっても、複合辞として認定できるかどうかは別に検討しなくてはならないことを

主張する。

以下、5.2 では「はずみに」の分析を、5.3 では「うえに」の分析を行う。そして最後に、5.4 では、「に」の体系のなかに両者をどう位置付けるべきかについて考える。

5.2 「はずみに」の構造と意味—「はずみで」との比較

5.2.1 問題のありか

「はずみに」と「はずみで」は、動詞「はずむ（弾む）」の連用形の名詞化¹である「はずみ」に、それぞれ「に」と「で」が後接したものである。両者は、先行研究では、ほとんど同じものとして扱われている（グループ・ジャマシイ 1998、田中 2010、松木 2011、村木 2012 など²）。以下、用例を示す³。

- (1) だがそのとき長正は全身の緊張が弛んだ {弾みに／弾みで} 重大な落とし物をしたことに気がつかなかった。 [西郷斬首剣 2004]
- (2) そして、口をひらいた {はずみに／はずみで}、くわえていた棒きれをはなしたものですから、カメはまっさかさまに地面に落ちて、からだがまっぴたつにわれでまっしまいました。 [ジャータカ物語 1987]
- (3) ぶつかった {弾みで／弾みに}、ホットドッグを相手の胸に押しつけてしまったことに気付いた瑛は慌てた。 [恋の紳士協定 2002]
- (4) 激しく振った {弾みで／弾みに} イヤリングは外れ、振っている途中から腕が筋肉痛のような状態になり、ついには立ち上がって振ることになりましたが、努力の甲斐あり！所さんに「ウマイ！！」と喜んでもらえる作品が完成しました～

[N：矢野っち・良ちゃんのおまけコーナー2006]

¹ 『日本国語大辞典 第二版』による。

² 田中（2010）は、「はずみに」「はずみで」が同じ構造を持つものとしながらも、意味的な差について言及している。詳細は 5.2.2 で述べる。

³ 実例を左側に示し、「に」「で」を置き換えたものを右側に示す。

上記のように置き換え可能であることから「はずみに」と「はずみで」は一見、同じ構造・意味を有するものに見える。しかし、両者が必ず置き換えられるというわけではない。

(5) 包丁で自殺を図ろうとしていたところを止めようとした母親を、{はずみで/??はずみに} 刺したという。 [朝：2001年4月15日]

(6) つぶさないようにと両手で大事に包んでいたが、バスの急ブレーキの{弾みで/??弾みに} 赤ちゃんたちを車内にばらまいてしまった。

[朝：2006年6月25日]

(5) (6) は、「はずみに」と「はずみで」に何らかの違いが存在することを示している。

以上を踏まえ、5.2 では、「はずみに」と「はずみで」が異なる構造・意味を有するものであることを主張する。

以下、5.2.2 では先行研究を概観し問題点を指摘する。5.2.3 では2つの現象を挙げ、「はずみに」と「はずみで」を同様に扱うことができないことを示す。そして、5.2.4 で意味解釈の違いについて考え、5.2.5 で議論をまとめる。

5.2.2 先行研究の概観

グループ・ジャマシイ (1998) には、以下のような記述が見られる⁴。

○【はずみ】

[Nのはずみ で/に] [V-たはずみ で/に]

① ころんだはずみに足首を捻挫してしまった。

② 衝突のはずみで、乗客は車外に放り出された。

③ このあいだは、もののはずみで「二度とくるな」などと言ってしまったが、本当にそう思っているわけではない。

「ある動作の余勢で」という意味で、予想しないこと、意図しないことが

⁴ 下線は筆者による。

起こることを表すのに使う。③の「もののはずみで」は慣用句的な表現。

「V-た拍子に」と言いかえられることが多い。

(グループ・ジャマシイ 1998 : 502)

グループ・ジャマシイ (1998) では、「N のはずみに」は成立するとされているが、用例は挙がっていない。しかし、(7) のような実例は存在するものの、(8) と同じように、「はずみで」と比べると許容度が落ちる⁵。

(7) 衝突の {??はずみに／はずみで} 二人が海に投げ出されたが、ほかの部員に助けられた。 [朝 : 1998 年 10 月 31 日]

(8) つぶさないようにと両手で大事に包んでいたが、バスの急ブレーキの {弾みで／??弾みに} 赤ちゃんたちを車内にばらまいてしまった。

[朝 : 2006 年 6 月 25 日] (= (6))

詳細は 5.2.3.1 で述べるが、「はずみに」は「N の」に後接することが困難であると考えられる。

田中 (2010) は、「はずみに」「はずみで」を扱っている数少ない研究の一つであり、それらを、X という行為の結果として Y が生じる意味を表す、一種の発生表現とし、「はずみに」と「はずみで」における「に」と「で」を格助詞と捉えている。田中 (2010 : 244) は、「格の性格からみれば、一般に「はずみに」のほうが「はずみで」よりも原因理由への傾斜があり、「はずみで」の場合は限定的ではなく、偶然性を強調した言い方になる。これは二格とデ格の深層的な意味特徴が背後にあるとみられる」と述べているが、「に」と「で」を格助詞と見

⁵ 「N のはずみに」と「N のはずみで」の許容度の差は、用例数にも表れる。「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」と「聞蔵ビジュアルⅡ (朝日新聞)」

(1985 年～2014 年の 30 年分) で調べた結果、「N のはずみに」はそれぞれ「0 例、4 例」であったが、4 例のうち、3 例は「何かのはずみに」、残り 1 例は本文中の例

(7) である。一方、「N のはずみで」はそれぞれ「1 例、69 例」であり、69 例のうち、「何 (ら) かのはずみで」が 47 例である。

ることの根拠については言及がない。

松木（2011）は、「はずみに」「はずみで」を、連用節を構成する名詞派生の複合辞的表現（名詞性接続成分）とし、時を表す語としている⁶。松木（2011）は、主に、種々の複合辞表現をまとめたものであり、個々の詳細については論じていないが、時を表す語であるとする点は、後述する村木（2012）、藤田（2015）と一致する。

村木（2012）は、時を表す従属接続詞の中で「はずみに」「はずみで」を扱っており、両者の共通した意味として、「ある事態が成立する〈直後〉に、それが〈きっかけ〉となって、別の事態が起こることを予告する（p. 336）」としている。また、「はずみ」それ自体の品詞性については、名詞、副詞、後置詞、従属接続詞としての用法を有し、そのうち、副詞、後置詞、従属接続詞においては「はずみに」と「はずみで」の双方の語形があるとするが、「はずみに」と「はずみで」は同じものとして扱っている。

しかし、既に述べたように、両者を同じものとして扱うことには問題がある。加えて、藤田（2015）も指摘するように、「はずみで」は、「はずみに」とは異なり、単独で文中に生起することができる。

- (9) 記憶に薄い近所の肉屋と旅行先で偶然出会って、つい {はずみで／??
はずみに} 夕食の約束をする。 [朝：1998年11月8日]
- (10) 2年前、雑誌の取材を受け、{弾みで／??弾みに} 米国横断を宣言。
[朝：2010年4月22日]

村木（2012）は、「はずみで」がある事態が別の事態を生じさせるとしているが、(9)と(10)は、別の事態を生じさせるきっかけとなる事態が存在しない。一見、先行する従属節がきっかけとなる事態であるように見えるが、あくまでも別の節となっており、また、「その」で従属節を承けようとするとは不自然になることから、そのようには考えられない。

⁶ 松木（2011）は、連体修飾構造の底名詞でありつつ、主節に対して接続成分として機能するものを「名詞性接続成分」としている。

(11) ??記憶に薄い近所の肉屋と旅行先で偶然出会って、ついその {はずみで／はずみに} 夕食の約束をする。

[朝：1998年11月8日] (= (9) 改)

(12) ??2年前、雑誌の取材を受け、その {弾みで／弾みに} 米国横断を宣言。

[朝：2010年4月22日] (= (10) 改)

つまり、「はずみで」は必ずしもきっかけを表すわけではない。

藤田 (2015) は、複合辞「拍子に」を主な分析対象としたものであるが、意味の比較のために「はずみで」も取り上げている⁷。藤田 (2015) は、「はずみ」は、まだ実質名詞であるとするべきものとし、その根拠として「「ちょっとした」のような規模を表す修飾句 (p. 71)」を加えても成立することを挙げている。

(13) ちょっとした {*拍子に／はずみで}、怪我をした。

(藤田 2015 : 71)

加えて、「はずみ」に「力・作用で」といった意味を読み取って解するのが自然であり、実体的な意味が読み取れることから「はずみで」を複合辞と捉えるべきではないとする。さらに、「彼ははずみで転んだ」のように、何も承けずに現れることも「はずみで」が辞化していない証拠であるとしている。また、これと関連して、「はずみに」については、「「～はずみに」だと、何も承けずに使うことはできないので、「～はずみで」に比べて辞化が進んでいると見るべきかもしれない (p. 74、注 7)」としている。「はずみに」が何も承けずに現れないことに関しては、既に (9) と (10) で確認した通りである。「はずみで」を複合

⁷ 藤田 (2015) は、「拍子に」と類似した意味を有する「はずみで」と「はずみに」のうち、「はずみで」だけを対象とするとし、「「はずみ」に関しては、(中略) 「はずみで」「はずみに」の両形が考えられるが、実際の用例としては、「はずみで」が圧倒的に多いので、以下この稿では「はずみで」の形について考えることにしたい。「はずみで」と「はずみに」では、微妙な違いがあるのかもしれないが、(後略) (p. 61)」と述べている。

辞として捉えることは妥当でないとする藤田（2015）には同意するが、本研究では、「はずみに」と「はずみで」を辞化の度合いという観点から見ている藤田（2015）とは違う観点として、「はずみに」と「はずみで」を辞化の問題ではなく、複合の問題として説明を試みる。

これまでの研究は、「はずみに」「はずみで」を、「名詞（はずみ）＋格助詞（ニ／デ）」か、「複合辞」のいずれかで捉えようとしていた。先行研究における「はずみに」と「はずみで」の位置付け、および、本研究の立場をまとめたものを表1として示す。

表1 先行研究のまとめと本論文の立場

	「はずみに」	「はずみで」
田中（2010）	名詞（はずみ）＋二格	名詞（はずみ）＋デ格
藤田（2015）	複合辞	名詞（はずみ）＋で ⁸
松木（2011） ⁹	名詞性接続成分	名詞性接続成分
村木（2012） ¹⁰	従属接続詞	従属接続詞
本研究の主張	複合辞	名詞（はずみ）＋デ格

本研究は、「はずみに」は接続助詞として一語化が進んだもの、「はずみで」は「名詞（はずみ）＋格助詞」と位置付けられると考える。これについては、5.2.3にて、藤田（2015）とは異なる証拠を挙げて「はずみに」と「はずみで」の違いをより具体的に示す。

5.2.3 「はずみに」と「はずみで」の文法的機能から見た内部構造

ここでは、5.2.2 でまとめたものを踏まえ、2つの現象を挙げて「はずみに」と「はずみで」が異なる構造を有していることを示す。

⁸ 藤田（2015）は、「はずみで」は辞化していないと明記しているが、構成に観点を置いたものではないため、「で」の扱いは明らかでない。

⁹ 複合辞の下位分類に属するものである。

¹⁰ 名称は異なるが、接続助詞相当の形式である。

5.2.3.1 「Nの{はずみに／はずみで}」

田中(2010)は、「はずみに」も「はずみで」も「名詞(はずみ)＋格助詞」であるとしているが、グループ・ジャマシイ(1998)を検討した際に指摘した通り、「Nのはずみに」は「Nのはずみで」より許容度が落ちる。

- (14) つぶさないようにと両手で大事に包んでいたが、バスの急ブレーキの{弾みで／??弾みに} 赤ちゃんたちを車内にばらまいてしまった。
[朝：2006年6月25日] (= (6))
- (15) 衝突の{??はずみに／はずみで} 二人が海に投げ出されたが、ほかの部員に助け上げられた。 [朝：1998年10月31日] (= (7))
- (16) 事故の{弾みで／??弾みに}、黒坂さんの軽乗用車が前方左側の歩道に突っ込み、自転車に乗って信号待ちをしていた同市新和5丁目、主婦加藤幸子さん(39)をはねた。 [朝：2002年1月12日]
- (17) 町中さんらは、転落の{はずみで／??はずみに} 車外に投げ出されたとみられる。 [朝：1985年7月12日]
- (18) 経営不振の{??はずみに／はずみで} 株が暴落した。

田中(2010)が言うように、「はずみに」と「はずみで」の「はずみ」がともに名詞であるなら、どちらも「の」による連体修飾を許容するはずであるが、上で見たように実際はそうではない。これは「はずみで」の「はずみ」に比べ、「はずみに」の「はずみ」が名詞性を喪失していることを示している。

なお、「はずみに」が「の」による連体修飾を承けられないのが「はずみ」とNとの意味関係の問題ではなく、名詞性の低さによるものであることは、以下のように「はずみに」が(14)～(18)に示したものと同一意味を表す節を承けることができる点からも確認できる。

- (19) バスが急ブレーキをかけた{弾みで／弾みに} 赤ちゃんたちを車内にばらまいてしまった。 [朝：2006年6月25日] (= (14) 改)
- (20) 衝突した{はずみに／はずみで} 二人が海に投げ出されたが、ほかの部員に助け上げられた。 [朝：1998年10月31日] (= (15) 改)

- (21) 事故を起こした {弾みで／弾みに} 黒坂さんの軽乗用車が前方左側の歩道に突っ込み、～主婦加藤幸子さん (39) をはねた。

[朝：2002年1月12日] (= (16) 改)

- (22) 転落した {はずみに／はずみで} 車外に投げ出されたとみられる。

[朝：1985年7月12日] (= (17) 改)

- (23) 経営が悪化した {はずみで／はずみに} 株が暴落した。

(= (18) 改)

以上の観察から、「はずみに」は、出来事を表す文相当のものに後接することが求められ、また、「はずみに」の「はずみ」は、名詞の実質的意味を失っていると考えられる。

5.2.3.2 「ガ／ノ」交替

5.2.3.1 では、「はずみに」が「の」による連体修飾を許容しにくいという観察から、「はずみに」の「はずみ」が名詞性を喪失していると捉えられることを指摘した。しかし、(19)～(23)の「はずみに」が連体修飾節を承けているとしたら、「の」による連体修飾を許容しにくいという現象に対し、名詞性の喪失とは異なる説明を与えなくてはならなくなる。そこで、ここでは、節を承ける「はずみに」についてさらに検討を加えていく。

連体修飾節内の主格名詞句は、「ガ／ノ」交替が許されることが指摘されている¹¹。

- (24) a. ここは飛行機 {が／の} 飛び立つところだ。

- b. 今まさに飛行機 {が／*の} 飛び立つところだ。 (三宅 2005 : 65)

三宅 (2005) は、(24a) における「ところ」は名詞性を持っており、従って

¹¹ 「ガ／ノ」交替は、主格をマークする「ガ」が「ノ」に交替する現象であるが、大島 (2010) は、主格をマークする「ノ」は、名詞性の要素を修飾する節に限って現れるとする。

連体修飾節内の主格名詞句となる「飛行機」は「ガ／ノ」交替を許すが、(24b)の「ところ」は、助動詞化に伴って名詞性を失っているため、主節内の主格名詞句となる「飛行機」は「ガ」による標示しか許さないと述べている。

田中(2010)は「はずみに」と「はずみで」の「はずみ」を名詞とする。それならば、両者の修飾部はともに「ガ／ノ」交替を許すことが予測されるが、以下のように「はずみに」は「ガ／ノ」交替を許さない。

- (25) a. 車 {が／の} 衝突したはずみで、車内の人々が投げ出された。
b. 車 {が／*の} 衝突したはずみに、車内の人々が投げ出された。
- (26) a. 山積みの本 {が／の} 崩れたはずみで、探していたへそくりが出てきた。
b. 山積みの本 {が／*の} 崩れたはずみに、探していたへそくりが出てきた。
- (27) a. 雷 {が／の} 落ちたはずみで、旅館の屋根が崩落した。
b. 雷 {が／*の} 落ちたはずみに、旅館の屋根が崩落した。

「ガ／ノ」交替を許す「はずみで」は、連体修飾節を承けており、「名詞(はずみ) + デ格」という内部構造をなしていると言える。一方の「はずみに」は、「ガ／ノ」交替が不可能であるため、「はずみに」の前に来る節を連体修飾節と捉えることはできず、「はずみに」全体が1つの語として、それに前接する節と後に続く節の関係性を標示する要素、つまり、複合接続助詞として機能していると捉えられる。

「Nの{はずみに／はずみで}」、「「ガ／ノ」交替」という2つの現象を通して、「はずみに」は、「名詞(はずみ) + 格助詞」ならば可能であるはずの振る舞いができないことから、節と節を繋ぐ複合接続助詞として機能していると考えられることを示した。加えて、「はずみで」は、連体修飾節を承けられることから、「名詞(はずみ) + デ格」で成り立っていることを確認した。

以上を根拠に本研究は、5.2.2の表1で示した通り、「はずみに」は複合接続助詞、「はずみで」は「名詞(はずみ) + デ格」であると考えられる。

5.2.3では、「はずみに」と「はずみで」の文法的機能および内部構造の違い

を示した。5.2.4では、意味解釈の違いについて述べる。

5.2.4 「はずみに」と「はずみで」の意味解釈の違い

5.2.3において、「はずみに」は複合接続助詞であるのに対し、「はずみで」は「名詞（はずみ）＋デ格」であることを指摘した。ここでは、先行研究において、ともに時や原因・理由といった用語で説明されている両者の意味解釈の違いについて考える。

先に見たように、村木（2012）は「はずみに」「はずみで」について「ある事態が成立する〈直後〉に、それが〈きっかけ〉となって、別の事態が起こることを予告する（p.336）」としている¹²。確かに、両者が置き換えられる場合は、ともにそのような意味を表すと捉えられる。

- (28) バスが急ブレーキをかけた {弾みで／弾みに} 赤ちゃんたちを車内にばらまいてしまった。 [朝：2006年6月25日] (= (19) 改)
- (29) 衝突した {はずみに／はずみで} 二人が海に投げ出されたが、ほかの部員に助け上げられた。 [朝：1998年10月31日] (= (20) 改)
- (30) 事故を起こした {弾みで／弾みに} 黒坂さんの軽乗用車が前方左側の歩道に突っ込み、～主婦加藤幸子さん（39）をはねた。
[朝：2002年1月12日] (= (21) 改)
- (31) 転落した {はずみに／はずみで} 車外に投げ出されたとみられる。
[朝：1985年7月12日] (= (22) 改)
- (32) 経営が悪化した {はずみで／はずみに} 株が暴落した。
(= (23) 改)

¹² 村木（2012）は、「「はずみに」は〈とき〉の意味に限られるが、「はずみで」の形式の使用は、〈とき〉にくわえて、〈原因〉のニュアンスをそえている（p.313）」とし、違いがあるとしている反面、最後のまとめでは、「「はずみに／で」は、〈とき〉にくわえて、原因・理由にかかわることもある（p.337）」のように、「はずみに」と「はずみで」の共通の意味であるような書き方をしている。

このような村木（2012）の捉え方は、「はずみに」と「はずみで」がともに節と節を繋ぐもの、つまり、接続助詞として機能しているとする捉え方である。これは接続助詞である「はずみに」の説明にはなる。しかし、「はずみで」は5.2.3で論じたように「名詞（はずみ）＋デ格」であり、「はずみ」が承ける節は連体修飾節であるため、節と節を繋ぐ働きをしていると捉えることはできない。一方、田中（2010）は、両者の意味に差があることを指摘している¹³。田中（2010）は、「はずみに」は原因理由を、「はずみで」は偶然性を強調した言い方になると、ニュアンスの違いについて述べている。

では、「はずみに」と「はずみで」の意味解釈には、どのような違いがあるのか。

まず、「はずみに」について考えてみる。例えば、以下のようなものは、「はずみに」が承ける節と主節の出来事との間の関連性に差が出る。

(33) うまく席がえのできる女性は、最後は自分が一番いいと思える男性の隣に座れます。ダイレクトにそこへ行こうとしても、なかなか行けません。トイレに立って人が抜けたはずみに、どんどん席をかえていくのは好感が持てます。 [ハッピーな女性の「恋愛力」2004]

(34) ぼくの友人は、台所で昼寝していて、頭をぶつけた弾みに包丁が落ちてきたと発言。 [N：適応行動論 2013]

(33)の「人が抜けた」ことが直接主節の出来事を引き起こしているわけではないため、関連性が弱いことが分かる。一方、(34)の「頭をぶつけた」ことは「包丁が落ちてきた」ことを直接引き起こしており、(33)と比べ前件と後件が

¹³ 村木（2012）、田中（2010）以外で意味の差について触れているものに、藤田（2015）がある。藤田（2015）は、「はずみに」を扱ってはいないが、「はずみで」については原因を表すとしている。また、両者には「微妙な違いがあるかも知れない（p.61）」としているが、この「微妙な違い」が両者の構造や振る舞いの違いを指すのか、意味の違いを指すのか、それとも、その両方を指すのかについては言及が見られないため、明らかではない。

密接に関係している。

このように、同じく「はずみに」が用いられて出来事同士を繋いでいる場合でも、前件と後件の関連性の度合いに違いが現れる。

本研究は、「はずみに」は出来事同士の時間関係を表すと考える。因果関係は時間関係を含意するが、時間の前後関係は必ずしも因果の意味を含まない。よって、(33)のような時間の前後関係しか持たないものが説明できるとともに、(34)のように「はずみに」が原因・理由を表す場合についても、前件と後件の時間的な継起が因果関係と解釈されることがあることで説明が可能となる。また、このような解釈を持つ「はずみに」は、「ときに」「際に」などを構成する時の「に」と関係付けられる。「はずみに」は一語として機能しているが、時の「に」との関連は、「はずみに」の構成要素である「に」の意味の反映であると捉えられよう。

次に、「はずみで」の「デ」は、(35)に示すような原因のデ格であると捉えられる。(36)～(40)は、再掲である。

- (35) 「お父さんは五年前に脳腫瘍で死んだの」
(村上春樹『風の歌を聴け』)
(間淵 2000 : 16)
- (36) バスが急ブレーキをかけた弾みで赤ちゃんたちを車内にばらまいてしまった。
[朝 : 2006年6月25日] (= (28))
- (37) 衝突したはずみで二人が海に投げ出されたが、ほかの部員に助け上げられた。
[朝 : 1998年10月31日] (= (29))
- (38) 事故を起こした弾みで黒坂さんの軽乗用車が前方左側の歩道に突っ込み、～主婦加藤幸子さん (39) をはねた。
[朝 : 2002年1月12日] (= (30))
- (39) 転落したはずみで車外に投げ出されるとみられる。
[朝 : 1985年7月12日] (= (31))
- (40) 経営が悪化したはずみで株が暴落した。 (= (32))

(36)～(40)は、後件の事態の原因が前件となっている。前件が原因の解釈

となることは、「その」で前件を承けられることから確認できる。

- (41) バスが急ブレーキをかけた。その弾みで赤ちゃんたちを車内にばらまいてしまった。 [朝：2006年6月25日] (= (36) 改)
- (42) 衝突した。そのはずみで二人が海に投げ出されたが、ほかの部員に助け上げられた。 [朝：1998年10月31日] (= (37) 改)
- (43) 事故を起こした。その弾みで黒坂さんの軽乗用車が前方左側の歩道に突っ込み、～主婦加藤幸子さん (39) をはねた。
[朝：2002年1月12日] (= (38) 改)
- (44) 転落した。そのはずみで車外に投げ出されたとみられる。
[朝：1985年7月12日] (= (39) 改)
- (45) 経営が悪化した。そのはずみで株が暴落した。 (= (40) 改)

ところが、「はずみで」の「デ」を原因のデ格であると考え、以下のような単独で現れる場合の「はずみで」が説明できない。

- (46) 包丁で自殺を図ろうとしていたところを止めようとした母親を、はずみで刺したという。 [朝：2001年4月15日] (= (5) 改)
- (47) 記憶に薄い近所の肉屋と旅行先で偶然出会って、ついはずみで夕食の約束をする。 [朝：1998年11月8日] (= (9) 改)
- (48) 2年前、雑誌の取材を受け、弾みで米国横断を宣言。
[朝：2010年4月22日] (= (10) 改)
- (49) そのような次第で使い続けていたのに先ごろ、ちょっとの弾みでペン先と軸の間に亀裂が入って、用をなさなくなってしまった。
[朝：1997年7月27日]

(46) ～ (49) の「はずみで」は、「V-たはずみで」のように連体修飾を承けておらず、それ単独で機能しているが、このような場合、原因を表すとは解釈しにくい。解釈の違いは、「その」の挿入による不自然さと、(47) のように、「そのつもりはない」ことを表す「つい」の挿入による自然さの判定からも、

(46) ～ (49) が原因を表す「はずみで」とは異なることが確認できる。

(50) 包丁で自殺を図ろうとしていたところを止めようとした母親を、{??その／つい} はずみで刺したという。

[朝：2001年4月15日] (= (46) 改)

(51) 記憶に薄い近所の肉屋と旅行先で偶然出会って、{??その／つい} はずみで夕食の約束をする。 [朝：1998年11月8日] (= (47) 改)

(52) 2年前、雑誌の取材を受け、{??その／つい} 弾みで米国横断を宣言。

[朝：2010年4月22日] (= (48) 改)

(53) そのような次第で使い続けていたのに先ごろ、{??その／つい} ちよつとの弾みでペン先と軸の間に亀裂が入って、用をなさなくなってしまう。 [朝：1997年7月27日] (= (49) 改)

このような「デ」は、「動詞の示す動作を行う動作主体の様態、行為を受ける対象の様態、作用・出来事それ自体の状態等を表す（間淵 2000）」という点で、以下のような様態のデ格と捉えられる。

(54) ～、私はそれを無理におさえて、緊張した、多少人工的な苛々した気分で、生活していました。『濁った頭』（266）¹⁴（間淵 2000：17）

「はずみで」は表面上、「はずみに」のように出来事同士を繋ぐように見えるが、(46) ～ (49) のように単独で出現するものまでを視野に入れると、必ず、ある出来事をきっかけに別の出来事を生じさせるといった原因の解釈を持たないことが分かる¹⁵。

¹⁴ () 内は、ページ数を表す。

¹⁵ 単独で現れる「はずみで」は、「勢いで」と同じように、「その場の、その瞬間の」といった意味を含意するため、主節が表す事態のまさにその時の状況、つまり、様態として解釈されると考えられる。それに対し、「連体修飾節+はずみで」は、グループ・ジャマシイ（1998）が「V-たはずみで」と記述しているように、基本的に

以上より、「V-たはずみで」のように連体修飾を承ける場合（(36)～(40)）と、単独で出現する場合（(46)～(49)）とで意味の解釈が異なるが、このような多様な解釈が生じるのは、デ格の担う多義性によるものである。

5.2.5 まとめ

5.2 では、「はずみに」と「はずみで」を比較し、内部構造の違いと意味解釈の違いが見られることを確認し、「はずみに」「はずみで」における「に」と「で」の位置付けを行った。簡略にまとめると以下ようになる。

I 内部構造の違い

- i) 「はずみに」：複合辞（複合接続助詞）
- ii) 「はずみで」：名詞（はずみ）＋デ格

II 意味解釈の違い

- i) 「はずみに」：時の解釈（時の「に」と関連付けられる）
- ii) 「はずみで」：原因（連体修飾を承ける場合）の解釈
（原因のデ格）
様態（単独で機能する場合）の解釈
（様態のデ格）

5.3 複合辞「うえに」の検討

5.3.1 問題のありか

「うえ」は、空間を表す実質名詞としての機能を担うほか、本研究で扱うような複合辞として機能する場合がある。その現れ方には、「うえに」「うえで」「うえは」があり、従来の研究は、各々の形式の意味用法の分類に重点を置くものが多い。

そのなかで、「うえに」は複合接続助詞とされる形式であるが、同じく複合接続助詞とされる「うえで」に比べ、扱っている研究は多くない（田中 1999、田

夕形を承けるため、主節が表す事態よりも過去の事態を表すことになり、その時間的な前後関係から原因と理由という関係で解釈されると捉えられる。

中 2001、馬場 2005、長谷部 2013 など)。「うえに」を扱っている先行研究のうち、田中 (1999、2001) は、「うえに」に「累加」と「用途」の 2 つの用法があるとしている。以下、順に「累加」と「用途」の例である。

(55) 彼はフランス語ができるうえに、ドイツ語も堪能だ。

(田中 2001 : 259)

(56) 放射性元素の発見は自然科学のうえに大きな変革を与えた。

(田中 2001 : 261)

しかし、田中 (1999、2001) が「用途」としている (56) のような用法について、馬場 (2005) は「格成分的な用法」、長谷部 (2013) は形式名詞の用法として取り上げており、その位置付けについては意見の一致を見ない。

そこで、本研究では、先行研究が複合接続助詞としている「うえに」について、「うえ」の名詞性の多寡、「うえ」と「に」の結合度、および、「に」の位置付けという観点から検討する。

5.3.2 先行研究の概観

5.3.2.1 田中 (1999、2001)

田中 (1999、2001) は、接続助詞化した「うえに」「うえで」「うえは」を取り上げている。そのなかで、本研究と関連する「うえに」については、〈ウエニ〉①と〈ウエニ〉②に分け、〈ウエニ〉①を基本用法、〈ウエニ〉②を派生用法とする。

〈ウエニ〉①は、「累加」「添加」を表すものであるが、〈ウエニ〉①の「に」は任意成分であり、累加の意味を明示する際に使用される傾向があるとしている。以下、例の一部を示す¹⁶。

¹⁶ 田中 (1999、2001) が挙げている〈ウエニ〉①の用例のなかには、「うえに」と「うえ」が混在している。しかし、「うえに」と「うえ」が同じ意味で置き換えられているのかに関する検討が必要であると考えられるため、本研究では、「うえに」で現れているもののみを引用する。

- (57) 彼はフランス語ができるうえに、ドイツ語も堪能だ。
 (田中 2001 : 259) (= (55))
- (58) あの店は値段が高いうえに、サービスも悪い。 (田中 2001 : 260)
- (59) ごちそうになったうえに、お土産までいただきました。
 (田中 2001 : 260)

また、田中 (2001) は、「この用法 [筆者注: 田中 (1999、2001) の〈ウエニ〉①] で注意すべき点は一般の名詞句接続である。(中略) 前件、後件ともに述語成分は同一形容詞、同一動詞を繰り返す表現になおす必要がある (p. 260) 」とし、名詞接続について触れている¹⁷。

- (60) *気温のうえに、湿度も高い。
 →気温が高いうえに、湿度も高い。 (田中 2001 : 260)
- (61) *寿司のうえに、てんぷらまで食べた。
 →寿司を食べたうえに、てんぷらまで食べた。 (田中 2001 : 260)

〈ウエニ〉②は、「用途」を表すものであり、前件は影響をもたらされる局面、分野、領域が来ると言う。

- (62) 放射性元素の発見は自然科学のうえに大きな変革を与えた。
 (田中 2001 : 261) (= (56))
- (63) 季節風は日本人が生活を送るうえに大きな影響をもたらしてきた。
 (田中 2001 : 261)
- (64) 病がなおっていくうえにも各種ビタミンの補給は必要である。
 (田中 2001 : 261)

¹⁷ 何を「一般の名詞句」とするのか説明されていないが、取り上げている例文から推測すると、動作性名詞でないものを指していると考えられる。本研究では、非動作性名詞とする。

田中（1999、2001）は、〈ウエニ〉①には名詞接続が見られないが、〈ウエニ〉②には名詞接続が見られるという。しかし、(62)の「うえに」が名詞に接続しているならば、そもそも、〈ウエニ〉②を接続助詞と見て良いのかという疑問が生じる。

また、〈ウエニ〉①と〈ウエニ〉②は、両方とりたて詞の接続を許すと言う。

(65) 努力のうえにも努力を重ねて、今日の地位を築いたのだった。

(田中 2001 : 261)

(66) 病がなおっていくうえにも各種ビタミンの補給は必要である。

(田中 2001 : 261) (= (64))

〈ウエニ〉①の用例として挙げている(65)は、〈～ノウエニ(モ)〉の形で現れる繰り返し表現であるとし、「努力に努力を重ねる」の派生的用法とする。しかし、上述した(62)同様、(66)が接続助詞として働いているのかは検証を要する。

加えて、田中（1999、2001）は、「うえに」の「に」を格助詞と見ている。しかし、何をもって格助詞と判断するのか、その根拠が示されていない。

5.3.2.2 馬場（2005）

馬場（2005）は、「うえで」「うえに」「うえは」、および、「うえ」を取り上げている。そのうち、「うえで」を「継起用法」、「うえに」を「添加用法」、「うえは」を「因果用法」とする¹⁸。この「うえに」の捉え方は、田中（1999、2001）の「うえに」の基本用法と同様である。しかし、田中（1999、2001）の「用途」を表す用法の扱いでは両者の意見が対立する。

馬場（2005）は、「動詞＋うえに」を「名詞＋ニ」に置き換えられることを根拠に、対象・基準を表すニ格成分相当の用法と考えられるため、田中（1999、

¹⁸ 「うえ」は、「うえで」「うえに」との置き換えが可能なものとして挙げている。「うえに」に関しては、「添加用法の「うえに」と「うえ」は、相互に置き換えることができ、使い分けは特に見出せない（p. 38）」とする。

2001) の〈ウエニ〉②の用法は、接続助詞的用法としては扱わないとする¹⁹。

- (67) a. 季節風は日本人が生活を送るうえに大きな影響をもたらしてきた。
b. 季節風は日本人の生活に影響を及ぼした。 (馬場 2005 : 29)
- (68) a. 病がなおっていくうえにも各種ビタミンの補給は必要である。
b. 治療にも各種ビタミンの補給は必要だ。 (馬場 2005 : 29)

(68) の「病がなおっていく」を「治療」に置き換えることが適切なのかは疑問であるが、証拠を挙げている分、馬場 (2005) の方がより説得性が高い。しかし、「格成分的な用法」としている点で、複合辞の一部の用法として扱っていることには変わらない。また、二格と置き換えが可能であるため接続助詞とは扱わないとする馬場 (2005) の議論には疑問が残る。なぜなら、置き換えテストは品詞性を計るのに十分な根拠にはならない (杉本 2013²⁰) ためである。もし、上記の「うえに」が馬場 (2005) の主張する「名詞+ニ」であるとするならば、よりの確な証拠を示す必要があるだろう。

5.3.2.3 長谷部 (2013)

「うえ」を扱っている従来の研究の問題点として、統語的分析か認知的観点か

¹⁹ 馬場 (2005) は、「格成分的な用法」を複合辞の用法の一部として見ているのか、(対象・基準を表す) 二格と捉えているのかは確かではない。しかし、「二格成分相当の用法」としている点から推測すると、単一の格と見ているとは考えにくい。また、同じく格成分的な用法として扱う「うえで」の説明には、「格成分的な用法の複合辞 (的な語形) (p. 29)」と表現している。これらを踏まえ、本研究は「格成分的な用法」を、接続助詞的用法と対立する複合辞の用法として解する。

²⁰ 杉本 (2013) は、複合助詞の機能などを判別するのに格助詞との置き換えテストを用いるが、「「と一緒に」「とともに」のように、格助詞「と」と置き換えが可能で、同様の意味を持つ複合助詞であっても、品詞的な性格が異なり、格助詞的な性格を持たない (p. 99)」という点から、格助詞との置き換えテストは、ある形式の機能を判別するのに必ずしも有効とは言えないことを指摘している。

のどちらかに偏っていることを指摘し、包括的に整理することを目的とし、「うえ」を統語的な制約の度合い（後接の助詞の固定度）によって、空間名詞（実質名詞）、形式名詞、複合辞に分け、意味の分類を行っている²¹。

まず、複合辞として働く「うえに」「うえで」「うえは」は、馬場（2005）の用語を踏襲し、それぞれ〈添加用法〉〈継起用法〉〈因果用法〉を担うものとしている。

(69) (遊亀さんは) ご高齢のうえに体調を崩されておられるそうなので、
絵はもう描かれないのだろうか。 (K)²² (長谷部 2013 : 71)

(70) 兼業農家というのは農業所得があるうえに実物がある、住宅がある。
(K)
(長谷部 2013 : 71)

〈添加用法〉の場合、「うえ」の後接助詞は二格に限定されるが、省略（無助詞化）することができるという。また、とりたて詞をともなって「ウエニモ」の形式になることもあるとする。

長谷部（2013）は、田中（1999、2001）の〈ウエニ〉②の用法、馬場（2005）の「格成分的な用法」を形式名詞の「うえ」として捉えており、〈領域・基盤用法〉を有するものとしている²³。

²¹ 統語的な制約とは、「前接句の特徴と「うえ」に後接する助詞の現れ方、つまりある種の格助詞（場合によってはとりたて助詞）に固定されているかどうかを指す（p. 67）」ものとしている。

²² 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」からの引用は、文末に「(K)」を付けている。

²³ 「[1]単に形式的に用いられ、具体的かつ空間的な位置を指すわけではないこと [2]後接形式の助詞が、固定ではないものの、いくつかの形式に限定されていること（p. 70）」の条件に当てはまるものを形式名詞としている。

(71) 英国の現在の政治は、その反省のうえに成り立っているのであった。
(K)

(長谷部 2013 : 70)

(72) 私の研究調査は、私が新聞記者としての地位を獲得するうえにもきわめて大切なものであった。(K) (長谷部 2013 : 70)

これらを、動作が行われる際の〈領域〉や〈基盤〉など、場を設定する役割を担う用法とし、格助詞「ニ、デ、カラ」が後接する形式、もしくは、(72) のようにとりたて詞が付く形式にほぼ限定されると述べている。

5.3.2.4 まとめ

以上の先行研究を簡略にまとめたものを表 2 に示す。

表 2 先行研究における「うえに」と「に」の捉え方²⁴

	用法①	用法②	用法②における「に」の捉え方
田中 (1999、2001)	接続助詞	接続助詞	格助詞
馬場 (2005)	接続助詞	格成分的な用法	助詞
長谷部 (2013)	複合辞	形式名詞十二格	格助詞

田中 (1999、2001) と馬場 (2005) は「うえに」の用法の記述に主眼を置き、用法①と用法②両方を一語化したものとして見ている。一方、長谷部 (2013) は後接する助詞の固定度によって「うえ」を分類し、認知的観点から記述しているが、用法②の「うえに」は、「うえ+ニ」としている。

本研究は、用法①は複合接続助詞、用法②は「名詞 (うえ) +ニ」であると考えた。したがって、結論としては、長谷部 (2013) と同様となる。しかし、長谷

²⁴ 「複合辞」の捉え方、観点は一樣ではないが、先行研究での捉え方をまとめたものとして示しておく。なお、名称は先行研究に従う。

部（2013）では、用法①と用法②における「に」を一貫して格助詞と捉えているが、なぜ、格助詞と見るのかに関する根拠が示されていない。

本研究では、名詞（動作性名詞、非動作性名詞）との共起、「ガ／ノ」交替とといった文法的なテストから、「うえに」の各用法が上述のように位置付けられることを示す。また、「うえに」を構成する「に」についても、より踏み込んだ議論を行う。

結論を先取りするならば、用法①は結合度の高い接続助詞として機能する複合辞「うえに」であり、用法②は「名詞（うえ）＋ニ」の内部構造を成すものである。また、用法②は、領域や前提を表し、「名詞（うえ）＋ニ」における「ニ」は、場所の「ニ」と位置付けられる。次節以降、詳細を検討する。なお、以下の議論では、用法①に該当する「うえに」を【うえに①】、用法②に該当する「うえに」を【うえに②】と表記する。

5.3.3 「うえに」の内部構造

ここでは、「うえに」の結合度と「うえ」の名詞性の多寡を確認するために、「うえに」に先行する名詞との共起関係、および、「うえに」に前節する節の性質について検討を行う。

5.3.3.1 名詞接続

5.3.3.1.1 動作性名詞との共起

まず、動作性名詞が「うえに」に先行する用例を提示する。

- (73) 脊柱の研究にもとづく、神経活動のうえにおきる多くの故障は、椎骨と椎骨との間を通過する場所においてである。[講座集復刻版 2002]
- (74) それは過去の出来事（テキスト）を、現在の間がどのように解釈できるのか、を問う。ディルタイは自己の体験を過去の表現（出来事）に「自己移入」して「追体験」し、現在に過去を再現しようとしたし、ガダマーは、過去の出来事の「事柄に即した真理」の要求を現在の状況が引き受け、過去の地平と現在の地平を融合させようとした。かれらは、ともに過去の意味と現在の意味の落差をどのように解消するか

という問題設定のうえにあり、解釈が言語によってなされるかぎり、言語の意味を前提にしていた。 [フーコーの思想 2001]

- (75) 一見自明のように見える平行線の公準が、ユークリッドにはそうは思えなかった。だからこそ彼は、これを公準の中に加え、その仮定のうえに彼のユークリッド幾何学を構築したのである。

[数学の天才列伝 2002]

- (76) SIS をこのようにとらえない限り、その実相を知ることは不可能である。つまり SIS は、現在のコンピュータの使い方に対する反省の上に現われてきた考え方だということだ。 [SISは企業を変える 1991]

- (77) こういう小説家としての自覚のうえに書かれたのが『死』（千九百十四一十五）で、弥生子二十九歳のときの作品である。

[野上弥生子短篇集 1998]

- (78) 有能な者、富める者は指導者となって、弱い者のために働くべきだとする発想のうえに、村落が動いていた。

[知っておきたい日本の神様 2005]

(73) ～ (78) は、いずれも「～のうえに成り立つ」のように、動作性名詞が述語の表す動作の領域、前提といった解釈になるものであり、表 1 の用法②、つまり、【うえに②】に該当するものと言える。上記に現れている「うえに」は、「動作性名詞+の+うえに」が問題なく成立している。このように、「の」による連体修飾が可能であることから、「うえ」が名詞性を保っていると判断できる。したがって、(73) ～ (78) における【うえに②】は「名詞(うえ)+ニ」の可能性が高いと見られる。

一方、【うえに①】の場合、同じく動作性名詞が現れても「うえに」の形式は許されない。以下の (79b) ～ (81b) は、(79a) ～ (81a) のような「うえ」で現れている実例をもとに作成したものである。

- (79) a. 信長は宗久の願いのとおりに、宗瓦を罰し、家財、茶器のすべてを没収のうえ、追放した。 [下天は夢か 1989]

- b. ??信長は宗久の願いのとおりに、宗瓦を罰し、家財、茶器のすべてを没

収のうえに、追放した。

(80) a. 一場問題にしてもナベツネが政治家なら、あんな勇退のような形でなく、政界一大問題として国会・マスコミは大騒ぎのうえ、喚問までするでしょうに。 [Yahoo!知恵袋 2005]

b. ??～政界一大問題として国会・マスコミは大騒ぎのうえに、喚問までするでしょうに。

(81) a. そこで、樋口は場合によっては取り押えてやるつもりでいたところ、相手の方から飛びかかってきたので、格闘の上、最後は拳銃で撃った。 [白鳥殺人事件 1989]

b. ??～相手の方から飛びかかってきたので、格闘の上に、最後は拳銃で撃った。

(73) ～ (78) と (79b) ～ (81b) の相違は、両用法間における「うえ」の名詞性の違いを表すものとして捉えられる。すなわち、【うえに①】の「うえ」は名詞性が低く、先行研究が述べるように、「うえに」の形で接続助詞として機能している可能性が高いと言える²⁵。実際、「動作性名詞+の+うえに」を許容しなかった上記 (79b) ～ (81b) は、以下のように同じ意味を表す節の形にすると、「うえに」が許容されるようになる。

(82) a. ??信長は宗久の願いのとおり、宗瓦を罰し、家財、茶器のすべてを没収のうえに、追放した。 [下天は夢か 1989] (= (79b))

b. 信長は宗久の願いのとおり、宗瓦を罰し、家財、茶器のすべてを没収したうえに、追放した。

(83) a. ??～政界一大問題として国会・マスコミは大騒ぎのうえに、喚問までするでしょうに。 [Yahoo!知恵袋 2005] (= (80b))

²⁵ 「彼女はわがままなうえに、思いやがない」のように、形容動詞の連体形とは共起可能である。これは【うえに①】の「うえ」が完全に名詞性を失っているとは言えないことを意味するため、ここでは【うえに①】の「うえ」は、【うえに②】の「うえ」よりも名詞性が低いと捉えておく。

b. ～政界一大問題として国会・マスコミは大騒ぎするうえに、喚問までするでしょうに。

(84) a. ??そこで、樋口は場合によっては取り押えてやるつもりでいたところ、相手の方から飛びかかってきたので、格闘の上に、最後は拳銃で撃った。
[白鳥殺人事件 1989] (= (81b))

b. ～相手の方から飛びかかってきたので、格闘した上に、最後は拳銃で撃った。

一方、【うえに②】は、(73)～(78)で示したように「の」による連体修飾を承けており、接続助詞であれば許容されない形式との共起を許していると言える。したがって、【うえに②】は、上述の通り、「うえ」が名詞性を保っている「名詞(うえ)＋ニ」という内部構造を成していると考えられる。

なお、【うえに②】は、先述したように、領域といった場所解釈に近いもの((73) (74))と、ある事態が成り立つための前提となるもの((76)～(78))、そして、解釈としては前者とも後者とも取れるもの((75))とがある。上述の例文(73)～(78)を再掲する。

(85) 脊柱の研究にもとづくと、神経活動のうえにおきる多くの故障は、椎骨と椎骨との間を通過する場所においてである。

[講座集復刻版 2002] (= (73))

(86) ～かれらは、ともに過去の意味と現在の意味の落差をどのように解消するかという問題設定のうえにあり、解釈が言語によってなされるかぎり、言語の意味を前提にしていた。

[フーコーの思想 2001] (= (74))

(87) 一見自明なように見える平行線の公準が、ユークリッドにはそうは思えなかった。だからこそ彼は、これを公準の中に加え、その仮定のうえに彼のユークリッド幾何学を構築したのである。

[数学の天才列伝 2002] (= (75))

(88) SIS をこのようにとらえない限り、その実相を知ることは不可能である。つまり SIS は、現在のコンピュータの使い方に対する反省の上

に現われてきた考え方だということだ。

[SISは企業を変える 1991] (= (76))

- (89) こういう小説家としての自覚のうえに書かれたのが『死』（千九百十四一十五）で、弥生子二十九歳のときの作品である。

[野上弥生子短篇集 1998] (= (77))

- (90) 有能な者、富める者は指導者となって、弱い者のために働くべきだとする発想のうえに、村落が動いていた。

[知っておきたい日本の神様 2005] (= (78))

(85) と (86) は、具体的に目に見える空間・場所を表していないため、実質名詞「うえ」と比べると抽象的な解釈になっている。しかし、(88) ～ (90) が前置きの条件を表していることと比較すると、(85) (86) と (88) ～ (90) で解釈の違いが出ることが分かる。しかし、(88) ～ (90) は、解釈のしよようによっては、「反省」「自覚」「発想」がある事態の領域となるものとも読み取れる。これに加え、(87) における「仮定」の解釈は、領域を表すものとも前提を表すものとも取れるため、領域と前提の両者を明確に線引きすることは難しい。場所解釈に近いもの（(85) (86)）、前提の解釈に近いもの（(88) ～ (90)）、また、どちらとも取れるもの（(87)）までを視野に入れると、【うえに②】は、場所解釈から前提解釈への用法の幅が想定できるという見方が妥当であるだろう。

以上、5.3.3.1.1 では、動作性名詞と「うえに」との接続関係について見た。そして、「うえに」には、接続助詞として機能する「うえに」と、「名詞（うえ）＋二」の内部構造を成す「うえに」があり、同じ形式で現れていても内部構造を異にすることを確認した。5.3.3.1.2 では、田中（1999、2001）で一般の名詞句とされていた、非動作性名詞との共起について検討する。

5.3.3.1.2 非動作性名詞との共起

5.3.3.1.1 では、【うえに①】が「の」による連体修飾を承けられないのに対し、【うえに②】はそれが可能であることを観察した。

しかし、一見すると【うえに①】が「の」による連体修飾を許すような例文が

散見される。非動作性名詞が「の」によって前接する場合である。以下に用例を示す。(91)～(93)が【うえに①】の用例、(94)～(96)が【うえに②】の用例である。

【うえに①】

- (91) 金メダルのうえに世界新のおまけつきという大成果だった。
(田中 2001 : 260)
- (92) 河野は、二十一才という東次郎が、予想したより子供っぽいのに驚いた。ラフなスタイルの上に、まん丸い顔をして、丸いメガネをかけた“坊主”といった印象だったという。 [明日への全力疾走 1988]
- (93) これでタナーは、わたしのことを甘やかされたわがまま娘のうえに、浅はかな浮気者だと思っただろう。 [花嫁は行方不明? 2001]

【うえに②】

- (94) ある段階をすぎると、自家生産の基礎のうえに堅実な拡大をとげるようになるものであり、早くこの段階に達して「運」にうちかつように、資金対策が強く求められる。 [北海道農業論・農業市場論補説 2001]
- (95) ～さらにはこれまで一人の営業担当者が行なってきた役割を分業化専門化したビジネスを展開。全社での仕組みのうえにGBD 独自での仕組みを構築し徹底することで、結果として高いお客さま満足度と生産性向上を同時に実現している。 [経営の質を高める 8つの基準 2001]
- (96) ところが、階級・種族・国家・宗教というような理念の上に、まさしく資本主義権力はよりかかっているのだ。 [新村猛著作集 1993]

まず、【うえに②】の用例(94)～(96)については、動作性名詞の場合と同様に、「の」による連体修飾を許容していることが確認される。したがって、前項で指摘したように、この場合の「うえに」は「うえ(名詞)＋二」と分析できる。しかし、用例(91)～(93)では、【うえに①】が「の」による連体修飾を承けているため、一見すると、これまでの議論の反例のように思われる。

しかし、次のような点を考えると、そうでないことが分かる。

グループ・ジャマシイ (1998) は、「うえ (に)」について、「名詞に付く場合は「N である／だった／であった」の形になる (p. 47)」としている。上記の用例における「の」を「である／だった／であった」のいずれかの形に置き換えたものを以下に示す。

【うえに①】

(97) a. 金メダルのうえに世界新のおまけつきという大成果だった。
(田中 2001 : 260) (= (91))

b. 金メダルだったうえに世界新のおまけつきという大成果だった。

(98) a. ~ラフなスタイルの上に、まん丸い顔をして、丸いメガネをかけ“坊主”といった印象だったという。

[明日への全力疾走 1988] (= (92))

b. ~ラフなスタイルである上に、まん丸い顔をして、丸いメガネをかけ“坊主”といった印象だったという。

(99) a. これでタナーは、わたしのことを甘やかされたわがまま娘のうえに、浅はかな浮気者だと思うだろう。

[花嫁は行方不明? 2001] (= (93))

b. これでタナーは、わたしのことを甘やかされたわがまま娘であるうえに、浅はかな浮気者だと思うだろう。

【うえに②】

(100) a. ある段階をすぎると、自家生産の基礎のうえに堅実な拡大をとげるようになるものであり、早くこの段階に達して「運」にうちかつように、資金対策が強く求められる。

[北海道農業論・農業市場論補説 2001] (= (94))

b. ??ある段階をすぎると、自家生産の基礎であったうえに堅実な拡大をとげるようになるものであり、～

(101) a. ~さらにはこれまで一人の営業担当者が行なってきた役割を分業化専門化したビジネスを展開。全社での仕組みのうえに GBD 独自の仕組みを構築し徹底することで、結果として高いお客さま満

足度と生産性向上を同時に実現している。

[経営の質を高める 8 つの基準 2001] (= (95))

b. ??全社での仕組みであるうえに GBD 独自の仕組みを構築し徹底することで、～

(102) a. ところが、階級・種族・国家・宗教というような理念の上に、まさしく資本主義権力はよりかかっているのだ。

[新村猛著作集 1993] (= (96))

b. ??ところが、階級・種族・国家・宗教というような理念である上に、まさしく資本主義権力はよりかかっているのだ。

【うえに①】の用例における「の」を「である／だった／であった」に置き換えた (97) ～ (99) の各 b 文はいずれも自然である。これは、(97a) ～ (99a) における「の」がコピュラの連体形であることを意味している。したがって、(97a) ～ (99a) の各文で「うえに」に前接している「非動作性名詞+の」は、表面上は「名詞+の」であっても、叙述性を持つ節相当のものとして機能していると考えられる。よって、非動作性名詞の場合も、【うえに①】は接続助詞として捉えられる²⁶。

一方、【うえに②】に同じ操作を加えた (100) ～ (102) の各 b 文はすべて不自然になる。(100a) ～ (102a) における「の」は、コピュラの連体形とは異なる「の」、つまり、連体助詞の「の」による修飾であり、それを「うえに」が承けられるということを表している。したがって、先に述べた通り、【うえに②】は「名詞(うえ)+二」であると分析できる。

以上、5.3.3.1 では、「うえに」の用法間における結合度の度合いの違いを、動作性名詞と非動作性名詞との接続から観察してきた。これを踏まえ、5.3.3.2 では、「ガ／ノ」交替現象について考える。

²⁶ 5.3.3.1.1 で検討した動作性名詞の場合は、形式上は同じく「の」であるが、述語相当にするにはコピュラではなく、「する」を使わなければならない、という点で非動作性名詞の接続とは異なる。

5.3.3.2 「ガ／ノ」交替

ここまでの検討を通じて、【うえに①】が、先行研究が指摘する通り、接続助詞として機能しているのに対し、【うえに②】はその構成要素「うえ」が名詞として機能していることが明らかとなった。ここでは、さらなる証拠を示すものとして、「はずみに」同様、「ガ／ノ」交替における両用法の振る舞いを見る。

連体修飾節内の主格名詞句は「ガ／ノ」交替が許されるが、【うえに①】と【うえに②】の場合はどうだろうか。

【うえに①】

- (103) 雷 {が／*の} 落ちたうえに、木まで倒れてきた。
- (104) 仕事 {が／*の} 忙しかったうえに、精神的にも不安定が続いていた。
(田中 2001 : 260 改)

【うえに②】

- (105) 国家 {が／?の} 発展するうえに不可欠な条件は、社会と個人の融和である。
- (106) 病 {が／?の} なおっていくうえにも各種ビタミンの補給は必要である。
(田中 2001 : 261) ((68a) 改)

【うえに②】は、完全に自然と感じられるものではないにしろ、【うえに①】に比べ許容度が高いと言える²⁷。このような文法性の違いから、【うえに②】は前接要素が連体修飾節として機能しているのに対し、「ガ／ノ」交替を許容しない【うえに①】は、前接要素を連体修飾節として捉えることができないため、前の節は従属節であると判断される。したがって、【うえに①】は、節と節を繋ぐ接続助詞として機能していると判断される。

これは、5.3.3.1 までで述べてきた、【うえに①】は接続助詞、【うえに②】は「名詞(うえ)＋ニ」として機能しているという主張を補強するものである。

²⁷ 【うえに②】における「うえ」は、名詞性を持つものの、実質名詞の「うえ」ほど名詞性が完全ではないことを意味する。

5.3.4 「に」の位置付け

ここまで、【うえに①】は複合辞として、【うえに②】は「名詞（うえ）＋ニ」として機能していることを見てきた。ここでは、それぞれの用法における「に」がどう位置付けられるかという問題について考える。

田中（1999、2001）では、本研究の【うえに①】は「添加」「累加」を表し（（107））、【うえに②】は「用途」を表す（（108））とされている。

（107） 雷が落ちたうえに、木まで倒れてきた。 （＝（103））

（108） 国家が発展するうえに不可欠な条件は、社会と個人の融和である。
（＝（105））

（107）と（108）では、「うえに」自体の意味用法は異なるが、（107）は「雷が落ちた」という場面を、（108）は「国家が発展する」という基盤などと読み取れる。田中（2001）では、用法のまとめとして（108）のような「うえに」を「用途」と命名しているが、「〈ウエニ〉②の前件は影響をもたらされる局面、分野、領域をあらわす（p.261）」としている。この場合の「うえ」は、高低・上下など空間的意味を表す実質名詞としての機能は薄れていると考えられるが、「何かを基盤にして」という意味が読み取れるため、（実質名詞「うえ」が持つ性質としての）場所性を保持しており、この「に」は、以下のような場所の「ニ」に近いと考えられる。

（109） ～その本を私の机の上に置きました。（K） （長谷部 2013：68）²⁸

場所の「ニ」は、以下のように一文中に重複して現れることは難しい。

²⁸ 長谷部（2013）は、「空間名詞（実質名詞）」の「うえ」を、〈表面〉〈物理的高所〉〈概念的高所〉〈語句の先頭〉の4つに分類している。例（109）は〈物理的高所〉の一例である。いずれにしても実質名詞に付く「に」はニ格であるため、実質名詞の下位概念についてはこれ以上立ち入らない。

(110) * 部屋にその本を私の机の上に置きました。

【うえに①】と【うえに②】に場所の「ニ」を挿入してみる。

【うえに①】

(111) a. 雷が落ちたうえに、木まで倒れてきた。 (= (107))

b. 雷が落ちたうえに、屋根に木まで倒れてきた。

【うえに②】

(112) a. 歴史とは言われてきたことを言うのではなく、みられてきたことを語るのである。歴史家の話の力は、模像と誘惑の奇妙な共生のうえに成り立っているものである。 [ディアナの森 1998]

b. ??歴史家の話の力は、模像と誘惑の奇妙な共生のうえに世間に成り立っているものである。

(113) a. だからこそ彼は、これを公準の中に加え、その仮定のうえに彼のユークリッド幾何学を構築したのである。

[数学の天才列伝 2002] (= (87))

b. ??だからこそ彼は、これを公準の中に加え、その仮定のうえにこの分野に彼のユークリッド幾何学を構築したのである。

【うえに①】は(111b)のように問題なく場所の「ニ」を取ることができる。一方、【うえに②】の(112b) (113b)は、(111b)に比べ不自然さを感じる²⁹。これは、「～うえに」と、「世間に」「この分野に」が表すものが空間的であり、重複するような解釈になるためであると考えられる³⁰³¹。

²⁹ (112a) (113a)の文の内容が抽象的であり、そもそも空間を表すニ格がとりにくい、それ以上に不自然であると判断した。

³⁰ (112b) (113b)は、(110)ほど文法性が低いものではないと判断される。これは、5.3.3.2で検討した「ガ／ノ」交替の許容度とも関連する。【うえに②】の「ガ／ノ」交替が【うえに①】ほど自然ではないのに対し、【うえに②】における「う

したがって、「うえに」の2用法における「に」はその場所性の強弱から、以下のような段階性を持つものとして捉えられる。

(114) <場所性>³²

場所の「ニ」 ≡ 「名詞(うえ)＋ニ」 > 複合辞「うえに」

複合辞として機能する「うえに」は、一語化しており、もはや、場所という意味合いを探すのは難しいという点でも、最も右側に位置するのは妥当であると考えられる。田中(1999、2001)は【うえに②】を複合辞「うえに」の派生用法としている。何をもって基本用法、派生用法を判断しているのかは定かでないが、(114)に照らし合わせるなら、派生と捉えられるのは、むしろ複合辞「うえに」の方である。

場所性の段階性は、名詞「うえ」の概念の変化からも説明を与えることができる。

砂川(2000)は、空間概念を表す名詞が自立語から機能語的な付属語へと変化する際の意味の転写について述べているが、その一部で「うえ」を挙げている。「うえ」という表現は、「同時点」「以後」といった相対的な時間概念に加え、「累加」「必然性」も表すとするが、「うえに」という表現は、空間に関わる

え」は、名詞性を持つものの、実質名詞の「うえ」ほど名詞性が完全ではない可能性について触れた。つまり、【うえに②】における「うえ」の場所性は、【うえに①】と実質名詞「うえ」の中間的なものと捉えられる。【うえに②】の場所性が強ければ、(110)同様、他の場所性名詞を許容しないはずである。

³¹ 形容動詞による連体修飾を【うえに②】に行おうとすると文を作成することができない。これは場所的に解釈できる語を要求する【うえに②】と、状態的な意味を表す形容動詞が意味的に衝突するために共起不可能となっているためであると考えられ、【うえに②】が場所性を保持しているという主張の傍証として位置付けられる。

³² 場所の「ニ」と「名詞(うえ)＋ニ」における「ニ」については、両者における「ニ」を同じものと捉えられるのか、あるいは、同じものと捉えるべきなのかなど、その異同についてはさらなる検討が必要である。

「累加」という意味しか感じられず、(115b)のように、2つの事態の順番を入れ替えても同じ出来事を表しており、時間概念との関わりは薄いとする。一方、「うえで」は、「以後」の意味だけでなく、「あることがらが前提となってそれに積み重なる形で次の事柄が起こる」という「累加」の意味が加わっている(p. 130)」と、両者の違いについて論じている。

- (115) a. その選手は日本記録も更新した上に銀メダルももらって、自分でも信じられないという顔をしていた。(累加)
b. その選手は銀メダルももらった上に日本記録も更新して、自分でも信じられないという顔をしていた。(砂川 2000 : 130)

- (116) 担当の者と相談した上で、改めてご返事させていただきます。
(以後)
(砂川 2000 : 130)

確かに、【うえに①】の事態間の順番を変えても同じ事柄を表すと捉えられそうである。

- (117) a. 彼はフランス語ができるうえに、ドイツ語も堪能だ。
(田中 2001 : 259) (= (57))
b. 彼はドイツ語ができるうえに、フランス語も堪能だ。
(118) a. あの店は値段が高いうえに、サービスも悪い。
(田中 2001 : 260) (= (58))
b. あの店はサービスが悪いうえに、値段も高い。

しかし、以下を見ると、時間的な前後関係を有する出来事を繋いでいるとも捉えられ、【うえに①】全体に「時間概念との関わりは薄い」という説明を与えることはできない。【うえに①】の例(59) (82b) (83b)を再掲する³³。

³³ 「#」は、文として成立するが、各 a 文の表す事柄と異なることを意味する。

- (119) a. ごちそうになったうえに、お土産までいただきました。
 (田中 2001 : 260) (= (59))
 b. #お土産までいただいたうえに、ごちそうになった。
- (120) a. 信長は宗久の願いのとおり、宗瓦を罰し、家財、茶器のすべてを
 没収したうえに、追放した。 (= (82b))
 b. #信長は宗久の願いのとおり、宗瓦を罰し、追放したうえに、家財、
 茶器のすべてを没収した。
- (121) a. ~政界一大問題として国会・マスコミは大騒ぎするうえに、喚問
 までするでしょう。 (= (83b))
 b. #~政界一大問題として国会・マスコミは喚問するうえに、大騒ぎ
 までするでしょう。

(119b) ~ (121b) は文としては成立しているため、一見、事態の順番を入れ替えても問題がないようであるが、事態の展開として (119a) ~ (121a) と同じ事柄を表しているとは言えない。

上記 (119b) ~ (121b) が時間的な前後関係までを表しているならば、空間概念から時間概念へという、言語に多く見られる拡張の流れのなかで「うえに」を無理なく捉えられると考える。「うえに」と「うえで」が時間概念を表すことができ、それは「うえ」自体が時間概念化したためと捉えれば、「うえ」が空間概念から時間概念を持つようになったという議論とも整合性の取れた説明ができる³⁴。本研究では、複合辞「うえに」は、時間概念、空間概念両方とも関連すると考える³⁵。

以上のように、場所の「ニ」との共起関係、名詞「うえ」の意味といった側面からも、(114) のような段階性を想定することは妥当であると思われる。

³⁴ 「うえ」の空間から時間への転用は、靱山 (1992) でも述べられている。なお、靱山 (1992) は、「修飾語句を伴わない時に表れる意味」をその語の基本義と認定している。

³⁵ 時間概念においては「うえに」と「うえで」とで、どのような異なりを有するのか、あるいは、類似しているのか、についてはさらに詳細な検討を要する。

5.3.5 まとめ

本研究では、複合辞「うえに」に 2 つの用法があるとする従来の研究の問題点を指摘し、再検討した。以下、表 3 に従来の研究の立場と本研究で明らかにした結果をまとめる。

表 3 先行研究のまとめおよび本研究の主張

	用法①	用法②	用法②における「に」の扱い
田中 (1999、2001)	接続助詞	接続助詞	格助詞
馬場 (2005)	接続助詞	格成分的な用法	助詞
長谷部 (2013)	複合辞	形式名詞＋二格	格助詞
本研究の主張	【うえに①】 複合辞	【うえに②】 名詞（うえ）＋ 「に」	場所の「に」

I 【うえに①】；複合辞「うえに」

全体で複合辞として機能している。「に」は、場所の「に」と関係付けられる。

II 【うえに②】；名詞（うえ）＋「に」

名詞「うえ」に「に」が付いたものとして捉えられる。その振る舞いを見ても、意味の面においても、「名詞（うえ）＋に」と捉えるべきであると考えられる。なお、「に」は、場所の「に」と位置付けられる。

5.4 本章のまとめ

本章では、「はずみに」と「うえに」を取り上げ、複合辞を形成する「に」について述べた。

5.2 では、「はずみに」と「はずみで」を比較・検討した。「はずみに」と「はずみで」は、意味が類似していることで同じく複合辞とされてきた。先行研究の議論には、十分な論証をせずに「に」を格助詞として扱っているなどの問題があることを指摘し、文法的な証拠を用いて、「はずみに」と「はずみで」を正

しく位置付けることを試みた。その結果、「はずみに」は、一語化した接続助詞として機能するものであるのに対し、「はずみで」は「名詞（はずみ）＋デ格」という内部構造を成していることを明らかにした。また、意味的考察から「はずみに」の「に」は時の「に」と関連すると捉えられること、「はずみで」の「デ」は、連体修飾を承ける場合は原因の「デ」、単独で機能する場合は様態の「デ」であることを論じた。

5.3 では、従来の研究が指摘している「うえに」の 2 用法について検討し、添加を表すとされる「うえに」（【うえに①】）が複合辞であるのに対し、領域、基盤を表すとされる「うえに」（【うえに②】）は「うえ（名詞）＋「ニ」という内部構造を持つものであることを述べた。加えて、両者を場所の「ニ」と関連付けることで、【うえに①】が「うえ」の空間概念から時間概念へという言語一般に広く見られる拡張の流れのなかで無理なく捉えられることを主張した。

5.1 で、従来の研究には、一つ一つの語の結合度は同程度であるのか、また、複合辞を形成する「に」の品詞性は均一なものなのか、という点が明らかになっていないという問題があることを指摘した。本章では、「はずみに」と「うえに」の検討を通じ、形式が類似するものであっても、同一形式の複数の用法であっても、結合度に違いがあることが確認できた。加えて、構成要素においても、一方は時の「に」と、一方は場所の「ニ」と関連付けられるといったように、同じ「に」であっても、個々の語、用法によって異なる「に」を想定しなくてはならないことも明らかになった。今後は本研究のように、個々の複合辞における構成要素について詳しく考察し、複合辞の内包と外延を再検討していく必要がある。

しかし、本章で扱い切れなかった課題も残っている。「はずみに」と関連する形式として以下のような「～をはずみに（して）」が挙げられる。

- (122) a. しかし、世界は米ソ超大国の接近を弾みに、カンボジアをめぐる中ソ、中ベトナム関係も、去年から今年にかけて急速に正常化もしくは雪解けの方向にある。 [朝：1989年2月17日]
- b. 世界は米ソ超大国の接近を弾みにして、カンボジアをめぐる中ソ、中ベトナム関係も、～正常化もしくは雪解けの方向にある。

村木（1983）は、〈N₁ヲ N₂ニ〉形式は、形式動詞「して」を補って従属句にできる場合が多く、N₂ は名詞性を失って後置詞的な性質を帯びているとする。村木（1983）は「はずみに」を扱っていないが、上記の形式と本研究で取り上げた「はずみに」をどのような関係で捉えられるのか、また、単に「して」を省略したものと見て良いのかといった問題も考えられる。これについては今後の課題とする。

第6章 「兼ねる」類文と共起する「に」

6.1 はじめに

「に」の形式で文中に現れるもののなかには、該当する品詞が見当たらないものが存在する。「兼ねる」と共起する「に」がそれにあたり、第3章の並立助詞の「に」を検討する際に引用した(1)のような形で文中に現れる。

- (1) 山崎医院は産科に内科を兼ねている。 (寺村 1991 : 206)

本章では、(1)に生起している「に」がこれまで指摘されているどの「に」とも異なるものであることを主張する。

寺村(1991)は、上記(1)における「に」を、主従関係を示す並立助詞「に」とする。しかし、以下のように名詞を入れ替えると、両者の違いが確認できる。

- (2) a. 山崎医院は産科に内科を兼ねている。
(寺村 1991 : 206) (= (1))
b. #山崎医院は内科に産科を兼ねている。
(3) a. 山崎医院は産科と内科を兼ねている。
b. 山崎医院は内科と産科を兼ねている。

第3章では、並立助詞の特徴として、「名詞を列挙し、全体を1つの名詞として機能させる」と「名詞が入れ替えられる」の2つを挙げた。並立助詞ならば、

2つの名詞を入れ替えても意味が変わらないはずである。このような観点で見ると、並立助詞「と」は寺村(1991)のいう「主従」といった概念を持たないため、(3)のように、名詞を入れ替えても「主」と「従」が入れ替わることはない。しかし、並立助詞「に」では(2b)のように、「主(産科)」と「従(内科)」が入れ替わってしまう。そもそも、「主従」というニュアンスがある段階で、意味的に、並立助詞とは考えにくい。

「に」と「と」の違いは以下の観察からも見て取れる。

- (4) a. この店では彼がバーテンダーにウェイターを兼ねている。
b. この店では彼が [バーテンダーにウェイター] も兼ねている。
c. この店では彼がバーテンダーに [ウェイター] も兼ねている
- (5) a. この店では彼がバーテンダーとウェイターを兼ねている。
b. この店では彼が [バーテンダーとウェイター] も兼ねている。
c. *この店では彼がバーテンダーと [ウェイター] も兼ねている。

「も」でとりたてた場合、「と」は「バーテンダー」「ウェイター」両方を取りたてる解釈のみが成立する(= (5b))。一方、「に」は(4b)のように、「バーテンダー」「ウェイター」両方を取りたてる解釈(並立助詞「に」の解釈)も可能であるが、(4c)のように、「ウェイター」を自者、「バーテンダー」を他者とする解釈も可能である。

つまり、「兼ねる」文には並立助詞以外の「に」が生起していると捉えられるのである。

以上を踏まえ、本章では、「兼ねる」類と共起する「に」がどのような役割を担うのか、さらに、この「に」が体系全体のなかでどのように位置付けられるのかについて議論を行う。

6.2 「兼ねる」類

本論に入る前に、「兼ねる」の辞書的意味を確認した上で、同じ類いの動詞を提示する。

○『デジタル大辞泉』¹

①一つで二つ以上の働きをする。

一つの物が二つ以上の働きを合わせもつ。一つの物が二つ以上の用をする。

「大は小を一・ねる」「書齋と応接間とを一・ねた部屋」

②一人が二つ以上の職を受け持つ。他の仕事も合わせ行う。兼任する。

「首相が外相を一・ねる」「商用を一・ねて上京する」

○『明鏡国語辞典 第二版』

二つ以上の機能や性質をもつ。

「総理が外相を一（＝兼務する）」「朝食は昼食を一・ねて遅めに食べた」

「大は小を一」「観光と取材を一・ねて旅行する」

〔語法〕「山田副社長が販売部長を一」（A ガ B ヲ一）と、「山田氏が副社長と販売部長を一」（A ガ B と C ヲ一）の型がある。

以上の辞書記述と、国立国語研究所（2004）を参考に「兼ねる」類の動詞を選定した²。

○「兼ねる」類動詞

兼ねる、兼用する、兼任する、兼務する、兼備する、兼帯する、兼摂する、兼担する……

上記を「兼ねる」類とし、この類いの動詞と共起する「に」を「「兼ねる」類の「に」」とする。

6.3 先行研究の概観

本節では、「兼ねる」類の「に」と類似点を持つ〈N₁ ヲ N₂ ニ〉構文と〈資

¹ 動詞の連用形に付く「しかねる」など、本研究の対象外の用例は省略した。

² 国立国語研究所（2004）では、「兼ねる」は、「2.1110 関係」「2.1131 連絡・所属」「2.3400 義務」に分類されている。

格)ニ句に関する先行研究として村木(1983、1991)と和氣(2006)を取り上げ、概観する。

6.3.1 村木(1983、1991)

村木(1983、1991)は、〈N₁ヲ N₂ニ〉全体でひとまとまりとなって文の成分を構成している表現について取り上げており、そのような表現を形式的な動詞「する」の連用の形式「して」が脱落して成立したものと考えている。

- (6) a. 警察では関係者の証言をたよりに足取り捜査を開始した。
- b. 関係者の証言をたよりにして……
- (7) a. その男は私を相手に冗談ばかり言っていた。
- b. 私を相手にして……

(村木 1991 : 299f.)

〈N₁ヲ〉と〈N₂ニ〉は、各々独立に文の成分になることはなく、以下のように、〈N₁ヲ N₂ニ〉における名詞句の順序を入れ替えることはできないと言う。

- (8) *警察ではたよりに関係者の証言を足取り捜査を開始した。

(村木 1991 : 302)

- (9) *その男は相手に私を冗談ばかり言っていた。

(村木 1991 : 302)

これに加え、村木(1983、1991)は、〈N₁ヲ N₂ニ〉の特徴をいくつか挙げている。以下、本研究と関連する現象を中心にまとめる。

まず、〈N₁ヲ N₂ニ〉における〈N₂〉は、連体修飾を承けることがない。

- (10) ?その男は私をこころやすい相手に冗談ばかり言っていた。

(村木 1991 : 303)

また、〈N₁ヲ〉と〈N₂ニ〉の間に、他の連用的な成分も入りにくい。

(11) *その男は私をいつも相手に冗談ばかり言っていた。

(村木 1991 : 304)

「は」によって〈N₁ヲ〉を主題化、あるいは、とりたてることもできない。

(12) *その男は私は／(を)も／(を)こそ相手に冗談ばかり言っていた。

(村木 1991 : 304)

書き言葉において、一般に、対格を表す「ヲ」が脱落することはないが、〈N₁ヲ N₂ニ〉の構造を持つ対格の名詞は「ヲ」を落とすことができる。

(13) 田舎町の学校に転任して来た美人教師が悪童相手に活躍する青春映画。

(毎日 820109 朝)

(村木 1991 : 306)

「N₁が N₂である」という命題関係が成り立つ。しかし、〈N₁ヲ N₂ニ〉の構造のすべてにおいて成り立つわけではない。

(14) a. 大勢の聴衆を前に、演説をぶった。

b. *大勢の聴衆が前である。

(村木 1991 : 308)

村木 (1991) は、このような特徴を持つ〈N₁ヲ N₂ニ〉構文を、統語論上の「状況成分」、「付帯状況」、「補語成分」の役割を担うものに分け、さらに、それぞれの下位分類を行っている。そのなかで、付帯状況を表すものには、「資格」、「所持」、「排除」が属する。資格は、「N₁が N₂ (の資格) である」という関係が成り立つものである。

(15) ナンシーは、舞台女優を母に、セールスマンを父に生まれたが、

(毎日 800801 朝)

(村木 1991 : 318)

- (16) 二時間三五分〇秒の日本最高記録を手みやげに、九日朝、帰国した。
(朝日 820610 朝)
(村木 1991 : 318)

この「資格」については、和氣 (2006) に詳細な分析が提示されている。

6.3.2 和氣 (2006)

和氣 (2006) では、〈資格〉の二句が現れる構文は「x が y を z に V」という形をした他動詞文であり、意味的に「y が z だ」、あるいは「y が z になる」という関係が成り立つとされる。和氣 (2006) は、従来、単に資格を表す「に」句として一括りにされてきたものを、遊離数量詞の振る舞い、二句の必須性、他の二格名詞句との共起可能性という 3 つのテストの結果に基づき、以下の 4 種に分けている (和氣 (2006) では、〈資格〉二句)³⁴。

I [位置変化に伴う資格付け] :

対象の位置の変化の結果、対象にある一定の資格が与えられる

- (17) 太郎がお茶をお歳暮に送った。 (和氣 2006 : 176)
(18) 太郎が蜂蜜を隠し味に入れた。 (和氣 2006 : 176)

II [叙任] : ある人間が別の人間を、ある抽象的な地位をつける

- (19) 留吉が使者を辞退したので、次の時は、幸夫を使者に立てた。
(井上靖「あるなる物語」)
(和氣 2006 : 178)
(20) 「私が君を社長に指名したのか?」 (赤川次郎「女社長に乾杯!」)
(和氣 2006 : 179)

³ 〈資格〉二句という表記について「「叙任」および「仕立て」においては、当該二句は必須的な成分であるため、本来であれば何らかの形で表記法を変える必要がある (和氣 2006 : 186、注 4)」と断っている。

⁴ 遊離数量詞の振る舞いについては、竹沢 (1999) を踏襲している。

III〔仕立て〕：ある対象を、別の資格を持つものに仕立てる

(21) 太郎が空き部屋を物置に充てた。 (和氣 2006 : 181)

(22) 野党の非難を浴び、パニックにおびえて、ついに灰色の大群を幻影に仕立てることを思いついたのだ。 (開高健「パニック」)

(和氣 2006 : 181)

IV〔臨時的な利用〕：

ある対象を、一時的に、または仮に、本来の使い方とは別の使い方で利用する

(23) 太郎が教科書を枕に使った。 (和氣 2006 : 183)

(24) 太郎が棒切れを箸に利用した。 (和氣 2006 : 183)

「位置変化に伴う資格付け」は、遊離数量詞の振る舞い方からして結果二次述部とは言えないが、[着点]二格と共起するため、場所格成分とも言えず、これまでに指摘のなかった名詞句としている。

「叙任」は、必須的な成分として位置変化構文の[着点]二格句に相当し、抽象的な位置付けの変化における結果の立場を表すと言う。

「仕立て」や「臨時的な利用」に関しては、必須・任意、物理的状态の変化といった面で、一般的な結果二次述部とは性格が大きく異なると述べている。また、「仕立て」については、副詞的な成分を必須補語とする構文の1つとして捉えられる可能性があると言う。

下に上記の議論をまとめた表を和氣(2006)より引用する。

表1 〈資格〉二句の4分類 (和氣 2006 : 184)

	位置変化に伴う資格付け	叙任	仕立て	臨時的な利用
名詞句／ 結果二次述部の別	何らかの名詞句	[着点]相当の名詞句	結果 二次述部	結果 二次述部
必須／任意の別	任意	必須	必須	任意

また、和氣(2006)は〈資格〉二句と、見かけ上、類似する形式を持つ構文として、村木(1983、1991)の〈N₁ヲN₂ニ〉構文を取り上げ、〈資格〉二句の特徴

と村木（1983、1991）が挙げている〈N₁ヲ N₂ニ〉構文の特徴とを比較し、両者が一致しないことから、〈資格〉二句の「y に z を」部分を節として分析することはできないとしている。

6.3.3 まとめ

村木（1983、1991）と和氣（2006）における〈N₁ヲ N₂ニ〉構文と〈資格〉二句について概観した。〈N₁ヲ N₂ニ〉構文と〈資格〉二句は、「X ヲ Y ニ」の形式で現れるという共通点を持つ。形式上の類似性については和氣（2006）でも記述があったが、和氣（2006）は、両者を同じ構文とは見なしていない。

本研究における「兼ねる」類文は、「X に Y を」の形式で現れるものであるが、意味面では、「資格」を表すものに近い。

(25) この店では彼がバーテンダーにウェイターを兼ねている。

(= (4a))

6.4 では、〈N₁ヲ N₂ニ〉構文と〈資格〉二句、そして「兼ねる」類文の異同について検討を行う。

6.4 〈N₁ヲ N₂ニ〉構文と〈資格〉二句との比較

ここでは、6.3 で概観した〈N₁ヲ N₂ニ〉構文（村木 1983、1991）、〈資格〉二句（和氣 2006）と「兼ねる」類文との比較を行う。以下、それぞれに当たる用例を先に示す。(26) が〈N₁ヲ N₂ニ〉構文、(27) が〈資格〉二句、(28) が「兼ねる」類文である。

(26) 地図をたよりに人をたずねる。

(27) 太郎がお茶をお歳暮に送った。 (和氣 2006 : 176) (= (17))

(28) この店では彼がバーテンダーにウェイターを兼ねている。

(= (25))

上記の構文ごとに、村木（1983、1991）と和氣（2006）で検証している現象を

見ていく⁵。

① ニ句の必須性

- (29) a. *地図を人をたずねる。 (＝ (26) 改)
b. 太郎がお茶を送った。 (和氣 2006 : 171)
c. この店では彼がウェイターを兼ねている。 (＝ (28) 改)

② 「シテ」の添加

- (30) a. 地図をたよりにして人をたずねる。 (＝ (26) 改)
b. ??太郎がお茶をお歳暮にして送った。 (和氣 2006 : 171)
c. *この店では彼がバーテンダーにしてウェイターを兼ねている。
(＝ (28) 改)

③ フ句とニ句の入れ替え

- (31) a. *たよりに地図を人をたずねる。 (＝ (26) 改)
b. 太郎がお歳暮にお茶を送った。 (和氣 2006 : 171)
c. *この店では彼がウェイターをバーテンダーに兼ねている。
(＝ (28) 改)

④ ニ句への連体修飾

- (32) a. ??地図を最後のたよりに人をたずねる。 (＝ (26) 改)
b. 太郎がお茶を三年ぶりのお歳暮に送った。 (和氣 2006 : 172)
c. この店では彼がカクテル担当のバーテンダーにウェイターを兼ねて
いる。 (＝ (28) 改)

⑤ フ格の主題化・とりたて

- (33) a. *地図もたよりに人をたずねる。 (＝ (26) 改)

⁵ 〈資格〉ニ句における判定は、和氣 (2006) による。〈N₁ フ N₂ ニ〉構文の判定は、村木 (1983、1991) の見解に従い判断したものである。

- b. 太郎がお茶もお歳暮に送った。 (和氣 2006 : 172)
- c. この店では彼がバーテンダーにウェイターも兼ねている。
(= (28) 改)

以上の観察を表 2 にまとめる。

表 2 3つの構文の比較

	〈N ₁ ヲ N ₂ ニ〉構文	〈資格〉二句	「兼ねる」類文の「に」
二句の必須性	×	○	○
シテの添加	○	△ ⁶	×
語順の入れ替え	×	○	×
二句への連体修飾 ⁷	△	○	○
ヲ句の主題化・とりたて	×	○	○

表 2 を見ると、「兼ねる」類文は、〈N₁ヲ N₂ニ〉構文とも、〈資格〉二句とも異なることが確認できるが、〈資格〉二句との共通点が多少見られるため、6.5 では、〈資格〉二句の下位分類との比較を行うこととする。

6.5 資格の「に」の可能性について

以下、和氣 (2006) のテストを踏襲する。

遊離数量詞が、〈資格〉二句を挟んだ位置からヲ格を修飾できるかどうかのテストであるが、「兼ねる」の場合、非文ではないが、数量詞はガ格名詞しか修飾できない。

⁶ 和氣 (2006) では、「??」と判定されている。

⁷ 村木 (1991) は 〈N₁ヲ N₂ニ〉構文が根拠や原因などを表す場合は二句が連体修飾を承けるが、同構文は基本的には連体修飾を承けることはないとする。そのため、表では「△」とする。

(34) a. この街では、スーパーが薬局に文具店を兼ねている。

b. #この街では、スーパーが3軒薬局に文具店を兼ねている。

(35) は、二句が必須かどうかのテストである。「兼ねる」類文ではヲ格句単独で現れるが、二句は単独では現れず、必須とは言えない。

(35) a. この店では彼がバーテンダーにウェイターを兼ねている。

(= (28))

b. この店では彼がウェイターを兼ねている。

c. *この店では彼がバーテンダーに兼ねている。

和氣 (2006) は、他の二格名詞句との共起において [着点] の二格句や [相手] の二格句と共起させている。しかし、「兼ねる」類文には、他の「に」句は生起できない。

(36) a. 彼がバーテンダーにウェイターを兼ねている。 (= (35) 改)

b. *彼がこの店にバーテンダーにウェイターを兼ねている。

c. *彼が友人にバーテンダーにウェイターを兼ねている。

和氣 (2006) と同様のテストを施した結果を表 3 にまとめる。

表 3 和氣 (2006) における〈資格〉二句の下位分類と「兼ねる」類文

	遊離数量詞の位置	二句の必須性	他の二句との共起
位置変化に伴う 資格付け	○	×	○
叙任	○	○	×
仕立て	×	○	×
臨時的な利用	×	×	×
「兼ねる」類文	×	×	×

表 3 は、〈資格〉ニ句の下位分類とともにまとめたものであるが、結果だけを比べてみると、「兼ねる」類文と和氣（2006）の「臨時的な利用」が同じ結果を表している。和氣（2006）は、「臨時的な利用」を結果二次述部としているため、次にその可能性について検討を行う。

(37) 太郎が棒切れを箸に利用した。 (和氣 2006 : 183) (= (24))

(38) この店では彼がバーテンダーにウェイターを兼ねている。
(= (35))

「彼がバーテンダーだ」という意味関係が成立するため、二次述部の可能性はある。しかし、ヲ格句でも「彼がウェイターだ」という意味関係は成立する。そのため、安易に二次述部と扱うことはできない⁸。

6.1 で述べた通り、「兼ねる」類文の最も大きな特徴は、1) 語順の入れ替えが難しいこと、2) ひとまとまりとして捉え得ること、である。語順の制約について、二次述部と比較してみると、「兼ねる」類文は完全に入れ替えができないが、二次述部や他のニ格は「兼ねる」類文より自由である。

(39) a. この店では彼がバーテンダーにウェイターを兼ねている。
(= (38))

b. *この店では彼がウェイターをバーテンダーに兼ねている。

(40) a. 太郎が壁を真っ白に塗った。

b. 太郎が真っ白に壁を塗った。

(41) a. 太郎が花を花子に渡した。

b. 太郎が花子に花を渡した。

「兼ねる」類文に生起する「に」の統語範疇としての可能性を考えた場合、

⁸ 和氣（2006）は、「仕立て」や「臨時的な利用」に関して、分類のために用いた遊離数量詞のテストをクリアすれば、それが一般的な意味の結果二次述部であるというわけではないとしている。

1) 格助詞、2) 並立助詞「に」、3) 資格の「に」が挙げられる。しかし、これまで見てきた通り、並立助詞「に」、資格の「に」とは捉えられない。また、格助詞の可能性についても、従来の研究で指摘されているどの意味とも異なるものと言える。したがって、「兼ねる」類文に生起する「に」は、これまで指摘されてきたどの「に」とも異なるものであると考えられる。

6.6 本章のまとめ

本章では、第3章の並立助詞の「に」と関連するものとして「兼ねる」類と共起する「に」を取り上げ、当該の「に」が並立助詞とも格助詞とも「資格」を表す「に」とも捉えられないということを主張した。

和氣（2006）は「位置変化に伴う資格付け」の「に」句を従来指摘されることのなかった名詞句であるとし、「何らかの名詞句」としている。本研究で扱った「兼ねる」類文の「に」は、それとも異なる特徴を持つものである。

このような、従来の研究の枠組みでは捉え切れない「に」については、さらに様々な「に」を観察していくなかで、その位置付けを模索していく必要があるが、それについては今後の課題とする。

第7章 現代日本語における「に」の様相

7.1 はじめに

本研究は、現代日本語における「に」の諸相を明らかにするために、それぞれ異なる統語環境に生起する、並立助詞の「に」、接続助詞の「に」、複合辞を形成する「に」、そして、「兼ねる」類文と共起する「に」を取り上げ、分析を行った。本章では、これまでの議論に基づき、第1章で提示した以下3つの課題についての答えを示す。課題を再掲する。

- 1) 現代日本語における「に」がいかに用法の広がりを持つのか。
- 2) 格助詞「ニ」と繋がりを持つとされてきた「に」が、どの程度関係を有するのか、もしくは、有さないのか。
- 3) 格助詞「ニ」とその周辺に存在する「に」、また、周辺に存在する「に」同士の間に見られる関係性はいかなるものか。

7.2 では、上記の 1) と 2) の疑問に答えるものとして、現代日本語において「に」の用法の広がりが指摘できること、現代日本語の「に」のなかにはニ格と繋がりを有するものと有さないものが存在することについて述べる。そして、7.3 では、3) に答えるものとして、従来の「に」の捉え方、および、本研究で明らかとなった現代語の「に」の様相を図示化して示す。最後に 7.4 で本章のまとめを述べる。

7.2 「に」の用法の広がり

従来の研究の多くは、格助詞「ニ」と捉えられない、もしくは、捉えにくい「に」について目を向けることが少なく、それらの様相を把握しようと試みたものほとんどない。その背景には、すべての「に」が格助詞「ニ」を出自としていることを前提とし、品詞の異なる多様な「に」について、格助詞の意味（あるいは、意義素）を用いた一律な説明を与えようとしていたことがあったと思われる。

並立助詞「に」と接続助詞「に」は、統語的な振る舞いを異にするものの、通時的研究ではともに、格助詞「ニ」と連続性を有するものとして取り上げられてきた。しかし、現代日本語においては、並立助詞「に」と接続助詞「に」の格助詞との関係の在り方は大きく異なっている。

現代語の接続助詞「に」について、京極（1987）は、接続助詞「と」の使用が盛んになったために、同表現は現代語においては衰退していると指摘し、「要するに」「思うに」などに名残をとどめるにすぎないとする。しかし、本研究が示したように、現代語においても、接続助詞「に」が存在していると捉えなくてはならない。ところが、接続助詞「に」と格助詞「ニ」の関係性という点から見た場合、古典語で指摘されている接続助詞「に」の用法と、第4章で述べた「前節の事態を踏まえて、これに対する話者の推量・推測などの内容を後節で述べ立てる」という現代語における用法の間には隔たりがある。古典語の研究である山口（1980）、此島（1983）、京極（1987）で取り上げられている、格助詞「ニ」とも接続助詞「に」とも取れる用法や、格助詞「ニ」と意味的に関連の強い用法に関しては衰退してしまっており、接続助詞としての用法を派生させていく過程で獲得された現代語における用法だけが残ったと考える必要がある。このような観点に立つならば、現代語において、格助詞「ニ」と接続助詞「に」の間に連続的関係を想定する必要はないと言える。

現代語における衰退が指摘されていた接続助詞「に」に対し、並立助詞「に」に関しては、通時的研究に限らず、共時的研究においても、国広（1962、1967）のように格助詞「ニ」と同様の意義素で捉えようとするものが見られた。しかし、本研究では、その捉え方には問題があることを指摘し、先行研究が並立助詞「に」としてきたもののうち、（1）「月にむら雲」類に関しては、格助詞

「ニ」と捉えるべきであると主張した。

- (1) 「 $N_1 = N_2$ 」；「月にむら雲」類（格助詞「ニ」）
- (2) 「 N_1 に N_2 に $\sim N_n$ 」；典型的並立助詞「に」
- (3) 「 N_1 に N_2 に $\sim N_n$ に」；例示を表す並立助詞「に」

加えて、従来の研究では指摘のなかった(3)のような用法を含め、並立助詞と捉えられる(2)(3)の用法を格助詞「ニ」で捉えようとする、並立助詞「に」のみならず、格助詞「ニ」の意味も、本来記述すべきものより抽象度が高くなってしまいかねないことを指摘した。したがって、その文中における機能の違いや拡張の度合いから、現代語における格助詞「ニ」と並立助詞「に」は、別のカテゴリーとして明確に分けておく必要があると考えるが、歴史的研究を踏まえると、接続助詞ほど、切り離して捉える必要はないと言える。

並立助詞と関連する要素として、「兼ねる」類文と共起する「に」も取り上げた。これは、寺村(1991)が並立助詞と捉えていたものであった。しかし、その振る舞いを見ると、並立助詞とは捉えることはできず、さらに、従来指摘されているどの「に」とも異なるものであった。「兼ねる」類文と共起する「に」を含め、位置付けが困難な「に」は多く存在する。

- (4) 「兼ねる」と共起する「に」
- (5) 和氣(2002、2006)の「位置変化に伴う資格付け」の「に」
- (6) 時の「に」

上記の「に」はいずれも従来の枠組みの外側に位置するものという点で共通性を有するが、(4)は動詞の語彙的意味、(5)は「資格」と関連する動詞の類的意味と関わっているのに対し、(6)は動詞のいかなる意味とも関わらない、という違いが考えられる。これらは、既存の「に」に関する枠組みでは捉え切れないような類いの「に」がまだ複数存在しているとともに、「に」がそれだけの広がりを持っていることを示唆している。

また、複合辞に関しては、単に「に」と結合するという点のみならず、どの

ような「に」と結合しているのかを見なくてはならないという観点に立ち、第 5 章では、「はずみに」と「うえに」の内部構造について論じた。そして、「うえに」の「に」は、その出自を場所の「ニ」として捉えた。一方で、「はずみに」の「に」は時の「に」に由来すると捉えられるとした。時の「に」については、前述の通り、その位置付けが未だに曖昧であり、格助詞なのか、そうでないのかについても検討を続けなければならない。和氣（2002）は、時の「に」を、出来事の状態を設定するという機能を担うものと考えられるとし、「時のニ句」としている。本研究も和氣（2002）と同様に、時の「に」は格助詞でないという立場を取るが、ここでは、暫定的な結論として示しておく。

このように、「うえに」と「はずみに」だけを取り上げても、その構成要素である「に」は性格を異にすることが分かる。

以上をもって、課題 1) と 2) の答えとして、「現代日本語における「に」は、もはや、格助詞「ニ」とは関係性を見出せないものから、既存の枠組みでは捉え切れないものに至るまで、かなりの広がりを持つている」ということが得られた。

7.3 格助詞と「に」同士の関係性

7.2 で、本研究で取り上げた「に」と格助詞「ニ」との関係について述べた。ここでは、課題 3) の「格助詞「ニ」とその周辺に存在する「に」、また、周辺に存在する「に」同士の間に見られる関係性はいかなるものか」の答えを示すものとして、格助詞を中心に記述してきた従来の「に」の捉え方、そして、本研究で明らかとなった現代日本語の「に」の様相から見られる格助詞と「に」同士の関係性について述べる。

まず、従来の研究では、「に」をどのように位置付けてきたのかを図 1 に示す。以下の図 1 は、格助詞とは捉えられない「に」を格助詞から説明しようとした従来の観点で現代日本語の「に」を捉えた場合を図示したものである。実線の矢印は捉え方の方向を示す。

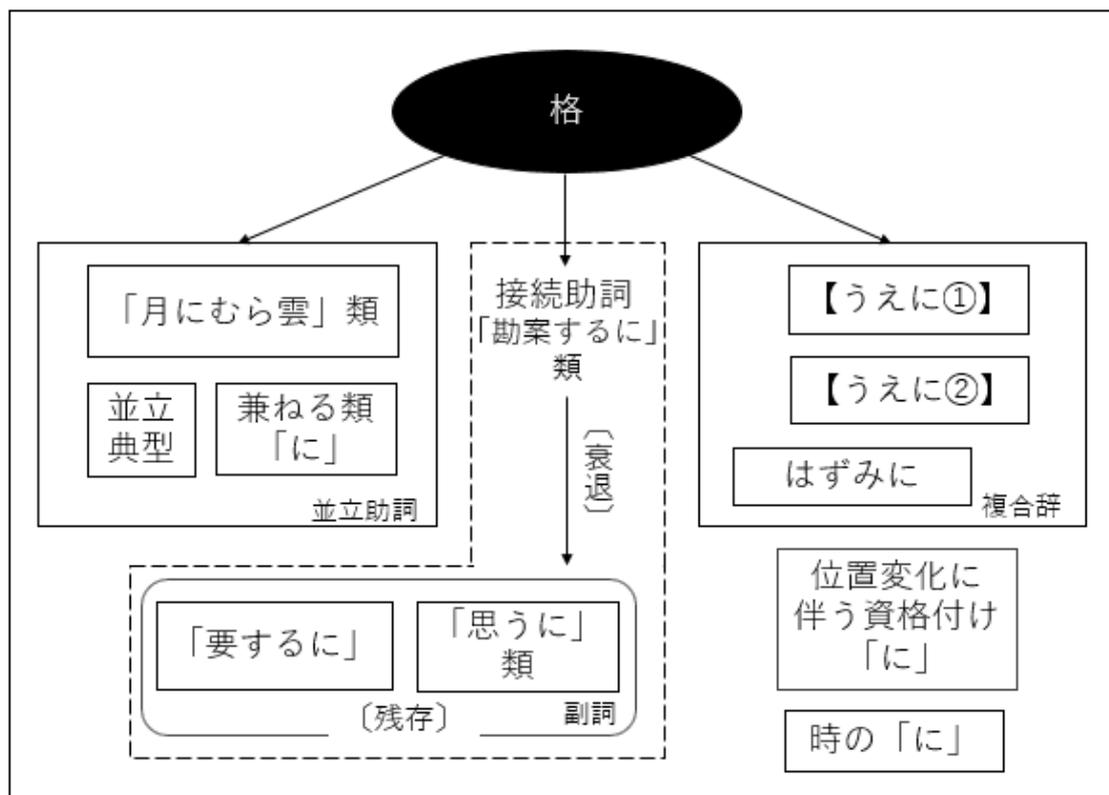


図1 従来の観点で捉えた現代日本語における「に」

このような格からの捉え方では、格との関連性がないか、もしくは、関係が薄いと考えられる「に」の位置付けは極めて困難である。例えば、接続助詞「に」は、点線で囲んでいるが、従来の研究で衰退しているとされていたものである。本研究が示したように、「勘案するに」類などは現代語にも残っているのであるが、格から捉えようとしていたために、「勘案するに」類のような格との関係性が見出しにくいものは衰退したものと捉えられていたと考えられる。また、「要するに」「思うに」類は、それらを副詞とするもの（国立国語研究所（1951）など）や接続助詞「に」の名残として捉えるもの（京極 1987）など、観点が一致しない。本研究で明らかとなったように、どちらにしても、「要するに」「思うに」類を同類に入れることには問題がある。そして、従来の研究では、「に」の詳細を分析することなく、格助詞の意味（あるいは、意義素）で議論している。そのため、並立助詞の範疇のなかに、並立助詞と捉えられないものが混在してしまうという問題が生じていた。加えて、複合辞に関しても、複合辞を形成する

「に」を一律に取り扱う傾向が生じたものと思われる。

以上のように、「に」の記述という観点で見ると、既存の枠組みでは「に」を十全に捉え切れないことが確認できる。

本研究は、格助詞「に」から見ていく従来の観点とは異なるアプローチを試みるものである。以下の図2は、本研究の結論とも言えるが、図1のような格からのアプローチでは限界があることが明らかである。

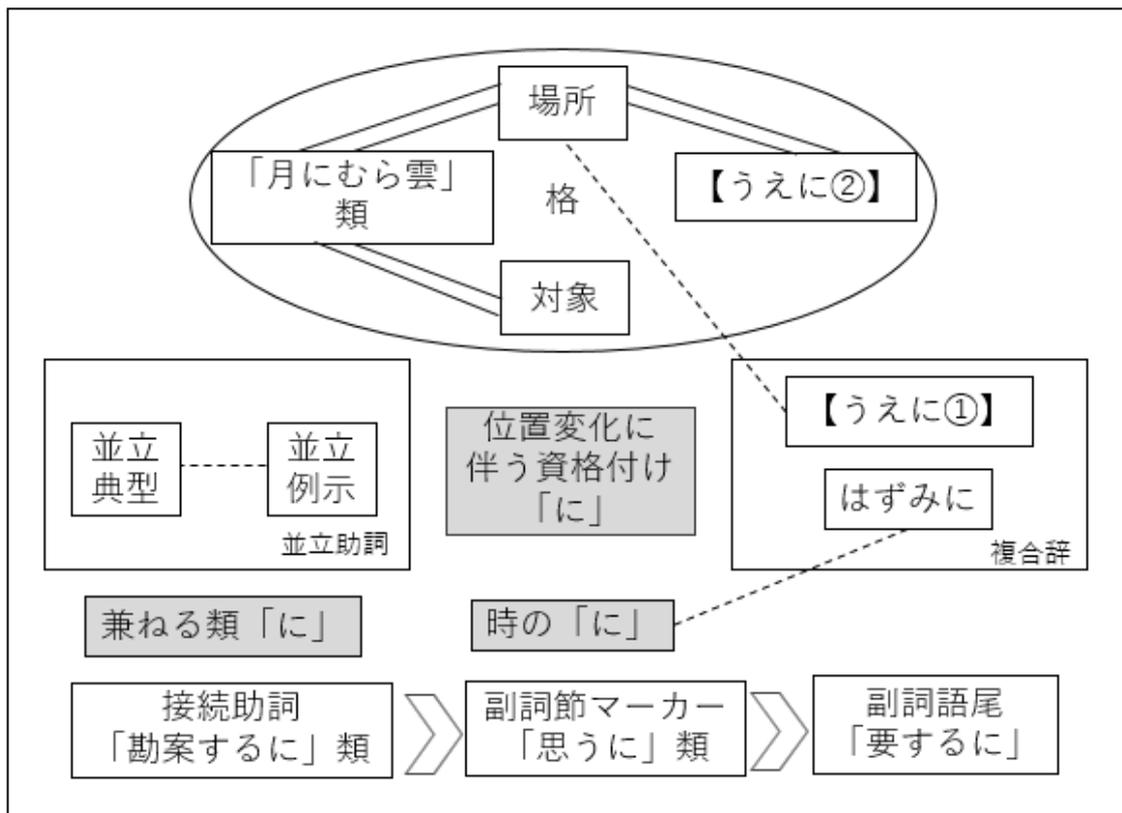


図2 現代日本語における「に」の様相¹

図2は、現代日本語における「に」の用法の広がり、および、格助詞と周辺の

¹ 二重線「=」は等価を、点線「---」は繋がれているもの同士が関係性を有することを、不等号「≫」は節性の大きさを意味する。なお、網掛けのものは今後の課題であるが、暫定的に位置付けている。そして、「並立典型」「並立例示」は、それぞれ、典型的並立助詞「に」と例示を表す並立助詞「に」である。

「に」の関係、さらに、周辺の「に」同士の関係を示している。

並立助詞 1 つを取ってみても、従来は単に格との関連性で位置付けられていたが、「月にむら雲」類は、場所の「ニ」、対象の「ニ」として捉えるべきものであることを明らかにし、格のなかに位置付けた。加えて、並立助詞「に」の 2 つの用法のうち、例示を表す用法は今まで取り上げられることすらなかったものであり、用法の広がり確認できた。なおかつ、2 つの用法間には、通時的観点からの考察も必要であるが、共時的な用法間の関連性も見られた。

複合辞に目を向けてみると、従来の研究では一律に格助詞と関連付けて論じられていたものが、語によって格助詞「ニ」と関連付けられるものと、そうでないものが存在することが明らかとなった。

さらに、接続助詞、および、それと関連する形式については、今まで指摘のなかった接続助詞の「に」を正しく位置付け、同じく接続助詞の名残として、もしくは、副詞として分類されていたもの同士でも異なる範疇に入れるべきであると捉えた。そして、これらには、節性の大きさという点で関連性を見出せる。また、図 2 では、接続助詞「に」は、現代語においては格から切り離して捉えられることも示している。

「兼ねる」類と共起する「に」は、格とも、並立助詞とも、資格の「に」とも独立したものとして位置付けられる。既存の枠組みでは捉え切れないような「に」の存在は、今後の「に」の研究の方向性を考えるうえでも示唆的なものと言えよう。

本研究では、現代日本語における「に」の一部を位置付けたに過ぎないが、一つ一つの要素を位置付けていくことにより、現代日本語において格助詞「ニ」と関連付けられるものと、そうでないものを明らかにすることができた。さらに、格の周辺にある「に」同士がどのような関係性を有するのかについても論じることができた。

以上のように、格の周辺から見ていく本研究のアプローチにより、格から説明を与えるという一方的な見方では見えてこなかった「に」の側面が明らかになり、従来のアプローチでは的確に捉えることのできなかつた「に」を正しく位置付けることが可能となった。

7.4 本章のまとめ

本章では、前章までで行ってきた個々の「に」に関する議論をまとめ、現段階での現代日本語における「に」の全体像を提示した。

本研究の成果として、従来の格を中心に見ていくというアプローチでは捉え切れなかった「に」の側面を記述することができたことが挙げられる。本研究の冒頭で掲げた3つの課題に対し、本研究では、現代日本語において「に」はかなりの用法の広がりをもっており、その「に」には、二格と繋がりを有するものと有さないものが存在し、さらに、「に」同士の間でも共時的な用法間の関連性を有すると捉えられるものや節の大きさで関係性を有するものなど、別々に見えるもの同士でも繋がりを見出せることを明らかにした。

しかし、上述した既存の枠組みでは位置付けが困難な「兼ねる」類と共起する「に」、和氣（2002、2006）の「位置変化に伴う資格付け」の「に」、時の「に」を含む「に」の多様性を考えると、本研究の成果は、現代日本語における「に」の一部を示したにすぎないと言える。本章で提示した図2をより正確なものにしていくためには、上述の「に」に加え、「それぞれに」「別々に」のような、名詞と見られるものに結合し全体として副詞的に機能するタイプの副詞語尾の「に」なども扱っていかなくてはならない。今後は、このような「に」を、体系全体を明らかにしていくための材料として、検討していかなければならない。

第8章 結論

8.1 本研究の問題意識と各章のまとめ

本研究では、通時的・共時的に格助詞「ニ」と関係性を有するとされてきた「に」を取り上げ、それぞれが現代日本語においてどの程度関係性を有しているのかを共時的な観点で捉え、現代日本語における「に」の様相を明らかにすることを目的とした。

従来の研究の主要な問題としては、第一に、格助詞「ニ」の意味役割についての記述が中心であったこと、第二に、格助詞と捉えられない「に」を一括して格助詞「ニ」との関連性で説明しようとするものが多かったこと、第三に、これまでに「に」を包括的に記述しようとした研究が少ないこと、が挙げられる。

本研究は、このような問題を背景に、現代日本語における「に」には、もはや、格助詞との関連性を有さないものが存在する可能性があるという視点を導入して、「に」の体系を構築するための新しいアプローチを試みたものである。具体的には、従来、ほとんど扱われることのなかった並立助詞「に」、接続助詞「に」、複合辞を形成する「に」、「兼ねる」類文と共起する「に」、つまり、格助詞「ニ」の周辺に位置付けられるような「に」を取り上げ、検討した。

以下、第2章以降の各章をまとめる。

第2章では、助詞「に」を総体的に見ている研究、並立助詞「に」の研究、接続助詞「に」の研究、そして、複合辞の構成要素の「に」に関する研究を概観した。従来の研究の主要な問題としては、「に」の出現する環境と関係なく、「に」の出自を格助詞「ニ」とするものや、格助詞「ニ」の意味で「に」全体を

説明できるとする見方が多いことを指摘した。

第 3 章では、並立助詞の「に」について論じた。従来の研究では、並立助詞として扱われている「に」の用法の範囲が一致していないこと、なおかつ、並立助詞一般が持つ名詞の入れ替えが可能という特徴を有さないものが混在していることを問題点として指摘した。従来、並立助詞と扱われてきた「月にむら雲」類は、2 つの名詞を並べた「N₁に N₂」という形で現れるため、一見すると、並立助詞と同じ構造をしているように見える。しかし、そこで表現されている事柄を考えると、並立助詞と同じ形を取るものの、係り先は省略された述語であることが分かる。つまり、「月にむら雲」類は、慣用句に見られる一般的な性質として「に」の係るべき述語が省略されているだけのものであり、また、並立助詞には付与できない「は」の付与を許すことから、本研究では、このようなタイプにおける「に」を述語が省略されている格助詞「ニ」と捉えた。さらに、本章では、並立助詞と捉える基準として「名詞を列挙し、全体を 1 つの名詞として機能させること」「名詞が入れ替えられること」の 2 つを設け、これに従って並立助詞「に」の用法を 2 つに分類した。第 1 の用法は、「典型的並立助詞」である。これは、他の並立助詞と同じ特徴を有する典型的な並立助詞の用法であり、この「に」は「添加」の機能を果たす。第 2 の用法は、「年末年始は、帰省に旅行にクルマの移動が増える季節」のように最後尾の名詞に「に」が付くものであり、この形式は従来指摘のなかったものである。この用法は、例示の機能を有するものであり、全体で一つの名詞としては機能しないという点で、第 1 の用法と異なる特徴を持つ。例示を表す「に例示句」は、文脈に依存して文中の名詞句などと「要素－母集合」の関係を示す。従来、「に」と類似するものとして比較されていた並立助詞「と」は例示の用法を持たないが、なぜ例示の用法が「と」には生じなかったのか、という問いについては、「と」が名詞句内でしか機能できないのに対し、「に例示句」は名詞句の外側に生起していることが影響していることを述べた。

第 4 章では、現代日本語においては衰退していると指摘されている接続助詞の「に」について論じた。本章では、接続助詞の「に」がどのような形で現代語に残っているのかを明らかにするため、同じく動詞終止形に「に」の付く「勘案するに」類、「思うに」類、「要するに」を取り上げ、検討を行った。「思うに」類は、「要するに」などと同じく副詞とされる傾向にあり、また、「思うに」類

と「勘案するに」類は、一見すると同じ構造を持つように見えるが、これらを区別なく扱うことに問題があることを指摘した。この 3 つの形式がそれぞれ異なるものであることを明らかにするために、各形式に対し、「主語のガ格が取れる」「主語のガ格以外の項を節内を取れる」「他の接続助詞（「と」「ば」）との置き換え」「マス形への変化」という 4 つのテストを行った。その結果、「勘案するに」類は上記の 4 つのテストすべてを許容するのに対し、「要するに」は 4 つのテストすべてを許容しない。そして、「思うに」類は、主語のガ格が取れる、マス形に置き換えられるという点では「勘案するに」類と共通点を持つ一方で、主語のガ格が省略できるという点では、主語のガ格が取れない「要するに」と共通点を持っており、「勘案するに」類と「要するに」の中間的な性質を示すものと捉えられることを論じた。加えて、上記のテストから明らかになった特徴から、「勘案するに」類の「に」は接続助詞の「に」、「思うに」類の「に」は副詞節マーカーの「に」、そして「要するに」は副詞語尾の「に」であることを明らかにした。さらに、「勘案するに」類、「思うに」類、「要するに」における「に」には、「「勘案するに」類（接続助詞の「に」）>「思うに」類（副詞節マーカーの「に」）>「要するに」類（副詞語尾の「に」）」という節性の大きさに関する共時的連続性が認められることを主張した。

第 5 章では、「に」の記述という観点からすると、複合辞を形成する「に」の従来の捉え方には問題点が多いことを指摘するために、具体的な事例として「はずみに」と「うえに」を取り上げ、分析を行った。「はずみに」は、従来、「はずみで」とともに複合辞とされることが多く、両者の意味用法もほぼ同様のものとして扱われてきた。しかし、本章では、構文的にも意味的にも同じものとは捉えられないことを指摘し、「はずみに」は時の「に」と関係する複合辞であるのに対し、「はずみで」は「名詞（はずみ）＋デ」の内部構造を有するものであり、その構成要素の「デ」は、連体修飾を承ける場合は原因の「デ」、単独で機能する場合は様態の「デ」を表す格助詞であることを示した。また、「うえに」は、従来、複合辞としての用法が 2 つあるとされてきたが、一方は複合辞としての用法、もう一方は「名詞（うえ）＋ニ」であることを主張した。加えて、「うえに」における「に」は、場所の「ニ」と関連付けられ、場所の「ニ」・「名詞（うえ）＋ニ」、複合辞「うえに」の順で、場所性が弱くなると捉えられること

を論じた。従来の研究では、形式と意味が類似するもの、もしくは、一形式内の用法については、詳細な検討を行わず複合辞として認定されてきた。しかし、「はずみに」と「うえに」の議論から、「はずみに」「はずみで」のように形式間で意味が類似するもの、もしくは、「うえに」のように 1 つの形式が複数の用法を有するもの、といった何らかの共通性を持つ形式であっても、複合辞の認定に関しては、個々の語について議論を要すること、また、複合辞を形成する「に」に関しても、一律に格助詞か否かで捉えるのではなく、複合辞ごとに「に」の性質を論じる必要があることが明らかとなった。

第 6 章では、第 3 章で触れた「兼ねる」類文と共起する「に」について論じた。「兼ねる」類文と共起する「に」は、先行研究では、並立助詞の「に」と扱われていたが、並立助詞としても、格助詞「ニ」としても捉えられないことを指摘した。具体的には、「兼ねる」類文と類似点を有する〈N₁ヲ N₂ニ〉構文（村木 1983、1991）、〈資格〉ニ句（和氣 2006）との比較を行い、「兼ねる」類文と共起する「に」が従来指摘されているどの「に」とも異なるものであることを主張した。統語範疇が明らかでないこのような「に」の存在は、時の「に」なども含め、未解明な「に」がまだ残されていることを示唆している。「に」の体系の詳細を描くためには、今後、このような「に」を一つ一つ位置付けていくことが不可欠となる。

第 7 章では、これまでの議論に基づき、現代日本語における「に」がどのような様相を呈するのかについて論じた。従来は、格助詞「ニ」を中心に置いて「に」を説明しようとするものや、「に」を格助詞からの派生・転化と見る立場に立つ研究がほとんどであった。本研究は、格助詞「ニ」からの視点では、その周辺に位置付けられる「に」を含む「に」の全体像を説明することはできないという観点から、格助詞「ニ」の周辺に存在するものから検討していくというアプローチで現代日本語の「に」を検討した。その結果、現代日本語の「に」の用法はかなりの広がりを見せており、格助詞「ニ」とは関係性を持たないものも存在していることが明らかとなった。

以上、各章ごとに本研究で得られた結論を述べた。

本研究で得られた最も大きな成果は、周辺に位置付けられるような「に」からアプローチすることによって、従来、取り上げることすらなかった「に」までを

正しく位置付けることができた点が挙げられる。これは、今後、「に」を通時的・共時的にどう捉えるべきかを考えるための基盤となると考える。

8.2 今後の課題および展望

本研究における主な目的は、従来、個別に研究されてきた「に」を総合的に論じ、最終的には、形式としての「に」の全体像を描くことであった。全体像を描くためには、まだ、解決すべき課題は多く残されている。

第5章では、複合辞の「はずみに」と「うえに」について検討したが、「に」を構成要素とする複合辞は、数多く存在する。複合辞の「に」の由来には、「名詞+に」と「名詞+ニ」が考えられるが、「に」あるいは「ニ」のどのような意味役割がよく用いられるのか、といった点に関しては、未だ明らかになっていないため、検討の余地を残していると言える。また、このような問題については、他の格助詞が成す複合辞に関しても同様の指摘が可能である。今後は、他の形式についても詳細な分析を行い、本研究で取り扱った「はずみに」と「うえに」の結果と比較していくことが必要である。

また、本研究では、「はずみに」の記述の際に触れるだけとなってしまったが、未だ位置付けが明確となっていない「に」として、時の「に」が挙げられる。時の「に」については、「に」の出現の有無の違いを前接名詞の性質に求め、時間名詞を分類するもの（中村 1996、丹保 2010 など）や、時の「に」を格助詞「ニ」と捉え、「デ」格との交替について検討するもの（岩崎 1995 など）など、様々な観点の研究が存在している。本研究は、第7章で暫定的な捉え方として示したが、和氣（2002）を踏襲した「時の「に」」という、格助詞とは考えない立場をとる。和氣（2002）は、「時のニ句」としているが、状況設定機能を果たすという点で、当該の「に」が「結果相を修飾する付加的な成分に付く「に」」に属する可能性について触れている。その詳細な分析については課題とされているが、「「に」成分の第4番目の機能として、文があらわすできごとの外的状況を設定する成分としての機能があるとも考えられる（p.117）」と述べているように、時の「に」を格助詞と捉えないとしても、さらなる分析の余地を残していると考えられる。

また、第6章で触れた、「兼ねる」類文と共起する「に」も、和氣（2002、

2006) で「何らかの名詞句」とされている「位置変化に伴う資格付け」の「に」も、本研究では、暫定的な位置付けしかできなかった。「に」の全体像を構築するためには、時の「に」、「位置変化に伴う資格付け」の「に」、「兼ねる」類文と共起する「に」のような格と捉えられないものと、二格との品詞論上の関係について、さらに検討を重ねていかななくてはならない。

加えて、日本語の「に」に当たる、韓国語の助詞“e”との対照研究も今後の課題の一つとして挙げることができる。例えば、本研究の並立助詞「に」と同様に、韓国語でも最後尾の名詞に“e”が現れる¹。

- (1) 옷-에 가방-에 그녀-의 방-은 물건들-로 넘쳐났다.
 ot-e gabang-e geunyeo-ui bang-eun mulgeondeul-lo neomchyeonatda.
 服-に カバン-に 彼女-の 部屋-は もの-で 溢れていた。
- (2) 할아버지-에 삼촌-에 친척들-이 공항-까지 배웅해주었다.
 harabeoji-e samchon-e chincheokdeur-i gonghang-kkaji
 baeunghaejueotda.
 祖父-に 叔父-に 親戚-が 空港-まで 見送ってくれた。

(1) (2) から、韓国語にも例示を表す「に」相当のものが存在することが分かる。これと関連し、第 3 章では、以下 (3) (4) ような母集合の有無に関する問題について述べた。韓国語の“e”は、(1) と (2) では日本語と同様の振る舞いを見せるが、母集合の有無が関わると振る舞いが異なるようである。(3) は韓国語でも非文であるが、(4b) は完全に自然な文であるとは判断しがたく、(4c) のように「夢のために」を挿入すると自然な文となる。

- (3) a. *ビールに焼酎に、Ø 買った。
 b. *맥주-에 소주-에, Ø 샀다.
 maegju-e soju-e, Øsassda.

¹ 韓国語のローマ字表記は、「国語のローマ字表記法（文化観光部考試第 2000-8 号）」に従う。“e”を含め、助詞の前にはハイフンを入れている。

(4) a. ぼくは毎日勉強にスポーツに、 \emptyset 頑張っているよ。

b. ??나-는 매일 공부-에 스포츠-에, \emptyset 힘쓰고 있어.

na-neun maeil gongbu-e seupocheu-e, \emptyset himsseugo isseo.

c. 나-는 매일 공부-에 스포츠-에, 꿈-을 위해 힘쓰고 있어.

na-neun maeil gongbu-e seupocheu-e, kkum-eul wihae
himsseugo isseo.

ぼく-は 毎日 勉強-にスポーツ-に、夢のために 頑張っているよ。

(1) ~ (4) のような現象において、日本語と韓国語で並立助詞としての現れ方は同じなのか、母集合の有無による差ほどの程度のものなのか、また、このような事実は、日本語より韓国語の方が述語句の条件に制約があることを意味するのか、などの研究が必要である。

さらに、(1) と (2) に関しては、“e” の機能について再検討する必要がある。(1) はモノ名詞の並立、(2) はヒト名詞の並立である。日本語では、「に」という 1 つの形式しか存在しないが、韓国語は、前接名詞の「±有生性」によって“e”と“ege”の 2 つの形式が存在する。前接名詞が「+有生性」であれば“ege”、「-有生性」であれば“e”で現れる。しかし、並立助詞として機能する場合は、(2) のように前接名詞が「+有生性」の場合でも“e”で現れ、“ege”が現れることはない。安 (2011) では、与格助詞“e”が有性物を取って現れることがあることについて指摘した。並立という機能が“e”の性質に影響しているのか、それとも、“e”が「+有生性」を取るための条件があるのかなど、韓国語内の問題とも関連するところは多い。

本研究で対象とした、周辺に位置する「に」と同様、“e (ege)” の周りに位置する、もしくは、“e (ege)” に内在する用法について検討することによって、韓国語の“e (ege)” の広がりを見出すことが可能になると考えられる。さらに、日本語と韓国語は、単に、文法の面で類似すると説明されてしまうことも多々あるが、類似しているからこそ際立つ微細な異なりに着目した韓国語の分析は、日本語の分析にも還元できると考える。

今後は、日本語の「に」の分析でまだ残されている課題を解決するとともに、韓国語にも視野を広げ、研究を進めていきたい。

【参考文献】

- 青木伶子（1977）「所謂副詞語尾の「に」について」松村明教授還暦記念会
（編）『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』 pp. 949-968、明治書院
- 浅山佳朗（1999）「感情動詞の補足語の格と感情形容詞」『神奈川大学言語研
究』22、pp. 57-72、神奈川大学
- 安部朋世（1997）「〈名詞＋数量詞＋助詞〉型の数量詞」『筑波日本語研究』2、
pp. 99-116、筑波大学
- 安祥希（2011）「韓国語の与格助詞“ege”とその代用形態—意味機能及び生起
条件について—」『筑波応用言語学研究』18、pp. 111-125、筑波大学
- 安平鎬（1996）「自動詞文における格の代換について—「発生」と「移動変化」
をめぐって、「あふれる」を中心に—」『日本語と日本文学』23、筑波大学
- 市川保子（1991）「並立助詞「と」と「や」に関する一考察」『文藝言語研究
言語篇』20、pp. 61-79、筑波大学
- 井上和子（2009）「現象文とその周辺」 *Scientific Approaches to Language* 8、
pp. 43-68、神田外語大学
- 岩崎卓（1995）「ニとデ一時を表す格助詞—」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本
語類義語表現の文法（上）単文編』 pp. 74-82、くろしお出版
- 岩田美穂（2007）「例示を表す並列形式の歴史的変化—タリ・ナリをめぐって
—」青木博史（編）『日本語の構造変化と文法化』 pp. 93-113、ひつじ書房
- 岩田美穂（2012）「引用句派生の例示」高山善行・青木博史・福田嘉一郎（編）
『日本語文法史研究1』 pp. 145-163、ひつじ書房
- 岩田美穂（2014）「例示並列形式としてのトカの史的変遷」益岡隆志・大島資
生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦（編）『日本語複文構文の研究』
pp. 323-346、ひつじ書房
- 江口正（1998）「日本語の間接疑問節の文法的位置づけについて—不定的同格要
素として—」『九大言語学研究室報告』19、pp. 5-24、九州大学
- 大島中正（1993）「動詞述語文における場所名詞のニ格とデ格」『同志社女子大
学学術研究年報』44-4、pp. 478-500、同志社女子大学
- 大島資生（2010）『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房
- 大曾美恵子（2001）「感情を表わす動詞・形容詞に関する一考察」『言語文化論

- 集』22-2、pp. 21-30、名古屋大学
- 大坪併治（1970）「と・や・やら・に・か・なり・の（だの）・たり」『國文學
 解釋と鑑賞』35-13、pp. 47-53、至文堂
- 岡智之（2005）「場所的存在論による格助詞ニの統一的説明」『日本認知言語学
 会論文集』5、pp. 12-22
- 奥田靖雄（1976）「言語の単位としての連語」『教育国語』45、pp. 2-13、むぎ
 書房
- 奥津敬一郎（1985）「不定詞同格構造と不定詞移動」『都大論研』22、pp. 1-12、
 東京都立大学（『拾遺 日本文法法論』ひつじ書房（1996）に再録）
- 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武（1986）『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 川野靖子（2002）「現代日本語の格交替に関する研究—位置変化と状態変化の接
 点—」筑波大学博士（言語学）学位論文
- 川野靖子（2006）「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象
 —格成分の対応の仕方—」『日本語の研究』2-1、pp. 32-47
- 菊地朗（1991）「日本語の二次述部」安井稔博士古稀記念論文集編集委員会
 （編）『現代英語学の歩み』pp. 212-220、開拓社
- 菊地康人（1990）「「XのYがZ」に対応する「XはYがZ」文の成立条件—あわ
 せて、＜許容度＞の明確化—」国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会
 （編）『文法と意味の間』pp. 105 - 132、くろしお出版
- 岸本秀樹（2001）「二重目的語構文」影山太郎（編）『日英対照 動詞の意味と
 構文』pp. 127-153、大修館書店
- 京極興一（1987）「接続助詞「に」「を」「が」の成立と展開」山口明穂（編）
 『国文法講座 3 古典解釈と文法』pp. 190-223、明治書院
- 楠本徹也（2002）「「を」格における他動性のスキーマ」『東京外国語大学留学
 生日本語教育センター論集』28、pp. 1-12、東京外国語大学
- 工藤和也（2015）「日本語 3 項動詞文の統語構造」『龍谷紀要』36-2、pp. 75-89、
 龍谷大学
- 工藤浩（1978）「『注釈の副詞』をめぐって」『国語学会昭和 53 年度春季大会
 予稿集』東京女子大学
 (<http://www.ab.cyberhome.ne.jp/~kudohiro/tyuusyaku.html>)

- 工藤浩（1982）「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『研究報告集 3』 pp. 45-92、国立国語研究所
- 工藤浩（1997）「評価成文について」川端善明・仁田義雄（編）『日本語文法体系と方法』 pp. 55-72、ひつじ書房
- 工藤浩（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法 3 モダリティ』 pp. 163-234、岩波書店
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 国広哲弥（1962）「日本語格助詞の意義素試論」『島根大学論集 人文科学』12、pp. 81-92、島根大学（『構造的意味論—日英両語対照研究—』三省堂（1967）に再録）
- 国広哲弥（1967）「‘And’ と『と・に・や・も』—日英両語語彙の比較—」『言語研究』50、pp. 34-49（『構造的意味論—日英両語対照研究—』三省堂（1967）に再録）
- 久野暁（1973）『日本文法研究』大修館書店
- グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』秀英出版
- 国立国語研究所（2004）『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書
- 此島正年（1966）『国語助詞の研究 助詞史の素描』桜楓社
- 此島正年（1983）『助動詞・助詞概説』桜楓社
- 小林茂之（2000）「ニ格名詞句とヲ格名詞句の語順の要因について—新聞記事全文コーパスに基づく—分析—」『都留文科大学研究紀要』52、pp. 105-124、都留文科大学
- 小林英樹（1995）「「NトN（ト）」と「NヤN」」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義語表現の文法（上）単文編』 pp. 83-86、くろしお出版
- 小矢野哲夫（1983）「副詞の呼応—誘導副詞と誘導形の一例—」渡辺実（編）『副用語の研究』 pp. 216-232、明治書院
- 佐久間鼎（1940）『現代日本語法の研究』厚生閣
- 佐藤響子（1997）「ニ格名詞句をとる心理動詞」『横浜市立大学論叢 人文科学』

- 系列』48、pp. 117-138、横浜市立大学
- 澤田治美（1993）『視点と主観性—日英語助動詞の分析—』ひつじ書房
- 清水康行（1987）「格の表現」山口明穂（編）『国文法講座6 時代と文法—現代語—』pp. 252-279、明治書院
- 荘司育子（2012）「助詞「に」の統語的性質について—補文化辞の観点から—」『日本語・日本文化』38、pp. 81-99、大阪外国語大学
- 城田俊（1993）「文法格と副詞格」仁田義雄（編）『日本語の格をめぐる』pp. 67-94、くろしお出版
- 菅井三実（1997）「格助詞「で」の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』43、pp. 23-40、名古屋大学
- 菅井三実（2000）「格助詞「に」の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要（第2分冊）』20、pp. 13-24、兵庫教育大学
- 菅井三実（2001a）「現代日本語の「ニ格」に関する補考」『兵庫教育大学研究紀要（第2分冊）言語系教育・社会系教育・芸術系教育』21、pp. 13-23、兵庫教育大学
- 菅井三実（2001b）「「ニ」の意味役割についての素描」『兵庫教育大学近代文学雑誌』12、pp. 35-47、兵庫教育大学
- 菅井三実（2004）「格の体系的意味分析と分節機能」『認知言語学論考』4、pp. 95-131、ひつじ書房
- 杉岡洋子（1992）「心理述語についての考察」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』24、pp. 361-373、慶応義塾大学
- 杉本武（2005）「日本語複合格助詞の格体系における位置づけについて」*KLS* 25、pp. 206-215、関西言語学会
- 杉本武（2013）「複合助詞の品詞性について—名詞を構成要素とする複合助詞を例に一」藤田保幸（編）『形式語研究論集』pp. 87-103、和泉書院
- 須藤佳子（2013）「「5-0 と圧勝した」タイプの「と」の用法について」『日本語学会2013年度秋季大会予稿集』pp. 117-122、日本語学会
- 砂川有里子（2000）「空間から時間へのメタファー—日本語の動詞と名詞の文法化—」青木三郎・竹沢幸一（編）『空間表現と文法』pp. 105-142、くろしお出版

- 高橋雄一（2015）「評価成分を作る「ことに」と「もので」についての一考察」
『専修人文論集』97、pp. 243-273、専修大学
- 竹沢幸一（1991）「場所、着点および二次的述語の「に」」安井稔博士古稀記念
論文集編集委員会（編）『現代英語学の歩み』pp. 232-242、開拓社
- 竹沢幸一（1995）「「に」の二面性」『言語』24-11、pp. 70-77、大修館書店
- 竹沢幸一（1998）「格の役割と構造」中右実（編）『日英語比較選書9 格と語順
と統語構造』pp. 1-10、研究社
- 竹沢幸一（1999）「空間表現の統語論—「叙述」の観点から—」『文部省科学研究
費補助金基盤研究(A)(2)研究成果報告書「空間表現の文法化に関する総合
的研究」』（研究代表者：竹沢幸一）pp. 91-121、筑波大学
- 竹沢幸一（2000）「空間表現の統語論—項と述部の対立に基づくアプローチ—」
青木三郎・竹沢幸一（編）『空間表現と文法』pp. 163-214、くろしお出版
- 田中寛（1998）「「を」格と「に」格の交替性について」『語学教育研究論叢
15』pp. 191-209、大東文化大学
- 田中寛（1999）「接続助詞化した形式名詞「ウエ」の意味と機能」『語学教育研
究論叢』16、pp. 145-165、大東文化大学
- 田中寛（2001）「接続助詞化した形式名詞「ウエ」の意味と機能」『日本語複文
表現の態様—視点と表現意図をめぐって—』pp. 257-272、田中研究室（私家
版）
- 田中寛（2010）『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
- 田中瑞枝（2014）「格助詞「に」の多義性に関する認知的考察—通時的考察を
基盤に—」『日本認知言語学会論文集』14、pp. 299-311
- 丹保健一（2010）「時間名詞の特性に関する一考察—格助詞「に」との共起に注
目して—」『三重大学教育学部研究紀要』61、pp. 39-47、三重大学
- 塚本秀樹（1991）「日本語における格助詞の交替現象について」『愛媛大学法文
学部論集』24、pp. 103-127、愛媛大学
- 寺村秀夫（1973）「感情表現のシンタクス—「高次の文」による分析の一例—」
『言語』2-11、pp. 18-26、大修館書店
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 くろしお出版
- 中右実 (1980) 「文副詞の比較」 國廣哲彌 (編) 『日英語比較講座 2 文法』
pp. 157-219、大修館書店
- 中俣尚己 (2008) 「日本語のとりたて助詞と並列助詞の接点—「も」と「とか」
の用法を中心に—」 『言語文化学研究 言語情報編』 3、pp. 153-176、大阪府
立大学
- 中俣尚己 (2009) 「名詞句並列マーカ―の体系的分析—「と」・「や」・「も」
の差異に着目して—」 『日本語の研究』 5-1、pp. 31-45
- 中俣尚己 (2015) 『日本語並列表現の体系』 ひつじ書房
- 中村ちどり (1996) 「時の状況語における「に」の生起要因—名詞の意味の観点
から—」 『東北大学留学生センター紀要』 3、pp. 41-50、東北大学
- 仁田義雄 (編) (1993) 『日本語の格をめぐって』 くろしお出版
- 仁田義雄 (1995) 「格のゆらぎ」 『言語』 24-11、pp. 20-27、大修館書店
- 仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人 (2000) 『日本語の文法 1 文の骨
格』 岩波書店
- 橋本修 (1994) 「「の」補文の統語的・意味的性質」 『文藝言語研究 言語篇』
25、pp. 153-166、筑波大学
- 橋本進吉 (1934) 「國語法要説」 『國語科學講座—VI—國語法』 pp. 1-81、明治
書院
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001) 『日本語文法 セルフマスターシリーズ 7
条件表現』 くろしお出版
- 長谷部亜子 (2013) 「多義語ウエの意味の分析—空間名詞・形式名詞・複合辞と
してのウエ—」 『日本認知言語学会論文集』 13、pp. 63-75
- 馬場俊臣 (2005) 「接続助詞的用法の複合辞「うえで、うえは、うえに、うえ」
—統語的特徴の整理と各用法の關係を中心として—」 『北海道教育大学紀要
(人文科学・社会科学編)』 55-2、pp. 27-42、北海道教育大学
- 方允炯 (2004) 「接続助詞化した「～うえで」形式の意味・機能」 『待兼山論叢
日本学篇』 38、pp. 1-16、大阪大学
- フォード順子 (1993) 「具体化の「と」による修飾の特徴について」 『日本語教
育』 80、pp. 146-157

- 藤田保幸 (1999) 「項目列記の「～ト」表現の本質」『滋賀大学教育学部紀要Ⅱ 人文・社会科学』48、pp. (35)-(48)、滋賀大学
- 藤田保幸 (2015) 「複合辞「～拍子に」について」『龍谷大学国際センター研究年報』24、pp. 59-74、龍谷大学
- 馬小兵 (1997) 「「立場・資格」を表す「として」の用法について—「に・で」との比較を中心に—」『筑波日本語研究』2、pp. 89-98、筑波大学
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』くろしお出版
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
- 益岡隆志 (1997) 『新日本語文法選書 2 複文』くろしお出版
- 松尾拾 (1970) 「を・に・へ・と」『國文學 解釋と鑑賞』35-13、pp. 33-41、至文堂
- 松木正恵 (1990) 「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2、pp. 27-52、早稲田大学
- 松木正恵 (1992) 「複合辞性をどうとらえるか—現代日本語における複合接続助詞を中心に—」辻村敏樹教授古稀記念論文集刊行会 (編) 『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』pp. 590-606、明治書院
- 松木正恵 (2011) 「接続関係を表示する複合辞的表現—名詞性接続成分のタイプから見た連体複文構文と連用複文構文の接点—」『NINJAL 共同研究発表会・シンポジウム 平成 23 年度 (2011 年度) 「複文構文の意味の研究」ワークショップ資料』国立国語研究所
- 間淵洋子 (2000) 「格助詞「で」の意味拡張に関する一考察」『国語学』51-1、pp. 15-31
- 三上章 (1963=2002) 『構文の研究』くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 三原健一 (2000) 「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』8、pp. 54-75、国立国語研究所
- 三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』1-3、pp. 61-76
- 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

- 村木新次郎 (1983) 「「地図をたよりに、人をたずねる」という言いかた」 渡辺
実 (編) 『副用語の研究』 pp. 267-292、明治書院
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』 ひつじ書房
- 靱山洋一 (1992) 「多義語の分析—空間から時間へ—」 カッケンブッシュ 寛子・
尾崎明人・鹿島央・藤原雅憲・靱山洋介 (編) 『日本語研究と日本語教育』
pp. 185-199、名古屋大学出版会
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語 1—意味と使い方—』 角川書店
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2—意味と使い方—』 角川書店
- 森田良行 (1984) 『基礎日本語 3—意味と使い方—』 角川書店
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用
法』 アルク
- 森野宗明 (1973) 「格助詞」 鈴木一彦・林巨樹 (編) 『品詞別日本文法講座 9 助
詞』 pp. 108-141、明治書院
- 森本順子 (2011) 「日英語の主観性を表す副詞について」 『ひつじ意味論講座第
5 巻 主観性と主体性』 pp. 211-229、ひつじ書房
- 森山新 (2008) 『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』 ひつじ書
房
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院
- ヤコブセン, ウェスリー・M (1989) 「他動性とプロトタイプ」 久野暲・柴谷方
良 (編) 『日本語学の新展開』 pp. 213-248、くろしお出版
- 矢澤真人 (1997a) 「発生構文と位置変化構文」 『筑波日本語研究』 2、 pp. 1-13、
筑波大学
- 矢澤真人 (1997b) 「語順から構文類型へ」 『筑波大学東西言語文化の類型論特
別プロジェクト研究報告書平成 9 年度 I (PART II)』 pp. 375-380、筑波大学
- 山岡政紀 (1998) 「感情表出動詞文の分類と語彙」 『日本語日本文学』 8、
pp. (1)-(17)、創価大学
- 山川太 (2004) 「日本語における心理動詞の格標示について」 『日本語・日本
文化』 30、 pp. 1-20、大阪外国語大学
- 山口堯二 (1980) 『古代接続法の研究』 明治書院

- 山口堯二 (1988) 「古文における接続表現—順接と逆接—」山口明穂 (編) 『国
文法講座 3 古典解釈と文法—助詞の機能—』 pp. 156-189、明治書院
- 山口堯二 (1996) 『日本語接続法史論』和泉書院
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』宝文館出版
- 吉井健 (1989) 「体言の並立について」『文学史研究』30、pp. 47-56、大阪市立
大学
- 吉永尚 (1998) 「心理動詞の意味特性による分類と人称性」『園田国文』19、pp.
(1)-(11)、園田学園女子大学
- 吉永尚 (2001) 「心理動詞と語彙概念構造」『園田学園女子大学論文集』36、
pp. 109-118、園田学園女子大学
- 吉永尚 (2008) 『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院
- 林璋 (1992) 「助詞の意義と用法—格助詞「に」を中心に—」文化言語学編集委
員会 (編) 『文化言語学 その提言と建設』 pp. 516-530、三省堂
- 和氣愛仁 (2002) 「助詞「に」をともなう成分の研究」筑波大学博士 (言語学)
学位論文
- 和氣愛仁 (2006) 「〈資格〉の二句について」矢澤真人・橋本修 (編) 『現代日
本語文法 現象と理論のインタラクション』 pp. 169-190、ひつじ書房
- 渡辺学 (1995) 「形式名詞と格助詞の相関—単文と複文をめぐって—」仁田義雄
(編) 『複文の研究 (上)』 pp. 27-54、くろしお出版
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房
- Tomihide, Kinuhata, Miho Iwata, Tadashi Eguchi and Satoshi Kinsui (2009)
“Genesis of ‘Exemplification’ in Japanese.” Yukinori Takubo et
al. (eds.) *Japanese/Korean Linguistics Vol. 16*, pp. 87-101, Stanford:
CSLI

【辞書】

- 北原保雄 (編) 『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店、2010年
デジタル大辞泉 (<http://japanknowledge.com>)
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (編) 『日本国語大辞典 第二版』小学館、
2002年

【用例出典】

「青空文庫」 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

「聞蔵ビジュアルⅡ (朝日新聞)」 朝日新聞社

「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」 国立国語研究所

(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)

NINJAL-LWP for TWC (NLT)、筑波大学・国立国語研究所

(<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/>)

各章と既発表論文との関係

第1章 序論

新規執筆

第2章 先行研究

新規執筆

第3章 並立助詞の「に」

安祥希 (2016) 「現代日本語における並立助詞「に」の3用法」『日本語文法』16巻2号、pp.128-143、日本語文法学会

第4章 接続助詞の「に」

安祥希 (2015) 「複文構造と文副詞の接点—動詞終止形に後接する「に」の分析から—」*Ars Linguistica* Vol.22、pp.1-14、日本中部言語学会

第5章 複合辞を形成する「に」

安祥希 (2015) 「「はずみに」と「はずみで」の比較」『言語学論叢』オンライン版 第8号 (通巻34号)、pp.25-36、筑波大学一般・応用言語学研究室 (<http://www.lingua.tsukuba.ac.jp/ippan/TWPL0/>)

安祥希 (近刊) 「「うえに」の内部構造—「うえ」の名詞性と「に」の位置付けを中心に—」『言語学論叢』オンライン版 第9号 (通巻35号)、筑波大学一般・応用言語学研究室 (<http://www.lingua.tsukuba.ac.jp/ippan/TWPL0/>)

第6章 「兼ねる」類文と共起する「に」

新規執筆

第7章 現代日本語における「に」の様相

新規執筆

第8章 結論

新規執筆

(※すべての論文に加筆・修正を施している)